平成20年度　調査研究統一テーマ

「生きる力」をはぐくむ学校教育の創造

教育経営研修班班内共同研究

本県児童生徒に身につけさせたい力と教育活動支援に関する研究

―全国学力・学習状況調査結果並びにこれまでの研究成果を生かして―

平成21年2月
沖縄県立総合教育センター

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の目的 …… 2

Ⅲ　これからの児童生徒に必要な力に関する文献研究 …… 2
1　「生きる力」という目標を共有するに当たって …… 2
2　「生きる力」を育むに当たっての重要な要素 …… 2
3　参考にしたい先行研究 …… 2
4　県教育委員会から出されている全国学力・学習状況調査質問紙調査結果 …… 5
5　「全国学力・学習状況調査」（国）と「生活実態調査」（県）の調査項目の比較 …… 5

Ⅳ　全国学力・学習状況調査「児童・生徒質問紙」調査結果の分析・考察 …… 7
1　基本的生活習慣 …… 7
2　基本的生活習慣に関する考察 …… 17
3　家庭での学習・読書習慣 …… 18
4　家庭での学習・読書習慣についての考察 …… 27
5　自己に関すること …… 29
6　自己に関することの考察 …… 33
7　自然体験や生活体験 …… 34
8　自然体験や生活体験についての考察 …… 37
9　規範意識や思いやり …… 38
10　規範意識や思いやりについての考察 …… 42
11　地域社会とのかかわり …… 43
12　地域社会とのかかわりについての考察 …… 47

Ⅴ　本県指導生徒に身につけさせたい力と教育活動支援 …… 48
1　幼児教育 …… 48
2　健康教育 …… 49
3　道徳教育 …… 50
4　特別活動・学級（学年）経営 …… 52
5　生徒指導 …… 53

Ⅵ　終わりに …… 56

本県児童生徒に身につけさせたい力と教育活動支援に関する研究

－全国学力・学習状況調査結果並びにこれまでの研究成果を生かして－

県立総合教育センター　教育経営研修班

Ⅰ　テーマ設定の理由

平成18年12月に約60年ぶりに教育基本法が改正され，新たに「教育の目標」が第２条に規定された。その中で，「豊かな情操と道徳心」「自律の精神」「正義と責任」「主体的に社会の形成に参画し，その発展に寄与する態度」等の育成が明記されており，その重要性がうかがえる。

その背景には，社会の急激な変化や価値観の多様化，地域や家庭における教育力の問題等に伴い，子ども達を取り巻く様々な課題への早急な対応が求められていることが考えられる。

中学生の生活や価値観について米国・中国・日本の３国の比較を行っている「中学生の生活と意識に関する調査」（平成14年 日本青少年研究所）において「私は価値ある人間だ」と考えている中学生が，中国49.3％，アメリカ51.8％で約2人に１人の割合に対し，日本は8.8％となっており，自らを価値ある人間だと考えるのは10人に１人弱の結果となっている。

「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」（平成19年３月内閣府）によると，「勉強や進学について悩みや心配事がある」と回答した中学生が，平成７年の同調査より14.5ポイント上昇し61.2％，「友達や仲間について悩みや心配事がある」は12ポイント上昇し20％となっている。

児童生徒の問題行動等の現状としては，平成19年度の暴力行為の発生件数は，小・中・高等学校を通じ52,756件となっており，前年度に比べ全ての学校種で増加し，調査開始以来，過去最高の件数となった。平成18年度の不登校児童生徒数は小・中学校共に増加し，特に，中学校の不登校生徒数の割合が2.86％となった。本県においては，暴力行為が平成18年度614件となっており，前年度より２件減少しているものの，対人暴力が小・中学校ともに増加しており懸念される。いじめについては，平成18年度の発生件数が740件で，前年度より377件増加している。また，平成19年度の不登校児童生徒数は1,707人と前年度より５％増加している。

このように，自制心や規範意識の希薄化，生活習慣の確立の不十分さ，いじめやいじめによる自殺，自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない，学習や将来の生活について無気力であったり不安であったりする子どもの増加，人間関係形成の困難かつ不得手さ，本県においては「確かな学力」の定着も含め，課題は山積である。

ところで，東京都小学校道徳教育研究調査部の「自己肯定感の低い子どもほど規則や決められた仕事に反発する傾向や社会的によいと見られていることにも否定的という傾向が見られる」と言う研究報告（平成11年度）や「社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ」（平成15年 広島県立教育センター），平成19年度九州地区教育研究所連盟研究発表大会「道徳部会」における福岡県教育センターの調査研究報告等より、自己肯定感の低い子どもは規範意識も低いとの調査結果が出されている。また，本総合教育センター長期研修員による道徳の研究「規範意識を高める指導の工夫・改善」（平成20年3月）においても，自己肯定感の低い生徒には規範意識の授業が響きにくいという結果が得られた。規範意識を高めるためには，あわせて自己肯定感を高めながら指導・支援を行う方がより効果的であると考えられる。

また，「学習意欲に関する調査研究」（平成13年 国立政策教育研究所）によると，授業が「よく分かるとき」「おもしろいとき」「将来の職業に関心を持ったとき」等に学習意欲が高まるとされ，将来への夢や希望を持たせることも重要だと言える。

しかし，友達や仲間のことで悩みや心配事があったり，学校に居場所が無いと感じる等，様々な問題を抱えていると学習等に対して意欲的・主体的に取り組むことが難しく，学力も高まりにくい。

これらのことから，学習指導と生徒指導は切り離されて指導されるよりも，「生きる力」を育む観点から，統合的に指導・支援することが効果的であり重要だと考えられる。そのため，児童生徒の実態を的確に把握し，「学習意欲と将来の職業」「規範意識と自己肯定感や自己有用感」「基本的生活習慣と学力」等の相関や関連があるもの，これまでの研究で明らかとなっていることを生かして，実態に即した適切な指導・支援を行うことより，教育効果をより高めることができるものと考える。

そこで，平成19年並びに平成20年４月に国（文部科学省）が全国規模で行った全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙調査結果の分析を通して，本県児童生徒の「生きる力」を育むにあたって重要な要素の例

として挙げられている自己理解（自尊・自己肯定）や自己責任（自律・自制），将来設計，人間関係形成，勤労等について，どのような実態にあるのか把握する。そして，本県の児童生徒が抱えている課題やよさを踏まえ，これまでの研究で明らかになった成果を教育活動に生かすための教育活動支援について調査研究し，教職員の研修の場であるセンター研修に生かしたいと考え，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究の目的

国（文部科学省）が行った全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙調査の結果を分析・考察することにより，本県児童生徒の実態を把握し身に付けさせたい力を明らかにする。そして，児童生徒の実態をふまえ，これまでの研究で明らかになった成果等を生かす教育活動支援について研究する。

Ⅲ　これからの児童生徒に必要な力に関する文献研究

１　「生きる力」という目標を共有するに当たって

中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年１月17日）において，「生きる力」という目標を共有するにあたって，特に，次の３点を重視したいとして挙げている。

(1) 将来の職業や生活を見通して，社会において自立的に生きるために必要とされる力が「生きる力」である。

(2) 思考力・判断力・表現力を育むために，基礎的・基本的な知識・技能をしっかり習得させると共に，知識・技能を活用する学習活動を行う。

(3) 自分に自信がもてず，自らの将来や人間関係に不安を抱えていると言った子ども達の現状を踏まえると，コミュニケーションや感性・情緒，知的活動の基盤である言語の能力の重視や体験活動の充実を図ることにより，子ども達に，他者，社会，自然・環境とのかかわりの中で，これらと共に生きる自分への自信をもたせる必要がある。

２　「生きる力」を育むにあたっての重要な要素

改正教育基本法及び改正学校教育法を受け学習指導要領が改訂された。今回の改訂で，教育基本法改正等で明確になった教育の理念を踏まえ「生きる力」を育成することを改訂の基本方針に据えている。教育課程部会では「生きる力」を育むにあたって重要な要素の例として表１のように整理している。

表１　「生きる力」を育むにあたっての要素

	要　素　の　例
自己に関すること	自己理解（自尊・自己肯定），自己責任（自律・自制），意志決定，将来設計，健康増進
自己と他者との関係	協調性・責任感，感性，表現，人間関係形成
自己と自然等との関係	生命尊重，自然・環境理解
個人と社会との関係	責任・権利・勤労，社会・文化理解，言語・情報活用，知識・技術活用課題発見・解決

３　参考にしたい先行調査研究

平成10年から平成20年までの調査研究で明らかになったこと（成果等）を表２にまとめた。その視点として，道徳観や規範意識，社会性，自制心や自己肯定感，学習意欲と将来の職業への関心とのかかわり，学力と児童生徒の生活習慣・学習習慣・意識との関係等である。これらの研究成果等を全国学力・学習状況調査児童・生徒質問紙調査の結果の分析・考察や教育活動支援の方向性として参考にする。

表２　これまでの調査研究において明らかにされた内容（研究成果）

力の視点	研　究　成　果	出　　典
自然体験・ 生活体験と道徳観	子ども達の自然体験や生活体験の機会が不足している。自然体験や生活体験が豊富な児童生徒は，道徳観・正義感が身についている傾向がある。特に生活体験豊富な子どもは相関が高い。	平成10年　文部省 「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」
学習意欲と将来の職業	授業が「よく分かるとき」「おもしろいとき」や「将来の職業に関心を持ったとき」等に学習意欲が高まる。	平成13年 国立教育政策研究所 「学習意欲に関する調査研究」
自制心・忍耐力	同世代に対して「自己中心的である」「自分の感情をうまくコントロールできない」「忍耐力がなく我慢できない」と考えている子ども達が多い。	平成13年 内閣府 「少年非行問題等に関する世論調査」
自己肯定感・目的意識	米国や中国と比較して我が国の中学生は，自らに対して抱くイメージがより否定的であるほか，将来の目標や社会への貢献等に関する目的意識・意欲が低い。	平成14年 日本青少年研究所 「中学生の生活と意識に関する調査」
異年齢交流・体験活動と規範意識・自己指導能力・自己有用感	異年齢他者とのかかわりによって，小・中学生の「愛着・信頼」「モデルの形成」「自己有用感」が高まり，「規範意識」と「自己指導能力」の育成に繋がる。自己有用感を高めることが，規範の内在化，自己指導力の育成を促進することから，自己有用感の育成が有用な課題である。 年下の児童生徒には「モデルの形成」が強く促進され，年上の児童生徒には「自己有用感」が強く促進される。 同一校，異校種間の異学年交流活動において，「愛着・信頼感」は同様に促進される。異校種間の異学年交流活動は，同一校におけるそれと比較して「モデルの形成」「自己有用感」の促進をより強める。 役割取得能力（相手の立場に立ってものごとを考える力）や共感性を高めることが他者や集団にとって望ましい行動を主体的に選択し，規範の内在化を促進する。	平成15年 広島県立教育センター 「社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ」 －規範意識をはぐくむ異学年交流の活動を通して－
自己肯定感	「自分に自信がある」と答えた小学生は，56.4％(平成11年)から47.4％(平成19年)，中学生は41.1％(平成11年)から29.0％(平成19年)に低下している。	平成19年　内閣府 「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」
学習意欲と学力	学習意欲の高い子は学力の定着が高く，学習意欲の低い子は学力の定着が低い。	平成19年 河村　茂雄 著 「データが語る②子どもの実態」
規範意識	「友達を傷つけるようなことはしてはならない」の質問に約７割の子どもが「とてもそう思う」と答えている。但し「友達」を２～５人と回答しているのが主流である。 「みんなと仲良くしなければならない」に対する肯定的回答が，小学校で６割，中学校は５割であった。約１割の子ども（40人クラスに３～４人）は「友達を傷つけてはいけない」とも「みんなと仲良くしなければならない」とも思っていない。	
規範意識	「係りや当番をしなければならない」「決まりを守らなければならない」等の質問に対し，「あまり思わない」「全く思わない」子どもが20％弱（小学生）40％弱（中学生）いる。	
規範意識	「先生の言うことを聞かなければならない」の質問に「とてもそう思う」子どもが小学生で半数，中学生で２割を切っている。「あまりそう思わない」「全くそう思わない」小学生が２割，中学生は３割いる。教師がいくら規範を説いても聞く耳を持たない子どもが半数近い中では指導が響いていきにくい。	

自己肯定感 と規範意識	自己肯定感が低い子どもは規範に対する意識も弱い。 自己肯定感の低い生徒には，規範意識の授業が響きにくい結果が出た。	平成19年 福岡県教育センター 「九州地区教育研究所連盟 研究発表会道徳部会発表」 沖縄県立総合教育センター 「長期研修員道徳研究 成果報告」
基本的生活習慣・ 規範意識・読書 と学力	家で学校の宿題をする，家の人と学校での出来事について話をする，朝食を毎日食べる，学校へ行く前に持ち物を確認する，学校のきまり・規則を守っている，読書が好き，人の気持ちが分かる人間になりたい，と回答した子どもの方が学力調査の正答率が高い傾向にある。	平成19年　文部科学省 「全国学力・学習状況調査」
地域・家庭での生活 と 学校適応・ ソーシャルスキル	地域での生活が安定している子は，学校生活への適応がよく，心理的発達も安定している。 地域と家庭の関係がよいと，子どものソーシャルスキルが育つ。 ソーシャルスキルが良好な子は，学校生活への適応がよく，友人関係も良好である。	平成20年３月 鳥取県教育センター 「児童生徒の社会性の 成長・発達に関する 研究調査」
宿題と 教科学力との関係	どの宿題であれ，熱心に取り組んでいる子ども程，全般に教科学力は高い。 予習・復習への取り組み度合いと教科学力には顕著な正の相関がある。 基礎的ドリルと応用・探究的課題の両方に取り組んでいる子どもの教科学力が最も高い。	平成20年11月　Benesse 教育研究開発センター 「中間報告　学力向上の ための基本調査2008」
宿題・自主学習と授業理解度・教科学力	宿題と自主的な学習の両方に取り組んでいる子どもの授業理解度，教科学力がともに最も高い。	
自主学習と自己効力感や学びと将来とのかかわりの意識・ 社会への関心	自主的学習に踏み出せない子どもは，学習上の達成経験が乏しく，自己効力感が低い。学びと将来とのかかわりの意識や社会への関心も低い。	
家庭学習力と 教科学力	家庭学習力の項目の肯定群が否定群より，基礎問題・応用問題の正答率が高く，特に応用問題の差が顕著である。 《教科学力と相関が顕著だった家庭学習力の項目》 **基礎的体験**：いろいろな種類の本を読む。だいたい決まった時刻に寝起する。分からないときは教えてくれる人がいる。 **自立心**：苦手教科も学習している。宿題をやり遂げている。やり遂げる目標を決めて学習している。 **自己学習力**：自分で取り組む家での学習が楽しい。宿題をやり遂げている。テスト準備に計画的に取り組んでいる。 **自己制御力**：テレビやラジオをつけず集中して学習している。必要な道具を前日の夜に準備している。 **自己マネジメント力**：自分の学習の仕方を振り返って改善したことがある。 **生涯学習力**：普段からテレビのニュースや新聞記事で，社会の動きを知るようにしている。検定試験を受けたことがある。 **豊かな学び**：学習で疲れたときリラックスすることができる。難しいことでも自分から進んで学習している。自分の得意分野を伸ばすために家で自分なりに学んでいる。 **自己成長力**：家の学習で今何が足りないか分かっている。家でしっかり学習することは可能性を広げると思う。自分が行きたい学校に進むために家での学習は大切だと思う。	

４　県教育委員会から出されている全国学力・学習状況調査徒質問紙調査結果

沖縄県教育委員会は，「『確かな学力の向上』支援プラン」（平成20年３月）において，全国学力・学習状況調査質問紙調査の結果を表３のように記載している。

表３　沖縄県教育委員会は「『確かな学力の向上』支援プラン」（平成20年３月）質問紙調査の結果

質　　問	調　査　結　果
(2) 児童（生徒）質問紙調査の結果	
①「普段（月～金），何時ごろ起きますか」	小・中学校ともに，全国より起床時刻が遅い。
②「普段（月～金），何時ごろ寝ますか」	小学校は全国より就寝時間が遅く，中学校は全国より早く寝ている。
③「普段（月～金），１日あたりどれくらいの時間，テレビやゲーム等をしますか」	小・中学校ともに，全国よりゲームをする時間が長い。
④「学校の授業時間以外に，普段（月～金），１日あたりどれくらいの時間，勉強しますか。	勉強時間は，全国より小学校は本県が長い。 中学校は全国が長い。
⑤国語〔算数（数学）〕の勉強が好きな児童（生徒）の割合	小・中学校とも，国語は全国が高い。 算数・数学は，本県の割合が高い。
⑥読書が好きな児童（生徒）の割合	小学校は本県が，中学校は全国の割合が高い。
⑦将来の夢や目標をもっている児童（生徒）の割合	小・中学校とも全国より夢・希望を持つ子が多い。 小学校が中学校より夢や希望をもっている子が多い。
(3) 学校質問紙調査の結果	
①児童生徒に対して『朝の読書』などの一斉読書の時間を設定している学校の割合	小・中学校ともに全国より実施率が高い。
② ICT を活用した授業を行っている学校の割合	小・中学校ともに ICT を活用した学校の割合が高い。

また，「確かな学力の向上のための授業実践事例集」（平成20年３月沖縄県教育委員会）の国語編・算数（数学）編において，調査結果の概要や領域ごとの課題並びに指導改善のポイント等がまとめられている。どちらも学力を中心とした調査結果報告となっている。

５　「全国学力・学習状況調査」（文部科学省）と「生活実態調査」（県教育委員会）の調査項目の比較

県教育委員会は，公立小・中学校の生活実態や傾向を明らかにし，基本的な生活習慣の形成のための指導に資するために本年度９月に「生活実態調査」を行っている。調査項目については平成20年度全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」との重複を避けた項目とし，子ども達の「確かな学力の定着」「豊かな人間性」「健康・体力」「基本的生活習慣の形成」について達成状況を評価するとしている。

本調査研究は，国（文部科学省）の行った全国学力・学習状況調査「児童生徒質問紙」の結果について分析・考察をすることで教育活動支援に関する研究を行うことを目的としているため，県教育委員会の実施する「生活実態調査」とは異にすると考える。

表４　「生活実態調査」と「学習状況調査」の比較一覧

	沖縄県教育委員会(義務教育課)	国(文部科学省)
	生活実態調査	学習状況調査
目的	公立小・中学校の児童生徒の生活実態や傾向を明らかにし，基本的な生活習慣の形成のための指導に資する。	児童生徒の学力・学習状況を把握・分析し，教育の結果を検証し，教育指導や学習の改善等に役立てる。
対象	小学校５・６年（抽出１学級） 中学校１～３年（抽出１学級）	児童生徒 ○小学校６年・中学校３年の全児童生徒

規模	小学校　110校 中学校　 60校 （全体の35%）	学校 ○指導方法に関する取組 ○人的・物的教育条件整備状況
	平成20年 9月8日～9月12日	平成20年 4月22日
調査内容	**Ⅰ　生活リズム** 1　起床時刻　2　登校時間　3　帰宅時間 4　就寝時間　5　睡眠時間　6　家庭学習時間 7　TV視聴時間　8　TVｹﾞｰﾑの時間 9　家族の会話の時間 **Ⅱ　生活習慣について** 10　朝ご飯　11　朝食を家族で 12　夕食を家族で　13　食事内容 14　好き嫌い　15　好き嫌いの指導 16　ﾀﾞｲｴｯﾄ　17　自分の家事 18　家族の挨拶　19　1日の予定表 20　日記を　21　門限の有無 22　就寝時刻のきまり 23　自分で起床 24　何時間前の起床か **Ⅲ　家庭学習** 25　時間と場所　26　学習時の家族 27　教科　28　宿題の回数 29　内容　30　意識 **Ⅳ　読書** 31　学校外の時間　32　本の概要 33　読まずに返却　34　継続時間 **Ⅴ　部活動** 35　部活動　36　朝練の有無　37　日数 38　部活時間　39　塾と習い事　40　塾日数 41　塾の学習時間　42　習い事種類 43　習い事日数　44　習い事時間 **Ⅵ　将来の夢や希望** 45　進学希望校種　46　希望職業の有無 47　希望職種　48　職業調べ 49　現在の努力　50　職業選択基準 **Ⅶ　友人・親との関係** 51　友人人数　52　親友人数 53　異なる意見の発表　54　発表しない傾向 55　親への学校の出来事　56　親と将来の進路 57　親と友達のこと　58　ﾆｭｰｽ内容 59　親との関係 **Ⅷ　学習の意義** 60　勉強する理由　61　意欲 63　どうして　64　生活に役立つ 65　将来に役立つ **Ⅸ　地域とのかかわり** 66　近所の人への挨拶 67　地域行事への参加 68　近所の人に注意された	**生活リズム** 1　朝食を食べている　2　持ち物を確かめる 3　毎日，同じ時刻に寝る　4　毎日，同じ時刻に起きる **将来の夢や希望，ねばり強さ** 5　最後までやり遂げる　6　失敗をおそれず挑戦 7　自分には良いところがある 8　将来の夢や目標をもっている **生活リズム，メディア** 9　普段，何時頃起きますか　10　普段，何時頃寝ますか 11　普段の睡眠時間　12　TV･ﾋﾞﾃﾞｵの視聴時間 13　TVｹﾞｰﾑの時間　14　ｲﾝﾀｰﾈｯﾄの時間 15　携帯電話での通話やメール **家庭学習，読書，塾** 16　家庭学習の時間　17　休日の家庭学習の時間 18　普段の読書の時間　19　学習塾へ通っているか **家庭での様子** 20　朝食を一緒に食べる　21　夕食を一緒に食べる 22　学校の出来事を話す　23　家の手伝い 24　食事中のTV　25　自分で計画を立てて勉強するか 26　学校の宿題をしているか　27　予習　28　復習 **地域・友人** 29　友達に会うのは楽しいか　30　好きな授業がある 31　ニュースに関心がある 32　地域の自然や歴史に関心がある 33　地域行事に参加している **規範意識** 34　学校のきまりを守っている 35　友達との約束を守っている 36　人が困っている時に助ける 37　近所の人に挨拶をする 38　人の気持ちが分かる人になりたい 39　いじめは理由があってもいけない 40　人の役に立つ人間になりたい **自然体験・生活体験** 41　海･山･川で遊んだこと 42　動物の飼育，花や野菜を育てる 43　体の不自由な人，老人を手助け 44　包丁やﾅｲﾌを使い調理したこと

Ⅴ　全国学力・学習状況調査「児童・生徒質問紙」調査結果の分析・考察

本調査研究は，表４（ｐ６）「学習状況調査質問紙調査」（平成20年文部科学省）の調査内容について，関連する項目でまとめ，下記のようにグループピングし，分析・考察を行う。

表５　「全国学力・学習状況調査質問紙調査」のグループ分け

グループ	主な調査内容
「基本的生活習慣」	食事や睡眠，メディアの利用状況等
「家庭での学習・読書習慣」	家庭学習や読書の時間・学習塾・宿題・予習と復習等
「自己に関すること」	自分の良さ・やり遂げて嬉しかった経験・夢や希望・役立つ人間失敗を恐れず挑戦しているか等
「自然体験や生活体験」	海，山等で遊んだ経験・動物飼育・花や野菜の栽培・包丁やナイフを使った調理・家の手伝い等
「規範意識や親切」	学校の規則・友達との約束・いじめ・手助け等
「地域社会との関わり」	ニュースや今住んでいる地域の歴史や自然への関心・地域行事への参加・近所の人へのあいさつ等

【基本的生活習慣】

１　朝食を毎日食べている（設問番号は平成20年小学校質問紙の番号）

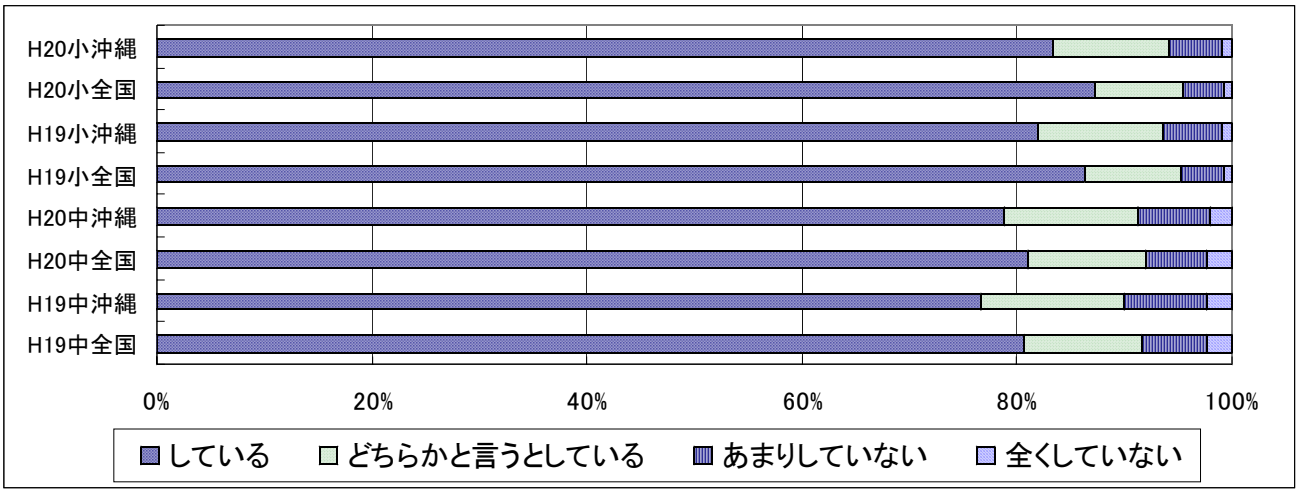

図１　朝食摂取の割合（平成19・20年　沖縄と全国）

表6 朝食摂取の割合（平成19・20年　沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	83.4	10.8	4.9	0.9
H20小全国	87.1	8.3	3.7	0.8
H19小沖縄	81.8	11.8	5.3	1.0
H19小全国	86.3	8.9	4.0	0.8
H20中沖縄	78.7	12.5	6.7	2.0
H20中全国	81.1	10.8	5.8	2.3
H19中沖縄	76.4	13.3	7.7	2.4
H19中全国	80.5	11.1	6.0	2.3

「朝食を毎日食べている」の本県の「している」「どちらかと言うとしている」の割合（以下「県内の肯定的割合」と表記）が，平成19年は小学生で93.6％，中学生で89.7％，平成20年は小学生94.2％，中学生91.2％となっている。

平成20年は朝食を摂っている児童生徒がともに９割を超えている。

しかし，図１から分かるように，全国平均と比べ，毎日朝食を食べている（「している」）の割合がやや低い。平成20年を比較してみると，小学生で3.7％，中学生は2.4％下回っている。

「平成20年度全国学力・学習状況調査調査結果概要」（平成20年8月文部科学省・国立教育政策研究所）（以下「学習状況調査結果概要」と表記）によると，朝食を毎日食べる児童生徒は学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

20　家の人（兄弟姉妹は含まない）と普段（月～金），朝食を一緒に食べる

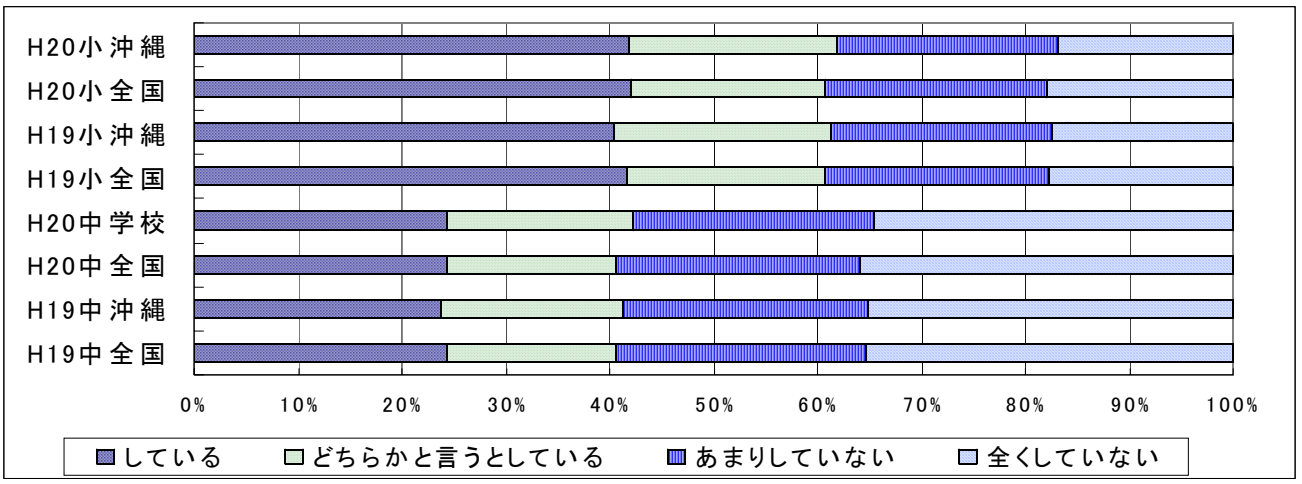

図２ 家の人と一緒に朝食を摂っている割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表7 家の人と一緒に朝食を摂っている割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	41.8	20.0	21.3	16.8
H20小全国	42.1	18.6	21.2	18.0
H19小沖縄	40.4	20.9	21.3	17.3
H19小全国	41.7	19.0	21.6	17.7
H20中学校	24.3	17.9	23.0	34.6
H20中全国	24.3	16.3	23.5	35.8
H19中沖縄	23.7	17.5	23.5	35.0
H19中全国	24.3	16.3	24.0	35.3

「家の人と一緒に朝食を摂っている」について，「あまりしていない」「全くしていない」割合が，平成19年は小学生で38.6％，中学生で58.5％，平成20年は小学生38.1％，中学生57.6％となっており，児童生徒ともに朝食を家の人と一緒に朝食を摂っていない割合が高くなっている。校種別に見ると中学生でその割合が高く，半数以上の生徒が家の人と一緒に朝食を摂っていない状況である。

全国との比較で見ると，児童生徒ともに各項目で大きな相違は見られずほぼ同様な結果となっている。

21　家の人（兄弟姉妹は含まない）と普段（月～金），夕食を一緒に食べる

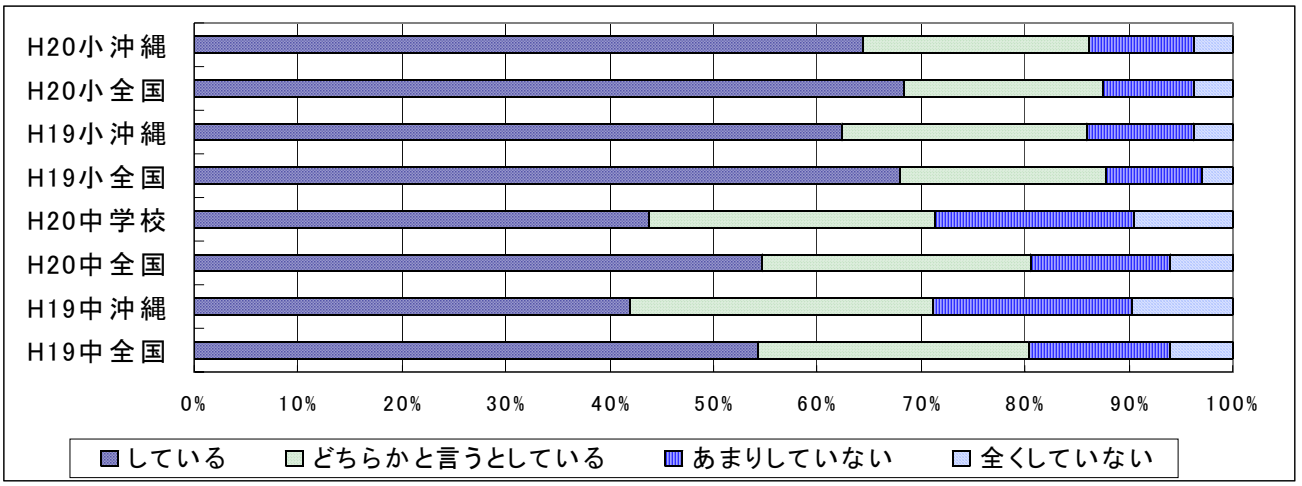

図３ 家の人と一緒に夕食を摂っている割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表8 家の人と一緒に夕食を食べている割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	64.3	21.7	10.2	3.7
H20小全国	68.8	19.2	8.9	3.7
H19小沖縄	62.4	23.5	10.4	3.7
H19小全国	67.9	19.9	9.2	3.0
H20中学校	43.7	27.5	19.1	9.6
H20中全国	54.6	25.9	13.6	5.9
H19中沖縄	41.8	29.1	19.1	9.7
H19中全国	54.3	26.0	13.8	5.9

「家の人と一緒に夕食を食べている」の県内の肯定的割合は，平成19年は小学生で85.9%，中学生で70.9%，平成20年は小学生86.0%，中学生71.2%となっている。

平成19年と20年の年度の比較では朝食同様，児童生徒ともに各項目でほとんど差は見られない。

しかし，全国との比較では，小学生は，家族と一緒に夕食を食べている割合は，僅差であるが，中学生では10%ほどの開きが見られる。夕食を一緒に食べている割合は，朝食に比べるとかなり増えているが，全く一緒に食べていない中学生も10%近くいる。

24　家で食事をするときは，テレビを見ないようにしていますか

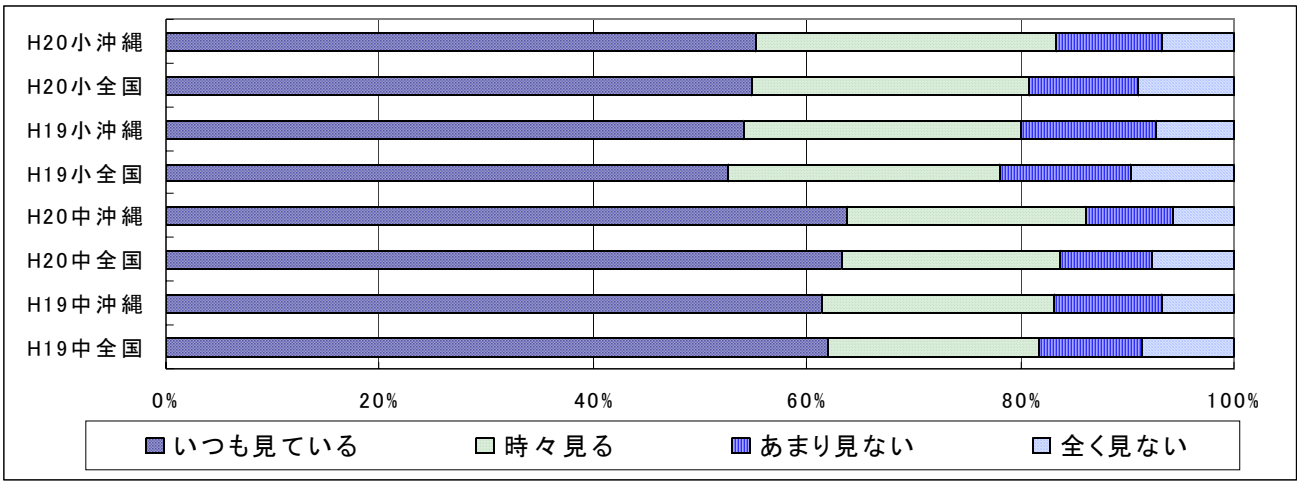

図４　食事の際のテレビ視聴の割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表9 食事の際のテレビ視聴の割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	いつも見ている	時々見る	あまり見ない	全く見ない
H20小沖縄	55.1	28.2	9.8	6.8
H20小全国	54.7	26.0	10.2	9.0
H19小沖縄	54.1	26.0	12.6	7.3
H19小全国	52.7	25.3	12.4	9.6
H20中沖縄	63.6	22.3	8.3	5.6
H20中全国	63.1	20.5	8.5	7.7
H19中沖縄	61.3	21.6	10.0	6.8
H19中全国	61.9	19.7	9.7	8.5

「家で食事をするときはテレビを見ないようにしている」について，「いつも見ている」の県内の割合は，平成19年は，小学生54.1%，中学生で61.3%，平成20年は，小学生で55.1%，中学生で63.6%となっている。

児童生徒ともに半数以上がいつもテレビを見ながら食事をしている。

また，家で食事をするときにテレビを見ないようにしている（「あまり見ない」「全く見ない」）児童生徒の割合は，平成19年に比べると平成20年はやや低くなっている。

全国との比較では，児童生徒ともに，各項目でほぼ同じ傾向を示しているのが特徴である。

22　家の人（兄弟姉妹は含まない）と学校での出来事について話をする

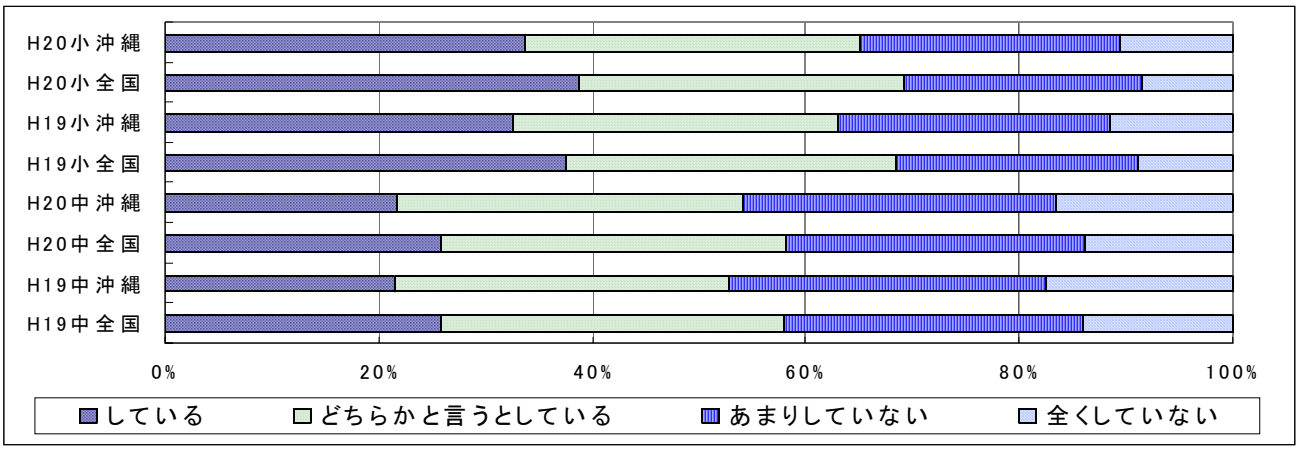

図５　家の人に学校の出来事を話す割合（平成19・20年　沖縄と全国）

表10 家の人に学校の出来事を話す割合
（平成19・20年　沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	33.7	31.3	24.4	10.5
H20小全国	38.7	30.5	22.2	8.5
H19小沖縄	32.6	30.5	25.4	11.5
H19小全国	37.4	31.0	22.6	8.9
H20中沖縄	21.7	32.3	29.2	16.6
H20中全国	25.9	32.0	28.1	13.8
H19中沖縄	21.4	31.3	29.6	17.4
H19中全国	25.9	31.9	28.0	14.0

「家の人（兄弟姉妹は含まない）と学校での出来事を話す」について，平成19年と平成20年を比べると，本県も全国平均も大きな変化はみられない。

肯定的割合を全国平均（平成20年）と比較してみると，小学生65.0%，中学生54.0%，全国平均の小学生は69.2%，中学生は57.9%なっている。家の人と学校での出来事について話している児童生徒は全国の方が多い。また，小学生と中学生を比較してみると，沖縄も全国も小学生の方が多い。

「学習状況調査結果概要」によると，家の人と学校の出来事について話している児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

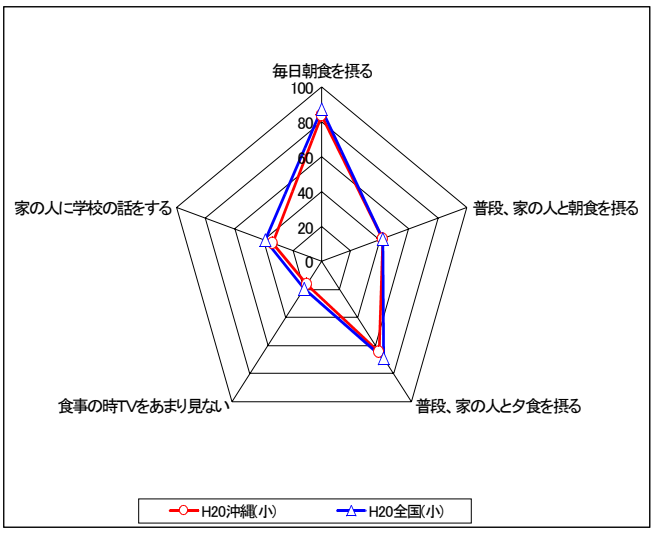

図６　毎日朝食を摂る・普段，家の人と朝食を摂る
普段，家の人と夕食を摂る，食事の時 TV をあまり見ない・家の人に学校の話をするについての「当てはまる」の比較（平成 20 年 小学生）

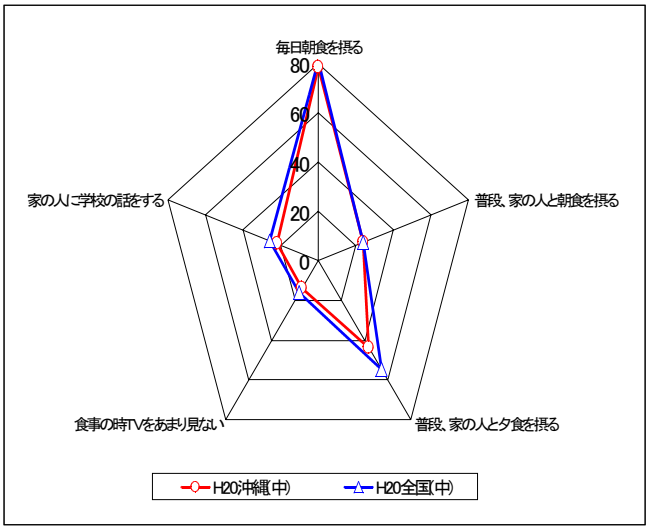

図７　毎日朝食を摂る・普段，家の人と朝食を摂る
普段，家の人と夕食を摂る，食事の時 TV をあまり見ない・家の人に学校の話をするについての「当てはまる」の比較（平成 20 年 中学生）

図６は小学生の平成20年の本県と全国平均の比較，図７は中学生の平成20年の本県と全国平均のグラフである。

「１ 毎日朝食を摂っている」「20 普段，家の人（兄弟姉妹は含まない）と一緒に朝食を摂っている」「21 普段，家の人（兄弟姉妹は含まない）と一緒に夕食を摂っている」「24 家で食事をするときテレビを見ないようにしている」「22 家の人と学校での出来事について話す」の５項目における「当てはまる」をレーダーチャートに表した。

本県の児童生徒ともに全国平均と同じような傾向を示している。しかし，児童生徒ともに「普段，家の人と一緒に夕食を摂っている」や「家の人と学校での出来事について話す」項目が全国平均より下回っていること，他項目に比べ，テレビを視聴しながらの食事の割合がかなり高いことが分かる。

３ 毎日，同じくらいの時刻に寝ている

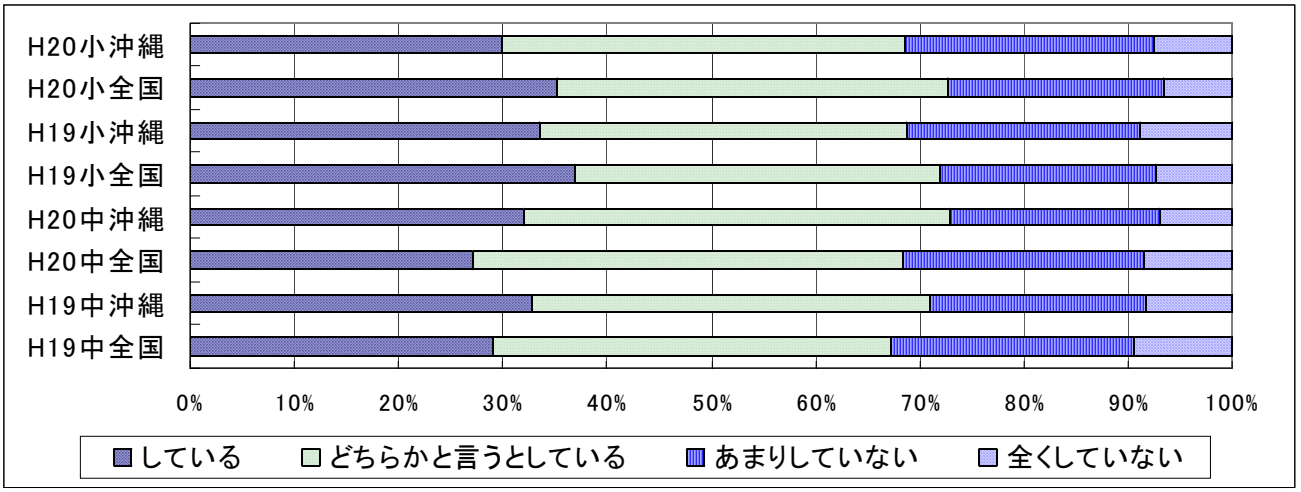

図８ 毎日同じくらいの時刻に就寝する割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表11 毎日同じくらいの時刻に就寝する割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：％）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	30.0	38.5	23.9	7.5
H20小全国	35.2	37.5	20.6	6.6
H19小沖縄	33.6	35.2	22.3	8.9
H19小全国	36.9	35.0	20.7	7.3
H20中沖縄	32.0	40.7	20.1	7.0
H20中全国	27.1	41.1	23.1	8.5
H19中沖縄	32.6	38.1	20.7	8.2
H19中全国	28.8	38.1	23.4	9.3

「毎日同じくらいの時刻に就寝する」について，平成19年と平成20年を比べると，本県も全国平均も大きな変化はみられない。

平成20年の肯定的割合について，本県と全国平均を比較すると，本県は小学生68.5%，中学生72.7%，全国の小学生72.7%，中学生68.2%となっている。

図８からわかるように，毎日同じくらいの時刻に就寝している児童生徒は，本県は小学生より中学生が高く，全国は中学生より小学生の方が高いことがわかる。

「学習状況調査結果概要」によると，毎日，同じくらいの時刻に就寝する児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られるとしている。

10　普段（月～金），何時ごろに寝ますか

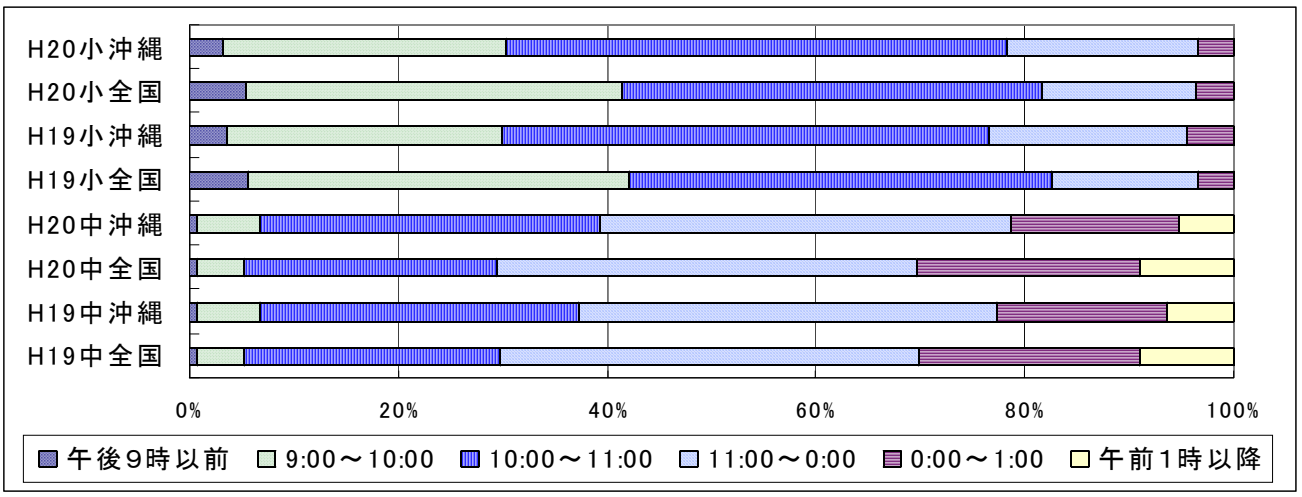

図 9　普段何時頃に就寝するか（平成19・20年　沖縄と全国）

表12 普段何時頃に就寝するか（平成19・20年　沖縄と全国）

（単位：%）	午後9時以前	9:00～10:00	10:00～11:00	11:00～0:00	0:00～1:00	午前1時以降
H20小沖縄	3.2	27.1	47.9	18.3	3.4	
H20小全国	5.4	36.0	40.1	14.9	3.5	
H19小沖縄	3.5	26.5	46.6	18.9	4.5	
H19小全国	5.6	36.5	40.4	14.1	3.4	
H20中沖縄	0.8	6.0	32.4	39.2	16.1	5.2
H20中全国	0.7	4.6	24.1	40.1	21.3	9.0
H19中沖縄	0.7	6.0	30.5	39.9	16.4	6.3
H19中全国	0.7	4.6	24.5	40.0	21.2	8.9

「普段，何時頃に就寝するか」について，平成19年と平成20年を比べると大きな変化はみられない。

しかし，図9からもわかるように，全国と比較して，小学生の10時以降に就寝するのは本県が多く，中学生の11時以降の就寝は全国の方が多い。平成20年を全国と比較すると，本県は小学生69.6%，中学生60.5%，全国の小学生70.4%，中学生70.4%となっている

4　毎日，同じくらいの時刻に起きている

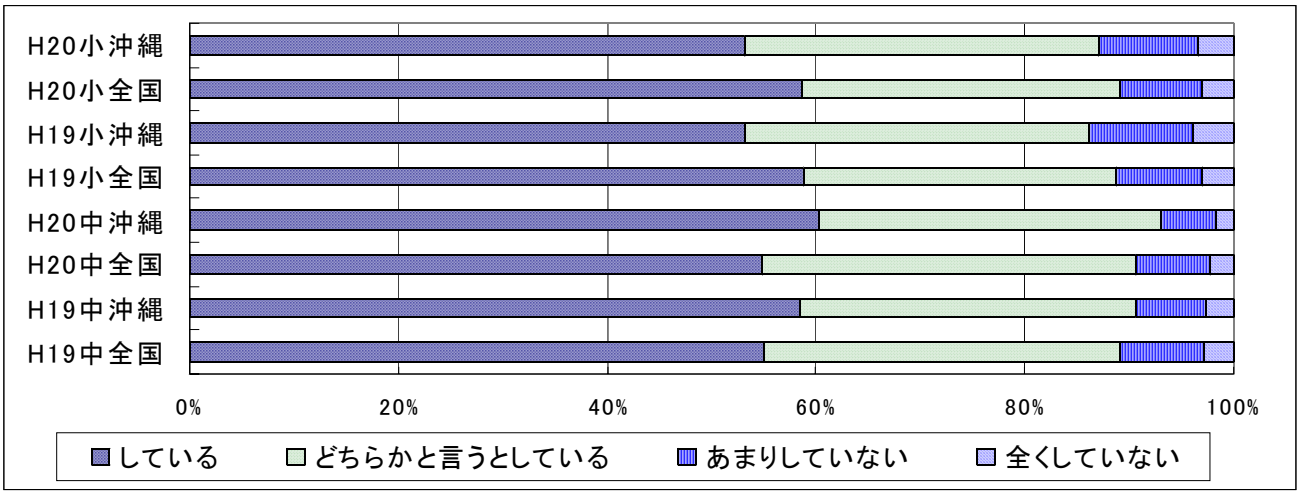

図10 毎日同じくらいの時刻に起床する割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表13 毎日同じくらいの時刻に起床する割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	53.1	33.8	9.7	3.3
H20小全国	58.5	30.5	8.0	2.9
H19小沖縄	53.2	32.9	9.9	3.9
H19小全国	58.7	29.8	8.3	3.0
H20中沖縄	60.2	32.5	5.3	1.7
H20中全国	54.8	35.6	7.1	2.3
H19中沖縄	58.4	32.0	6.8	2.6
H19中全国	55.0	33.9	8.1	2.8

「毎日，同じくらいの時刻に起床する」についての肯定的割合が，本県において，平成19年は小学生で86.1%，中学生で90.4%，平成20年は小学生86.9%，中学生92.7%となっている。平成20年は児童生徒ともに「同じくらいの時刻に起きる」が19年よりも若干増えてきている。

しかし，図10から分かるように，肯定的割合が平成19年・平成20年ともに，全国平均と比べ，小学生は下回り，中学生は上回っている。

平成20年をみると，小学生で2.3%下回り，中学生は2.1%上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，毎日同じくらいの時刻におきている小学生は，学力調査の国語・算数の正答率が高い傾向にあるとしている。

9 普段（月～金），何時ごろに起きますか

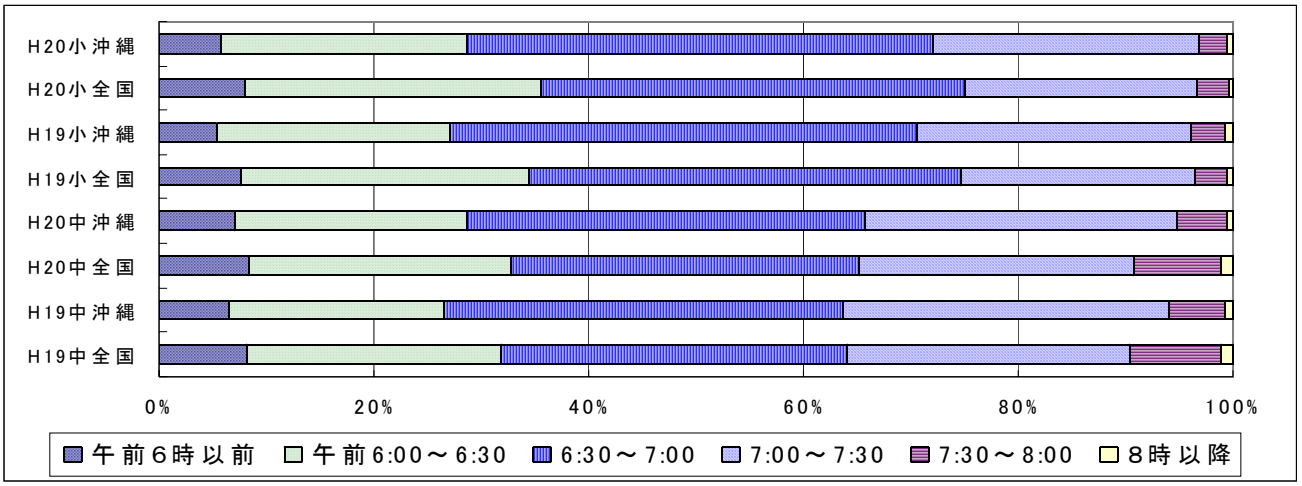

図11 普段何時頃に起床するか（平成19・20年 沖縄と全国）

表14 普段何時頃に起床するか（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	午前6時以前	午前6:00～6:30	6:30～7:00	7:00～7:30	7:30～8:00	8時以降
H20小沖縄	5.8	22.9	43.2	24.8	2.7	0.5
H20小全国	8.0	27.5	39.5	21.5	3.0	0.4
H19小沖縄	5.4	21.6	43.6	25.6	3.1	0.7
H19小全国	7.6	26.8	40.1	21.9	3.0	0.5
H20中沖縄	7.1	21.5	37.1	29.0	4.7	0.5
H20中全国	8.3	24.4	32.4	25.7	8.1	1.1
H19中沖縄	6.4	20.1	37.1	30.3	5.3	0.7
H19中全国	8.2	23.5	32.2	26.3	8.5	1.1

「午前６時30分以降に起床している」児童生徒は，本県において，平成19年は小学生で73.0%，中学生で73.5%，平成20年は小学校71.3%，中学校71.4%となっている。

平成20年は，児童生徒ともに「午前６時30分以降に起床している」が19年よりも若干減ってきている。しかし，図11から分かるように，「午前６時30分以降に起床している」児童生徒は，全国平均と比較して，本県が高くなっている。小学生の午前６時３０分以降の起床は，全国が64.4%に対し，本県は71.3%，中学は，全国が67.3%に対し，本県が71.4%となっている。

11　普段（月～金），１日にどれくらいの時間，睡眠をとることが最も多いですか

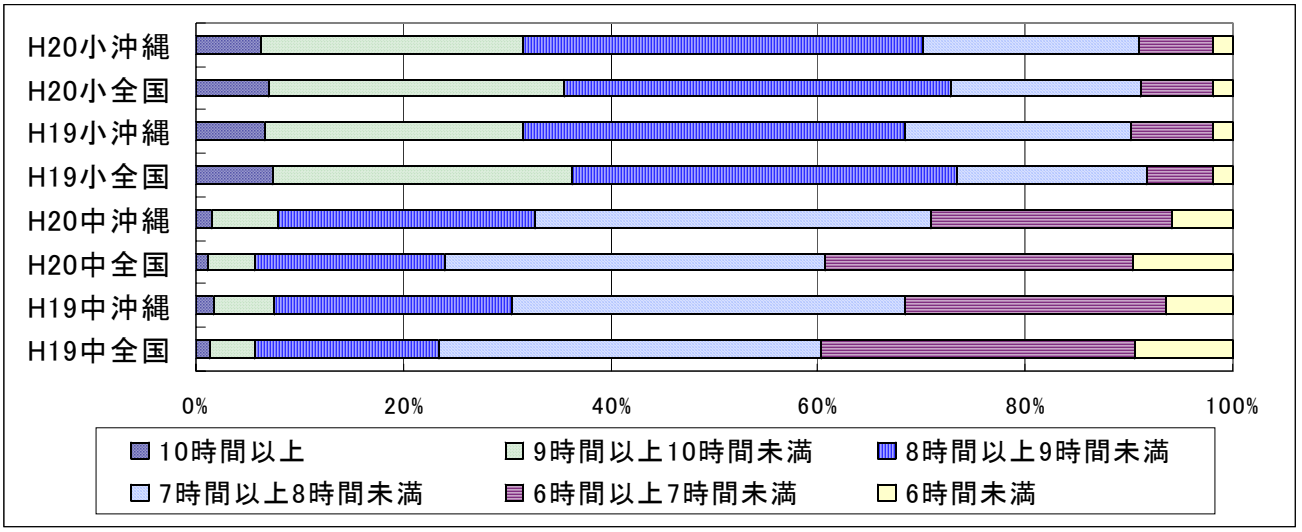

図12 普段の睡眠時間（平成19・20年 沖縄と全国）

表15 普段の睡眠時間（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	10時間以上	9時間以上10時間未満	8時間以上9時間未満	7時間以上8時間未満	6時間以上7時間未満	6時間未満
H20小沖縄	6.3	25.2	38.6	20.8	7.3	1.8
H20小全国	6.9	28.6	37.1	18.4	6.9	1.9
H19小沖縄	6.7	24.9	36.7	21.7	8.0	1.9
H19小全国	7.3	28.9	37.0	18.4	6.5	1.8
H20中沖縄	1.6	6.4	24.7	38.1	23.4	5.8
H20中全国	1.2	4.4	18.3	36.7	29.7	9.5
H19中沖縄	1.7	5.9	22.8	37.8	25.1	6.4
H19中全国	1.3	4.3	17.8	36.7	30.2	9.5

「普段の睡眠時間が８時間以上」の本県の小学生は，平成19年は68.3%，平成20年は70.1%，図12から分かるように全国平均（平成20年）より若干下回っている。

「普段の睡眠時間が７時間以上」の本県の中学生は，平成19年は68.2%，平成20年は70.8%，全国平均（平成20年）より上回っている。

12　普段（月～金），１日にどれくらいの時間，テレビやビデオ・DVDを見たり，聞いたりしますか

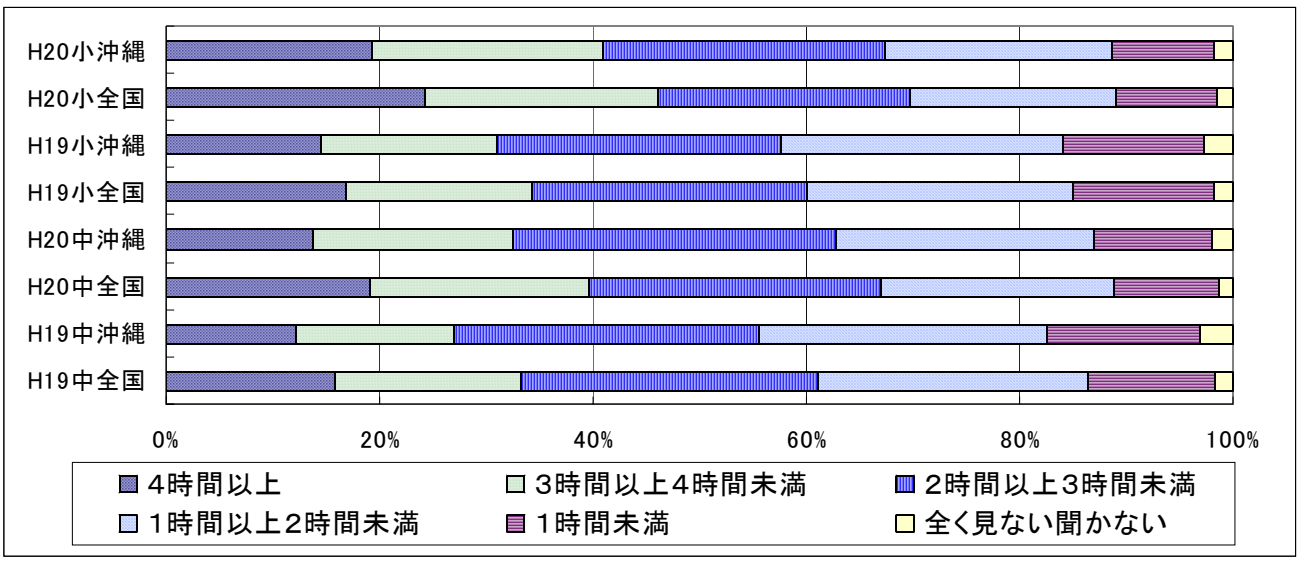

図13 普段のテレビ・ビデオ・ＤＶＤ視聴時間（平成19・20年 沖縄と全国）

表16 普段のテレビ・ビデオ・ＤＶＤ視聴時間（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：％）	４時間以上	3時間以上4時間未満	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	１時間未満	全く見ない聞かない
H20小沖縄	19.2	21.8	26.3	21.3	9.6	1.8
H20小全国	24.2	21.9	23.7	19.2	9.6	1.4
H19小沖縄	14.4	16.6	26.6	26.3	13.2	2.8
H19小全国	16.9	17.4	25.7	24.9	13.1	1.9
H20中沖縄	13.7	18.8	30.2	24.2	10.9	2.1
H20中全国	19.0	20.6	27.2	21.9	9.8	1.3
H19中沖縄	12.1	14.8	28.6	26.9	14.2	3.1
H19中全国	15.7	17.4	27.7	25.3	11.8	1.7

テレビ･ビデオ･DVD視聴に関し，平成19年と平成20年を比較すると，ほとんど視聴しない小学生は14.2％から11.6％，中学生では，15.2％から11.1％とともに減っている。しかし，３時間以上視聴をしている小学生は，32.4％から38.8％，中学生は，34,0％から45.8％と，ともに増加している。 図13かわ分かるように，テレビやビデオ・DVD等をほとんど視聴しない児童・生徒の割合は全国平均よりは多く，テレビやビデオ・DVD等を3時間以上の視聴をしている児童生徒は，逆に少ない。

「学習状況調査結果概要」によると，テレビ・ビデオ・DVDを見る時間が短い児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

13　普段（月～金），１日あたりどれくらいの時間，テレビゲーム（コンピュータゲーム，携帯式のゲームを含む）をしますか

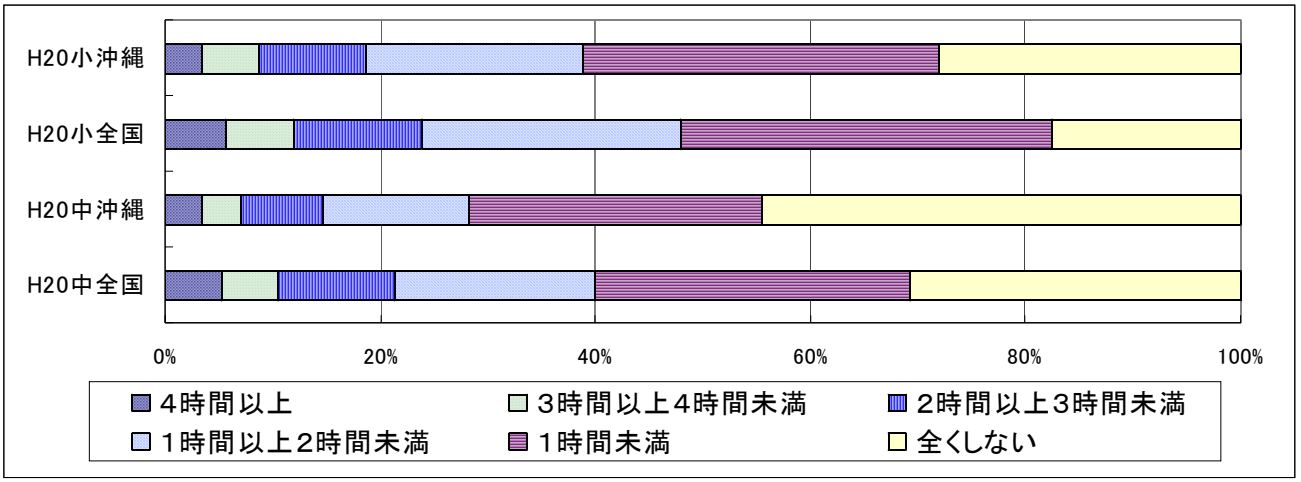

図14 普段のテレビゲームに費やす時間（平成20年 沖縄と全国）

表17 普段のテレビゲームに費やす時間（平成20年 沖縄と全国）

（単位：％）	4時間以上	3時間以上4時間未満	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	1時間未満	全くしない
H20小沖縄	3.5	5.1	10.0	20.2	33.1	27.9
H20小全国	5.6	6.3	12.0	23.9	34.6	17.5
H20中沖縄	3.5	3.5	7.7	13.5	27.2	44.4
H20中全国	5.2	5.3	10.8	18.5	29.3	30.7

テレビゲームに費やす時間について，本県は，ほとんどしない小学生が61.0％，中学生は，71.6％となっており，２時間以上行うとしている小学生は，18.6％，中学生が14.7％となっている。

２時間以上のゲームについて，全国平均と比較すると，小学生で5.3％，中学生で6.6％少ないが，２時間以上のゲームをする児童生徒は全国とほぼ同様に多いことが分かる。

「学習状況調査結果概要」によると，２時間以上のゲームをする児童生徒は学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向にあるとし，また，テレビゲームをする時間が短い児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

14　普段（月～金），１日あたりどれくらいの時間，インターネットをしますか

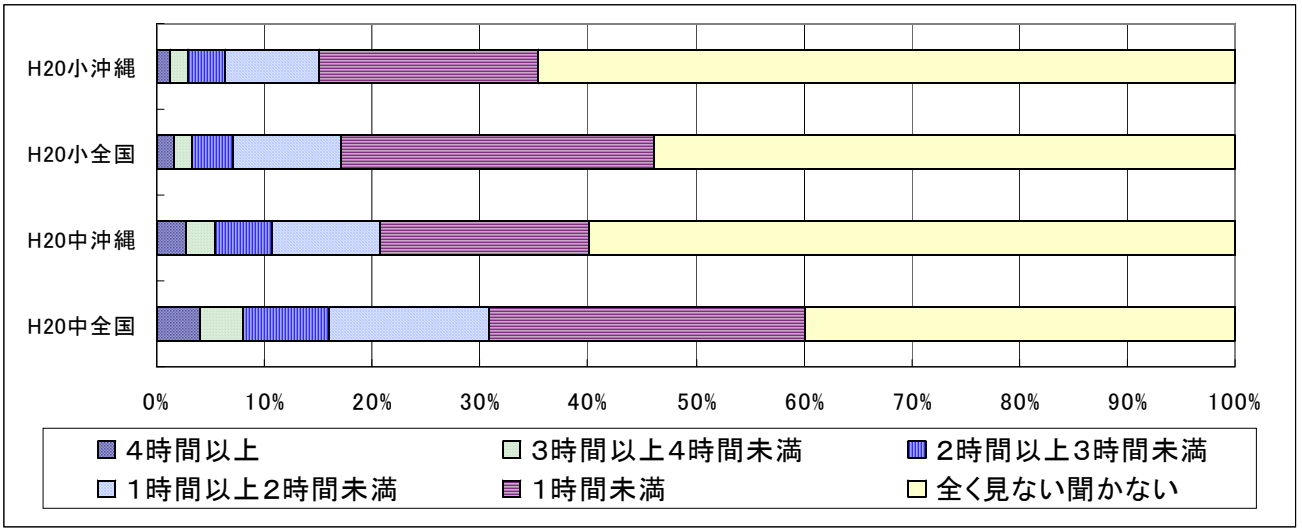

図15 普段のインターネットに費やす時間（平成20年 沖縄と全国）

表18 普段のインターネットに費やす時間
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	4時間以上	3時間以上4時間未満	2時間以上3時間未満	1時間以上2時間未満	1時間未満	全く見ない聞かない
H20小沖縄	1.2	1.7	3.5	8.6	20.3	64.7
H20小全国	1.6	1.7	3.8	9.9	29.1	53.9
H20中沖縄	2.7	2.7	5.3	10.0	19.3	59.7
H20中全国	4.0	3.9	8.0	15.0	29.1	39.9

ほとんどインターネットをしない本県の小学生は85.0%，中学生は79.0%となっており，ほとんどの児童生徒がインターネットを行っていない。

図15から分かるように，全国平均と比べ，小学生で2.0%，中学生で10.6%の差は見られるものの，全国とほぼ同様にインターネットをしない児童・生徒が圧倒的に多いことがわかる。

「学習状況調査結果概要」によると，インターネットをしない児童生徒は学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向にあるとしている。

15　携帯電話で通話やメールをしていますか

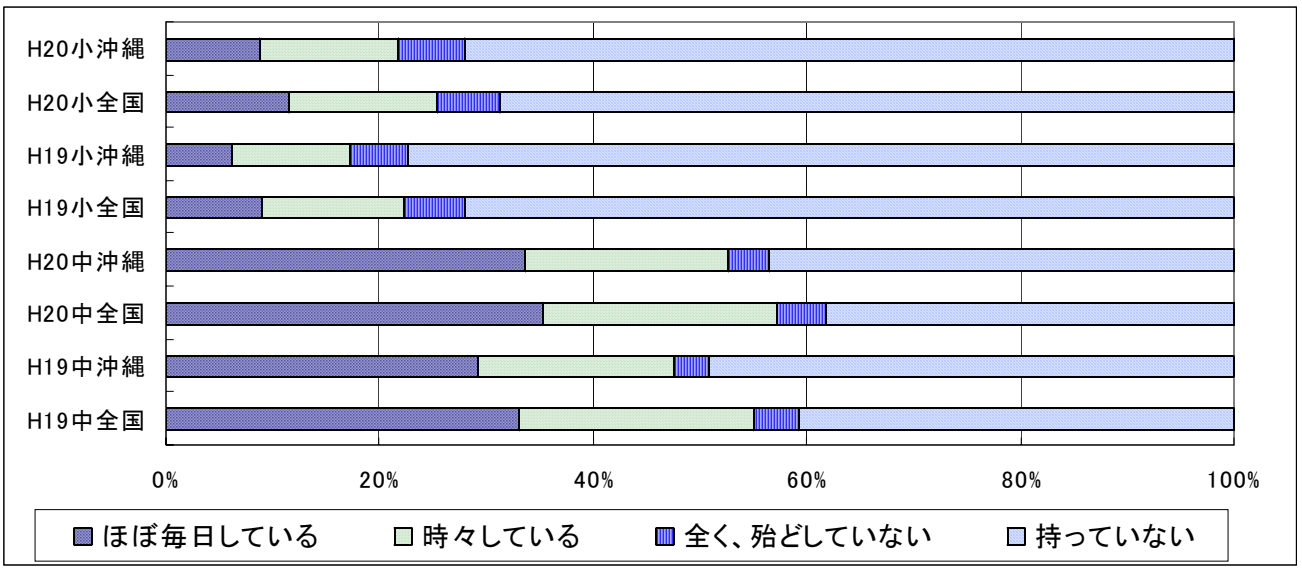

図16 携帯電話やメールをする割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表19 携帯電話やメールをする割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	ほぼ毎日している	時々している	全く，ほとんどしていない	持っていない
H20小沖縄	8.7	12.9	6.2	71.7
H20小全国	11.5	13.8	5.9	68.4
H19小沖縄	6.3	10.8	5.5	77.3
H19小全国	9.0	13.3	5.6	72.0
H20中沖縄	33.5	19.0	3.9	43.4
H20中全国	35.2	21.9	4.7	38.1
H19中沖縄	29.2	18.2	3.3	48.9
H19中全国	33.1	21.9	4.1	40.7

携帯電話で通話やメールを「毎日している」「時々している」の割合が，平成19年は小学生17.1％，中学生47.4％，平成20年は小学生21.6％，中学生52.5％となっている。平成20年は児童生徒ともに携帯やメールをする児童生徒の割合が増えている。

図16から分かるように，全国平均と比べ「ほぼ毎日している」「時々している」割合は低い。平成20年を比較してみると，小学生3.7％，中学生4.6％下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，携帯電話で通話やメールをほぼ毎日利用する児童生徒の割合は，19年度と比べてやや高くなっており，携帯電話を持っていない児童生徒の割合はやや低くなっている。また，携帯電話を持っていない中学生の方が，学力調査の数学の正答率が高い傾向が見られるとしている。

【基本的生活習慣等に関する考察】

文部科学省は，平成18年度から「早寝早起き朝ごはん」等，生活リズムを向上させ，子どもが生き生きと日々の活動に取り組んでいけるよう「子どもの生活リズム向上プロジェクト」事業をスタートさせ，「早寝・早起き・朝ごはん」運動を展開している。

脳が活動し始めるには，目覚めてから２時間はかかると言われており，学校の始業時刻から逆算すると午前６時30分頃までには起床することが望ましいと思われる。また，６時30分までに起床することや成長ホルモンの分泌を考えると，就寝時刻は午後９時から10時の間が望ましいと思われる。朝ご飯をしっかり摂ることは，１つ目に，エネルギーがゆきわたり体が目を覚まし動きやすくなること，２つ目は，寝ている間に下がっていた体温が，朝ごはんを摂ることにより体の中で熱がつくられ体温が上がり体の調子がよくなること，３つ目は，脳のエネルギー源の「ブドウ糖」を補給するためである。朝ご飯を食べないと午前中はブドウ糖が不足したままになり，脳にエネルギーがまわらず集中力や記憶力等がうまく働かないと言われている。４つ目に，朝ご飯を摂ることで胃腸が刺激され排便が促され「朝ウンチ」の習慣ができる等，健康作りに大切な役割がある。起床時刻が遅かったり睡眠不足になると朝ご飯をきちんと摂る時間がなかったり食欲が落ちたりするため，「早寝・早起き・朝ごはん」のリズムは大切であり，成長期の幼児児童生徒にとって基本的生活習慣の確立は必要不可欠といえる。

しかし，最近の幼児児童生徒を見ると成長期に必要不可欠な基本的生活習慣が大きく乱れており，この乱れが学習意欲や気力，体力の低下の要因の一つであると指摘されている。

今回の全国学力学習状況調査で明らかになったことは，下記のとおりである。

○定時に就寝している子どもの方が，学力調査の正答率が高い。
○朝食を毎日食べる子どもの方が学力調査の正答率が高い。
○テレビやビデオ・ＤＶＤの視聴時間が短く，テレビゲームをする時間が短い子どもの方が，学力調査の正答率が高い。
○携帯電話を持っていない中学生の方が，学力調査の数学の正答率が高い傾向が見られる

これらの調査結果から，基本的生活習慣の乱れが学力低下の要因の一つになっていることがうかがえる。

本県の結果は，下記のとおりである。

○睡眠時間は，小学生８時間以上，中学生７時間以上が約70％となっており，小学生は全国平均より下回り，中学生は上回っている。朝食を摂っている割合は全国より低くなっている。それには，就寝時刻や起床時刻が起因しているように思われる。家庭において，テレビやＤＶＤを見たり，テレビゲームをしたりする時間が，就寝や起床に大きく影響を及ぼしていると思われる。
○起床時間の遅れは，朝食未摂取や登校しても目覚めない状態で授業を受けることなど，学習の停滞

を引き起こす原因ともなりかねない。

○家族と一緒に食事を摂っている児童生徒の割合は，全国に比べ若干低くなっている。その理由として，親の通勤，子どもの塾通い，部活，寝坊による朝食欠食等により家族が一緒に揃わないことが考えられる。

○携帯電話で通話やメールを「毎日・時々している」割合は，全国平均と比べると４～５％下回っているが，平成19年より平成20年は児童生徒ともに約５％程増加している。

以上の分析結果から，より望ましい基本的生活習慣の確立のために，以下の取り組みや留意点が考えられる。

○前日遅くまで起きていたからと朝寝坊させず，午前６時30分までの起床を心がけたい。朝の光は，心を穏やかに保つ働きのある神経伝達物質「セロトニン」の活動を高める働きがあるので，朝の光を部屋に入れ，明るくし，体内時計をリセットしたい。

○朝ご飯を食べている児童生徒は約90％に上っているが，独りで，または子どもだけで食べていたり，偏食をしていないか，食べる量は適当か等，食事の質が問題となる。成長期であるため，栄養のバランスに気をつけたりや家族団らんのもと食事を摂ることができるように心がけたい。

○家族が一緒に食卓を囲むことことは，単にものを食べる場というだけではなく，家族間のコミュニケーションの場であり，食事のマナーや食べ物について自然に学ぶ場となる。よって，普段の生活の中に定時に朝食を摂ることや起床，就寝時間やテレビゲーム等の時間を決め，生活リズム整える等の家庭でのしつけや学校での指導を行う必要がある。

○児童生徒が携帯電話のメールやインターネットを利用する機会が全国的に急増しており，本県においても平成19年に比べ平成20年は児童生徒ともに増えている。携帯電話のメールやインターネットの利用に伴って「ネット上のいじめ」という問題や，出会い系サイト等の有害な情報に携帯電話からアクセスし犯罪に巻き込まれる事件等も起こっている。そのため，文部科学省より「児童生徒が利用する携帯電話等をめぐる問題への取組みの徹底について（通知）」（平成20年７月）が通達され，各学校および教育委員会において，学校における携帯電話の取り扱いに関する方針を明確化し，児童生徒への指導を徹底すること，原則として，小中学校においては，学校への児童生徒の携帯電話の持ち込みは禁止すること，「ネット上のいじめ」問題に関する取組を徹底すること等が盛り込まれている。教育委員会や学校の方針を保護者に十分説明し，情報モラルの指導も計画的に行いたい。

【家庭での学習・読書習慣】

16　学校の授業時間以外に，普段（月～金），１日当たりどれくらいの時間，勉強しますか
（学習塾で勉　強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含む）

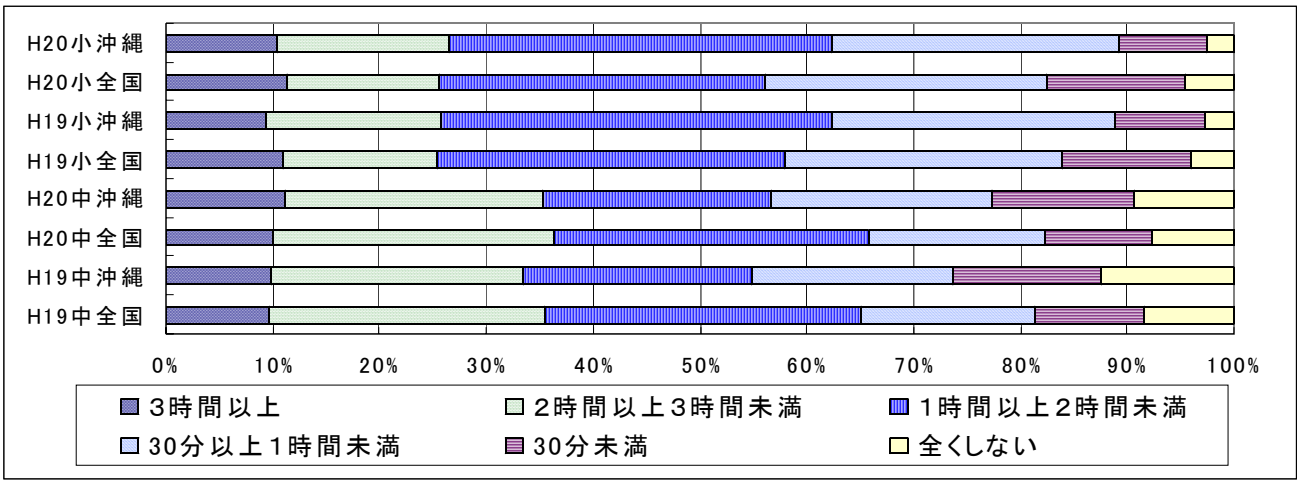

図17 普段の１日当たりの勉強時間（平成19・20年 沖縄と全国）

表20 普段の１日当たりの勉強時間
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：％）	３時間以上	２時間以上３時間未満	１時間以上２時間未満	30分以上１時間未満	30分未満	全くしない
H20小沖縄	10.4	16.1	35.8	26.8	8.2	2.6
H20小全国	11.4	14.1	30.6	26.3	13.0	4.5
H19小沖縄	9.4	16.4	36.5	26.5	8.4	2.8
H19小全国	10.9	14.6	32.4	26.0	12.0	4.1
H20中沖縄	11.2	24.0	21.4	20.6	13.3	9.4
H20中全国	10.2	26.5	29.7	16.7	10.2	7.7
H19中沖縄	9.8	23.6	21.2	18.9	13.8	12.4
H19中全国	9.7	25.7	29.6	16.2	10.2	8.4

「学校の授業以外で全く勉強しない」割合が，平成19年は小学生で2.8％，中学生で12.4％，平成20年は小学生2.6％，中学生9.4％となっている。

平成20年について全国平均と比べると「全く勉強しない」割合が，小学生は1.9％下回っているが，逆に中学生は1.7％上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，１日当たりの学習時間の長い児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が強く見られる。特に数学の正答率が高い傾向が強く見られる。また，テレビやビデオを見る時間，テレビゲームやインターネットをする時間の短い児童生徒の方が，学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向が見られる。

17　土曜日や日曜日など学校が休みの日に，１日当たりどれくらいの時間，勉強しますか
（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含む）

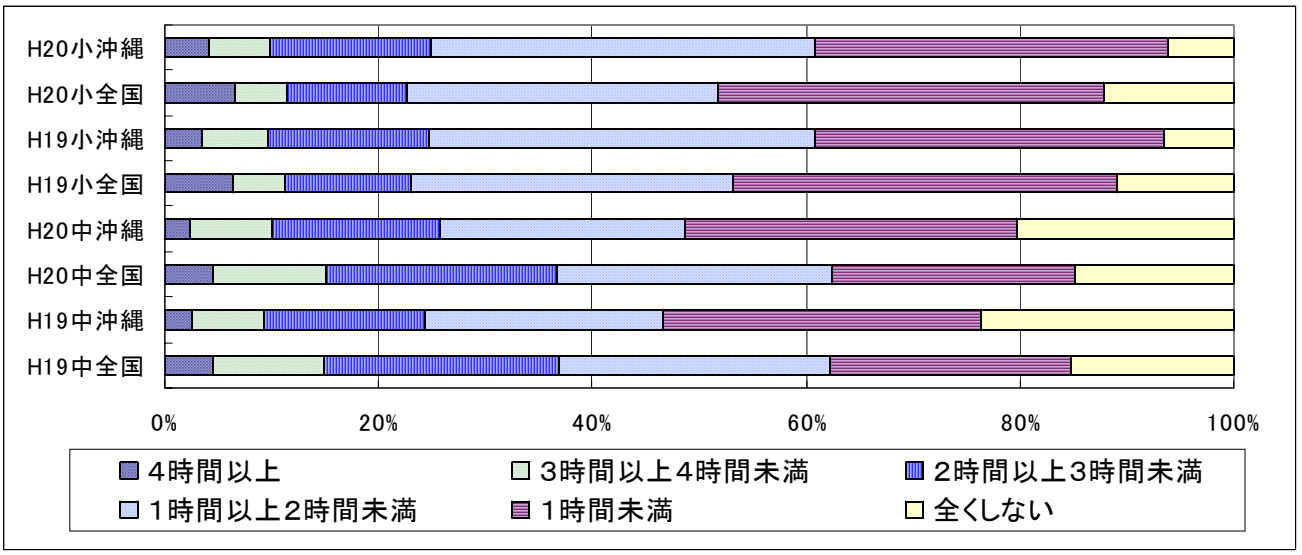

図18 休日の１日当たりの勉強時間（平成19・20年 沖縄と全国）

表21 休日の１日当たりの勉強時間
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：％）	４時間以上	３時間以上４時間未満	２時間以上３時間未満	1時間以上2時間未満	１時間未満	全くしない
H20小沖縄	4.1	5.7	15.0	36.0	32.9	6.2
H20小全国	6.6	4.8	11.3	29.0	36.1	12.2
H19小沖縄	3.5	6.1	15.1	36.1	32.6	6.6
H19小全国	6.4	4.8	11.8	30.2	35.9	10.9
H20中沖縄	2.4	7.6	15.8	22.8	30.9	20.3
H20中全国	4.5	10.6	21.6	25.6	22.8	14.8
H19中沖縄	2.5	6.7	15.0	22.4	29.6	23.6
H19中全国	4.5	10.4	21.9	25.2	22.5	15.2

本県の「休みの日に全く勉強しない」割合が，平成19年は小学生で6.6％，中学生で23.6％，平成20年は小学生6.2％，中学生20.3％となっている。平成20年は，全く勉強しない中学生の割合がやや下回っている。

平成20年の全国平均と比べると「休みの日に全く勉強しない」割合は，小学校は6.0％下回っているが，逆に中学校は5.5％上回っている。

18　家や図書館で，普段（月～金），１日当たりどれくらいの時間，読書しますか
（教科書や参考書，漫画や雑誌は除く）

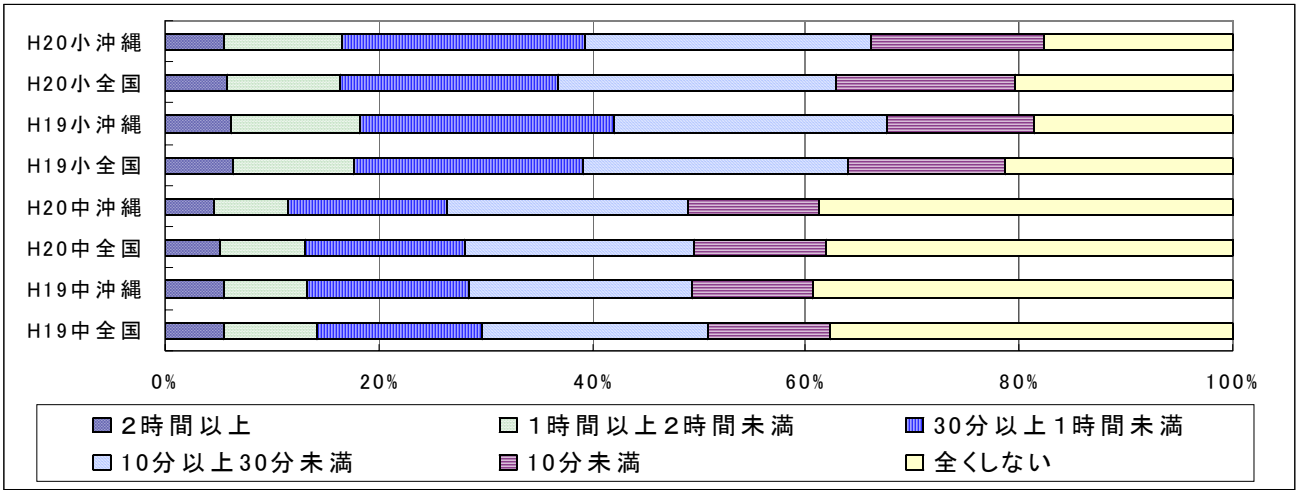

図19 普段の１日当たりの読書時間（平成19・20年 沖縄と全国）

表22 普段の１日当たりの読書時間
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	２時間以上	1時間以上2時間未満	30分以上1時間未満	10分以上30分未満	10分未満	全くしない
H20小沖縄	5.5	11.1	22.7	26.8	16.2	17.6
H20小全国	5.8	10.5	20.5	26.0	16.7	20.4
H19小沖縄	6.2	12.0	23.8	25.6	13.7	18.6
H19小全国	6.3	11.3	21.6	24.7	14.8	21.2
H20中沖縄	4.5	7.0	14.8	22.6	12.2	38.6
H20中全国	5.0	8.0	14.9	21.5	12.4	37.9
H19中沖縄	5.4	7.9	15.1	20.8	11.3	39.3
H19中全国	5.4	8.7	15.6	21.0	11.4	37.7

「普段の1日当たりの読書時間」の「全くしない」割合が，平成19年・平成20年ともに中学生で，本県が全国平均を上回り，１時間以上読書をしている割合は全国平均が本県を上回っている。

小学生においては「全くしない」割合は，逆に全国平均が本県を上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，家や図書館で一日当たり10分以上読書する児童生徒の方が学力調査の国語の正答率が高いという傾向にある。また，家や図書館で読書をする時間が長い児童生徒の方が，学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向が見られる。

53　読書は好きだ

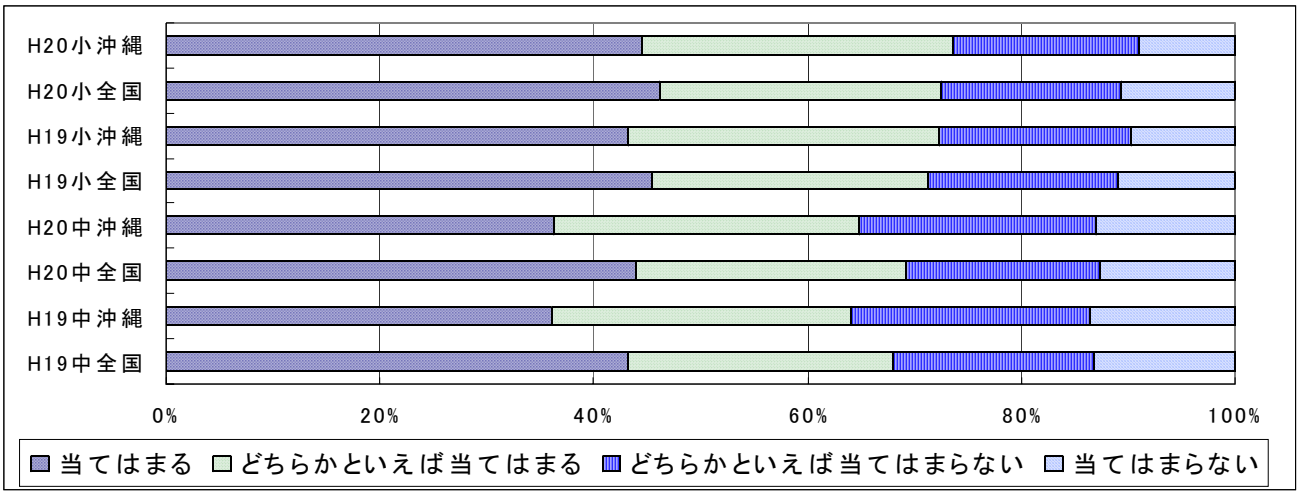

図20 読書が好きな割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表23 読書が好きな割合（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	44.4	29.2	17.3	9
H20小全国	46.1	26.2	16.9	10.6
H19小沖縄	43.2	29	18	9.7
H19小全国	45.4	25.9	17.8	10.9
H20中沖縄	36.1	28.5	22.1	13
H20中全国	43.8	25.2	18.1	12.5
H19中沖縄	35.9	27.9	22.3	13.5
H19中全国	43.2	24.7	18.8	13.1

読書が好きだとする割合は，児童生徒ともに，そして，平成19年・平成20年においても，全国平均が本県を上回っている。

読書が好き（「当てはまる」）について，全国平均（平成20年）と比べてみると，小学生は約2%，中学生は約8%下回っており，中学生の読書離れが課題である。

「学習状況調査結果概要」によると，読書が好きな児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にある。特に，中学生においては国語の正答率が高い傾向が強く見られる。

19　学習塾（家庭教師の先生に教わっている場合も含む）で勉強していますか

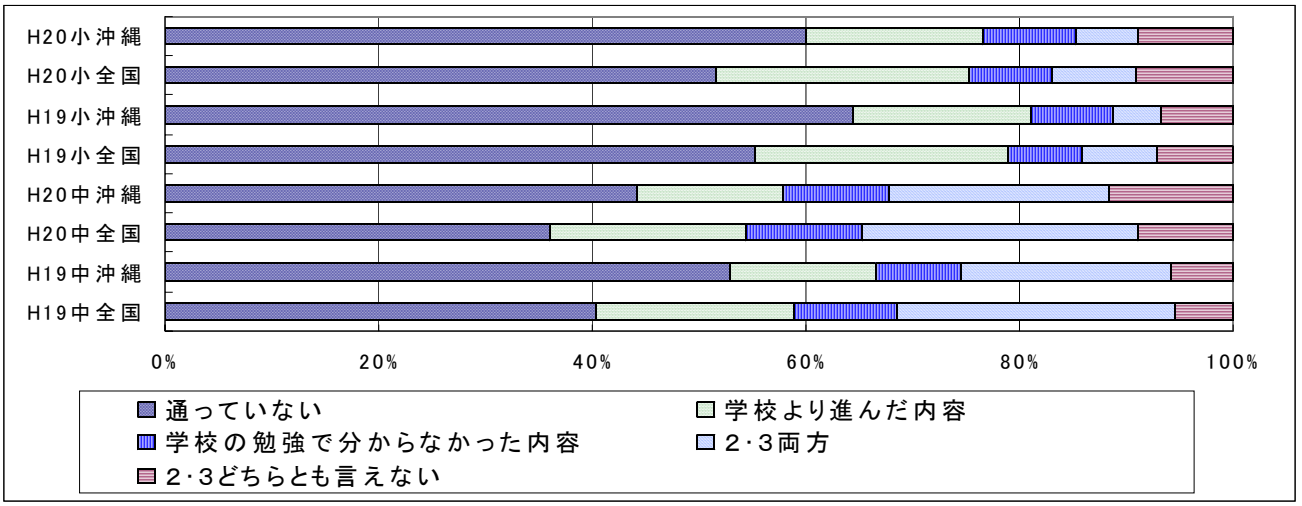

図21 学習塾での勉強する内容（平成19・20年 沖縄と全国）

表24　学習塾での勉強する内容（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	①通っていない	②学校より進んだ内容	③学校の勉強で分からなかった内容	④ ②③両方	⑤ ②･③どちらとも言えない
H20小沖縄	59.8	16.4	8.8	5.7	8.9
H20小全国	51.5	23.6	7.8	7.8	9.0
H19小沖縄	64.2	16.6	7.6	4.6	6.7
H19小全国	55.1	23.7	6.9	7.1	7.0
H20中沖縄	43.7	13.6	9.9	20.4	11.5
H20中全国	35.8	18.3	10.7	25.8	8.8
H19中沖縄	52.6	13.7	7.8	19.7	5.7
H19中全国	40.2	18.5	9.7	25.8	5.5

平成20年の本県の学習塾に通っていない児童生徒の割合は，平成19年に比べると下回っており，塾に通う児童生徒の割合が高くなっている。

全国平均（平成20年）と比べると，学習塾に通っていない割合は，児童生徒ともに約８%本県が上回っている。

また，学習塾で学んでいる内容として「学校より進んだ内容」の割合は全国平均の方が本県より高く，「学校の勉強で分からなかった内容」の割合は全国平均と大きな差はない。

「学習状況調査結果概要」によると，学習塾（家庭教師を含む）で「学校の勉強より進んだ内容や，難しい内容を勉強している」児童生徒，「通っていない」児童生徒，「学校の勉強でよく分からなかった内容を勉強している」児童生徒の順に，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られる。

25　家で自分で計画を立てて勉強している

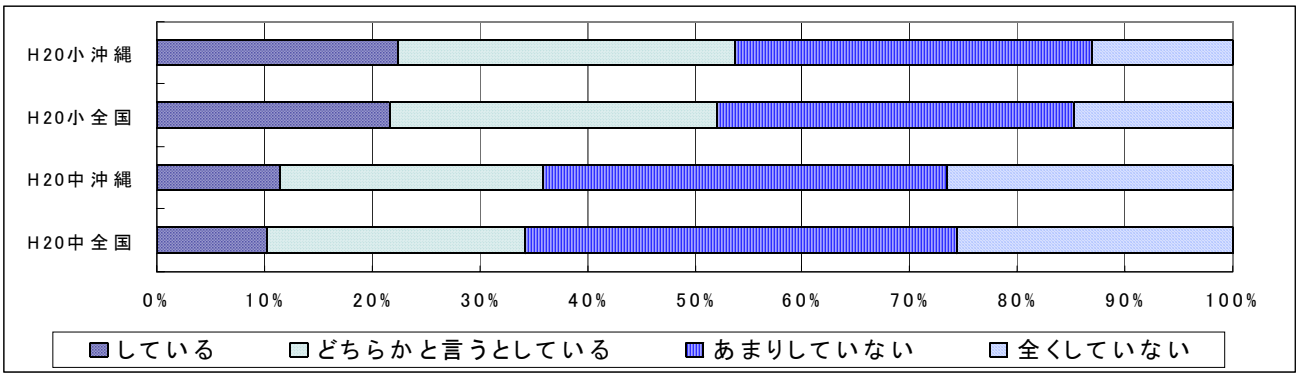

図22 自分で計画を立てて勉強する割合（平成20年 沖縄と全国）

表25 自分で計画を立てて勉強する割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	22.4	31.3	33.1	13.1
H20小全国	21.7	30.3	33.1	14.8
H20中沖縄	11.5	24.4	37.4	26.6
H20中全国	10.2	24.0	40.0	25.6

「自分で計画を立てて勉強する」の肯定的割合について，本県は，小学生53.7%，中学生35.9%となっており，全国平均は小学生52.0%，中学生34.2%となっている。

全国平均と比較すると，ほぼ同様の傾向を示しているが，自分で計画を立てて勉強している割合は，本県の方がやや上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，家で計画を立てて勉強をしている児童生徒の方が，国語・算数／数学の正答率が高い傾向にある。

26　家で学校の宿題をしている

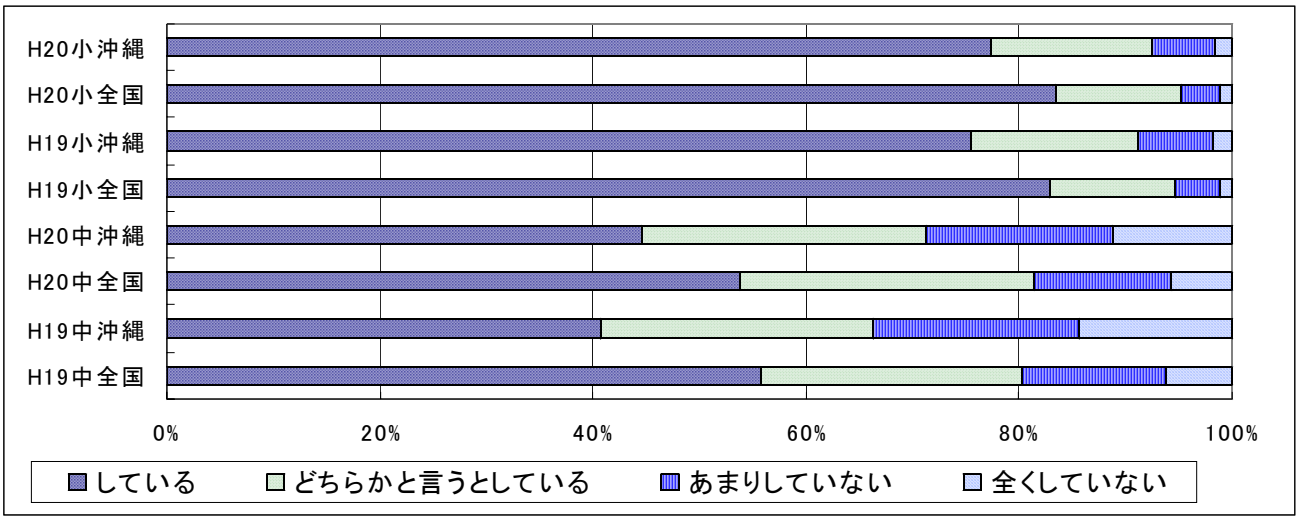

図23 家で学校の宿題をするする割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表26 家で学校の宿題をするする割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	77.3	15.0	5.9	1.7
H20小全国	83.5	11.7	3.7	1.1
H19小沖縄	75.4	15.7	6.9	1.9
H19小全国	82.9	11.8	4.2	1.1
H20中沖縄	44.4	26.7	17.5	11.2
H20中全国	53.8	27.6	12.8	5.7
H19中沖縄	40.7	25.4	19.4	14.3
H19中全国	55.6	24.6	13.4	6.2

「家で学校の宿題をしている」の肯定的割合が，平成19年は小学生91.1%，中学生66.1%，平成20年は小学生92.3%，中学生71.1%となっている。

しかし，図23から分かるように，全国平均（平成20年）と比較してみると，肯定的割合が，小学生2.9%，中学生10.3%程度で全国平均を下回る。

「学習状況調査結果概要」によると，宿題をしている児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られる。

27　家で学校の授業の予習をしている

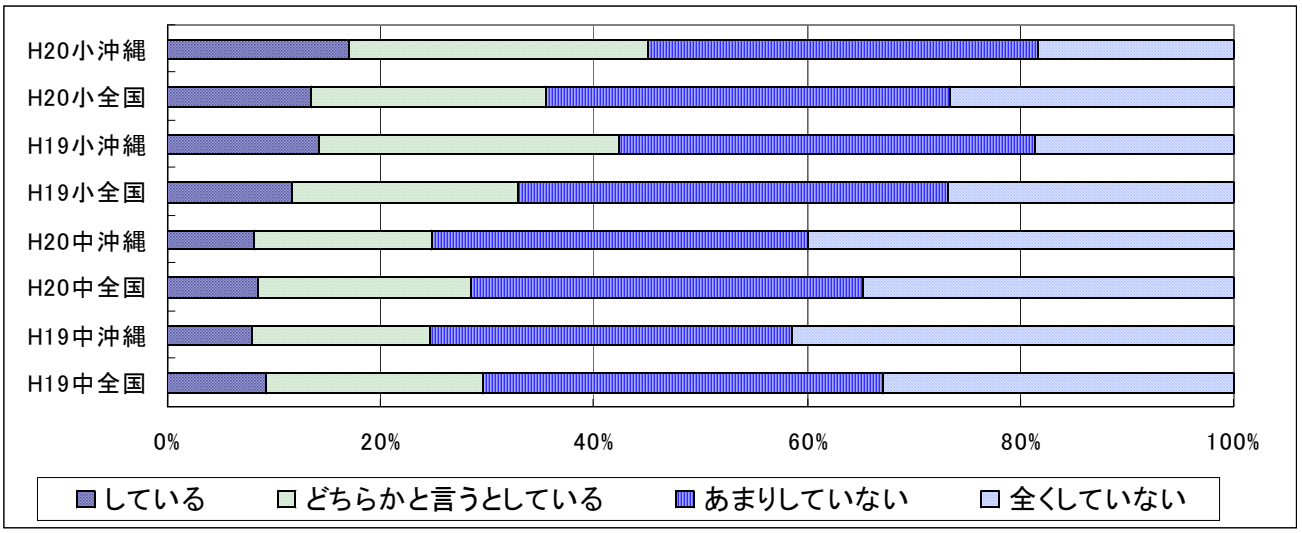

図24 家で学校の授業の予習をする割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表27 家で学校の授業の予習をする割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	17.0	28.1	36.5	18.3
H20小全国	13.5	21.9	38.0	26.5
H19小沖縄	14.2	28.2	38.9	18.7
H19小全国	11.7	21.2	40.2	26.8
H20中沖縄	8.2	16.5	35.2	39.9
H20中全国	8.5	19.9	36.7	34.8
H19中沖縄	8.0	16.5	33.9	41.4
H19中全国	9.3	20.2	37.4	32.9

「家で学校の授業の予習をする」の肯定的割合が，平成19年は小学生42.4%，中学生24.5%，平成20年は小学生45.1%，中学生24.7%となっている。平成20年は児童生徒ともに家で学校の授業の予習をする割合が若干増えている。

しかし，図24から分かるように全国平均（平成20年）と比べると，肯定的割合が小学生は6.2%上回り，中学生は1.5%下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，予習をしている児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られる。

28　家で学校の授業の復習をしている

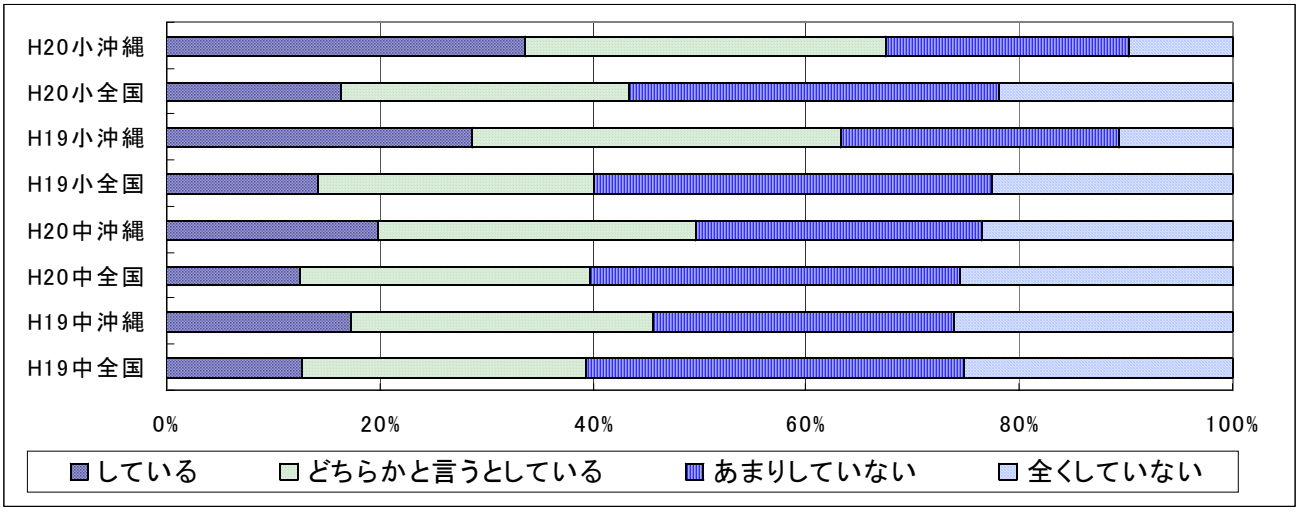

図25 家で学校の授業の復習をする割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表28 家で学校の授業の復習をする割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	33.6	33.7	22.8	9.7
H20小全国	16.3	27.1	34.6	21.9
H19小沖縄	28.7	34.4	26.1	10.7
H19小全国	14.2	25.9	37.3	22.6
H20中沖縄	19.8	29.6	26.9	23.4
H20中全国	12.4	27.2	34.7	25.4
H19中沖縄	17.3	28.2	28.1	26.1
H19中全国	12.6	26.6	35.4	25.2

「家で学校の授業の復習をする」についての肯定的割合が，平成19年は小学生63.1%，中学生45.5%，平成20年は小学生67.3%，中学生49.4%となっている。

平成20年は児童生徒ともに家で学校の授業の復習をする割合が若干増えている。

図25から分かるように，全国平均（平成20年）と比べ，肯定的割合が小学生23.9%，中学生10.0%とともに上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，復習をしている児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られる。

2　学校に持って行くものを前日かその日の朝に確かめている

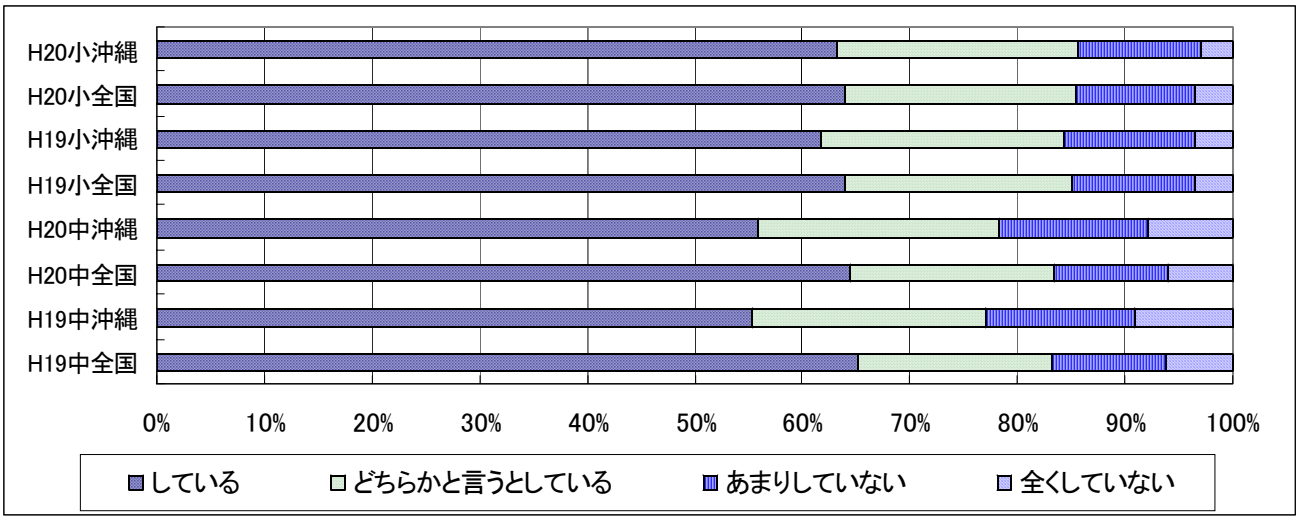

図26 学習用具を前日か朝に確認する割合（平成19・20年 沖縄と全国）

表29 学習用具を前日か朝に確認する割合
（平成19・20年 沖縄と全国）

（単位：%）	している	どちらかと言うとしている	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	63.2	22.4	11.5	2.9
H20小全国	63.8	21.5	11.2	3.4
H19小沖縄	61.7	22.6	12.2	3.4
H19小全国	64.0	21.2	11.5	3.4
H20中沖縄	55.9	22.3	13.8	7.9
H20中全国	64.4	18.9	10.6	6.0
H19中沖縄	55.3	21.6	13.9	9.1
H19中全国	65.1	18.0	10.6	6.1

「学習用具を前日か朝に確認している」の肯定的割合が，平成19年は小学生84.3%，中学生76.9%，平成20年は小学生85.6%，中学生78.2%となっている。平成20年は，児童生徒ともに「学習用具を前日か朝に確認するが若干増えている

しかし，図26から分かるように，全国平均（平成20年）と比べると，肯定的割合が小学校はほぼ同じだが，中学生は5.1%下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，学校に行く前に持ち物を確認している児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

49 テストで間違えた問題について，間違えたところを後で勉強している

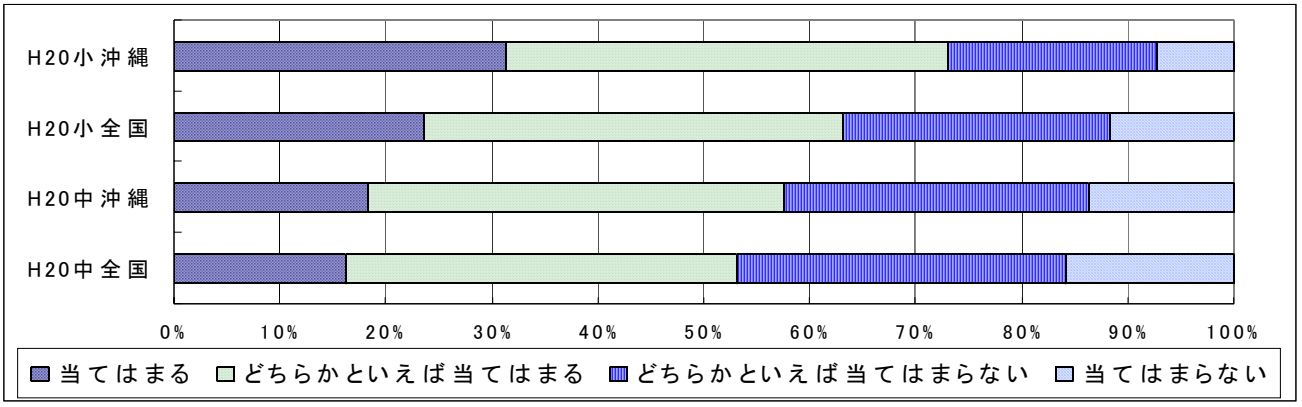

図27 テストの間違いを見直し勉強する割合（平成20年 沖縄と全国）

表30 テストの間違いを見直し勉強する割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	31.3	41.7	19.7	7.2
H20小全国	23.6	39.5	25.1	11.7
H20中沖縄	18.2	39.1	28.5	13.6
H20中全国	16.1	36.8	30.9	15.8

「テストの間違いを見直し勉強する」についての肯定的割合は，児童生徒とも本県が全国平均を上回っており，特に小学生は約８%上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，テストで間違えたところを後で勉強している児童生徒の方が国語・算数／数学の正答率が高い傾向が見られ，特に，数学の正答率が高い傾向が強く見られる。

48　普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思う

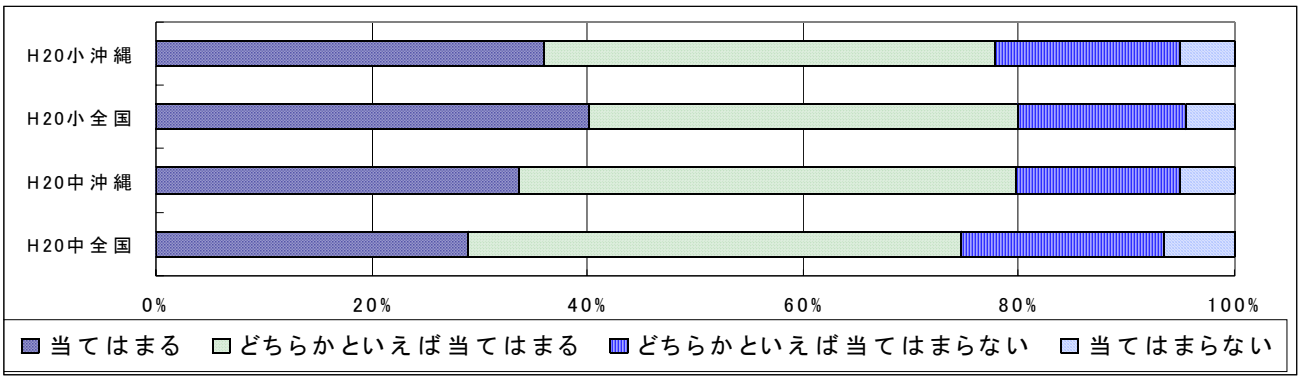

図28 授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思う割合（平成20年 沖縄と全国）

「授業で自分の考えを発表する機会が与えられている」と思う県内の肯定的割合が，小学生77.6％，中学生79.5％となっており，８割弱の児童生徒が授業で自分の考えを発表する機会を与えられていると捉えている。全国平均と比べると，中学生は5.0％上回っているが，小学生は2.1％下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，授業で自分の考えを発表する機会があると思う児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向があるとしている。

表31 自分の考えを発表する機会が与えられていると思う割合（平成20年 沖縄と全国）

（単位：％）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	35.9	41.7	17.2	5.0
H20小全国	40.0	39.7	15.6	4.5
H20中沖縄	33.5	46.0	15.1	5.1
H20中全国	28.8	45.7	18.8	6.5

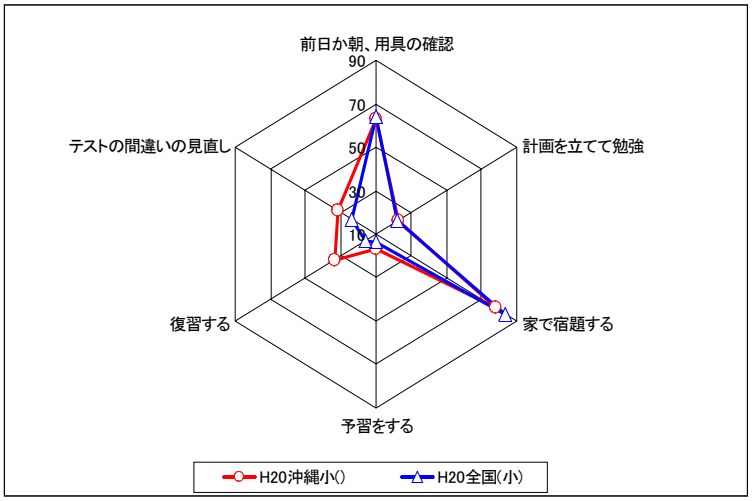

図 29 前日か朝に学習用具を確認・自分で計画を立てて勉強・家で予習・復習・テストの間違いの見直しをするについての「当てはまる」の比較（平成 20 年 小学生）

図29は小学生の平成20年の本県と全国平均の比較，図30は中学生の平成20年の本県と全国平均のグラフである。

児童生徒の家庭における学習習慣について「宿題をする・予習をする・復習をする・計画を立てて勉強する・事前に学習用具を確認する・テストの間違いを見直す」について「当てはまる」をレーダーチャートに表した。

小学生では，６項目中５項目は全国平均と同等以上であり，「宿題をする」１項目のみが下回っていた。このことから，本県の小学生の家庭での学習習慣は全国平均と比較してよいことがわかった。

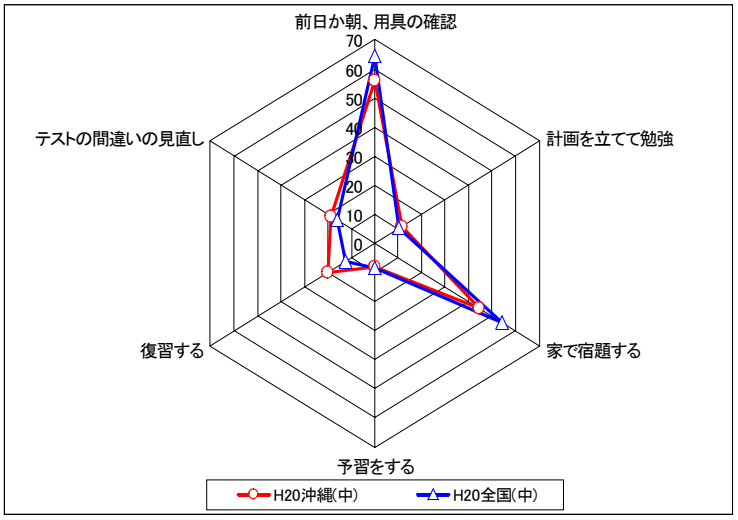

図30 前日か朝に学習用具を確認・自分で計画を立てて勉強・家で予習・復習・テストの間違いの見直しをするについての「当てはまる」の比較（平成20年 中学生）

しかし，中学生では，６項目中２項目「家で復習をする」「テストの間違いを見直す」が上回り，２項目が同程度，「家で宿題をする」「前日か朝，用具の確認をする」の２項目が下回っていた。

【家庭での学習・読書習慣についての考察】

「中間報告　学力向上のための基本調査2008」（平成20年11月 Benesse 教育研究開発センター）において，下記のような報告がなされている。

○２教科（国語・算数／数学）平均正答率と家庭学習力との相関において，家庭学習力の項目の肯定群の方が，否定群よりも基礎問題や応用問題の正答率が高く，特に，応用的学力で大きな差異を生じている。

○どの宿題であれ，熱心に取り組んでいる児童生徒ほど全般に教科学力は高い。

○「基礎的な反復ドリル」と「応用発展・探究的課題」の取り組みパターンと教科学力の関係で，２教科（国語・算数／数学）平均正答率が高かった順位は次のとおりである。

1　「基礎的な反復ドリル」と「応用発展・探究的課題」のどちらも行う
2　「基礎的な反復ドリル」を行う
3　「応用発展・探究的課題」を行う
4　「基礎的な反復ドリル」と「応用発展・探究的課題」のどちらも行わない

○児童（小５）が宿題に取り組む度合いと特に関係の深い宿題の在り方として，「課題が事前に計画的に提示されている」「宿題の目当てや評価規準が明示されている」「宿題の量がある程度多い」「やる気を喚起するような宿題である」「宿題が授業に活かされる」等があげられる。生徒（中２）は，「計画的に取り組める宿題」「宿題で出した内容を生かした授業」は児童と同様に相関が見られたが，「多くの宿題が出る」は殆ど相関は見られず，「宿題をしてきたら評価してくれる」「学習する意義が分かる」ような宿題との相関が強く現れた。

○宿題と自主学習の両方に取り組んでいる児童生徒の授業理解力度，教科学力がともに最も高い。

今回の全国学力・学習状況調査で明らかになったことは，下記のとおりである。

○１日当たりの学習時間の長い児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向が強く見られる。特に数学の正答率が高い傾向が強く見られる。また，テレビやビデオを見る時間，テレビゲームやインターネットをする時間の短い児童生徒の方が，学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向が見られる。

○家や図書館で一日当たり10分以上読書する児童生徒の方が学力調査の国語の正答率が高いという傾向にある。また，家や図書館で読書をする時間が長い児童生徒の方が，学校の授業以外で勉強する時間が長い傾向が見られる。

○読書が好きな児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にある。特に，中

学生においては国語の正答率が高い傾向が強く見られる。
○家で「計画を立てて勉強をしている」「宿題をする」「予習・復習をする」「テストの間違いを見直し勉強する」「学習用具を前日か朝に確認する」児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にある。

平成20年全国学力・学習状況調査追加分析（平成20年12月15日）は，下記のとおりである。
○児童生徒の学力には，家庭での生活・学習習慣や学習意欲が大きく関係していることが分かった。最も学力との関係が強い項目は，小学校で「普段の授業で自分の考えを発表する機会が与えられていると思う」であり，中学校の国語では「読書が好き」であった。
○小・中学校, A問題・B問題のいずれにも共通して学力調査の正答数と大きな関係が見られたのは,「学校に持って行くものを前日か，その日の朝に確かめている」「学習塾で高度な内容を勉強している」「家で学校の宿題をしている」である。「学習塾で高度な内容を勉強している」は，A問題の正答数と大きく関係しているのに対し，B問題ではA問題ほど大きな関係は見られなかった。

本県の結果は，下記のとおりである。
○普段，学校の授業以外で全く勉強しない中学生が10％前後，休日は約20％となっている。
○普段，30分以上読書している小学生は全国平均より約３％程上回っている。しかし，中学生は全国平均とほぼ同様ではあるものの，全く読書をしない生徒が約40％もいる。
○読書が好きだとする割合は，児童生徒ともに全国平均より下回っている。
○家で学校の宿題をしている割合が，児童生徒ともに全国平均を下回っている。特に，中学生は約10％程も下回っている。
○小学生は予習・復習をする割合が全国平均より上回り，特に復習において約20％上回っている。中学生は予習している割合は全国平均よりやや下回り，復習する割合は10％程上回っている。
○テストで間違えたところを勉強している割合は,児童生徒ともに全国平均より本県が上回っている。
○学習用具の確認について，小学生は全国平均とほぼ同様であるが，中学生は約５％下回っている。
○「授業で自分の考えを発表する機会を与えられていると思う」割合が小学生より中学生の方が上回り，全国平均と比べても，中学生は５％上回っているが，小学生は２％下回っている。

沖縄県内の小中学生の家庭での学習習慣や読書習慣についての分析結果から，今後より望ましい習慣の確立のために以下の取り組みや留意点が考えられる。
○読書の習慣が身に付いている生徒ほど，国語の正答率が高い傾向にあることから，小学校段階で家庭での読書習慣を確立させ，中学校に上がっても継続して読書ができる環境を整えることが，国語力向上，及び学習習慣の確立が図れると考える。
○家庭学習をはじめとする授業以外の学習の重要性について指導するとともに，学習の仕方に係るオリエンテーションの場を設ける等して，予習・復習の仕方について具体的に繰り返し指導する必要がある。特に中学生では，一日の生活時間を見直し，学習時間の確保に努めたい。
○宿題の効果的な活用や授業への生かし方，計画的な提示，評価規準の明確化等について，教師や学校で再検討する必要がある。また，家庭学習の支援を図る必要から，学習の手引きの活用や宿題をすることの意義，必要性について，家庭との連携を図ることも重要である。
○学習の場を学級にとどめず，学年，学校，地域へと広げることにより，学習内容を生活の場で活用する能力の育成を図る。
○学校に行く前に持ち物を確認している児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあることから，前もって確認しない児童生徒に対し，家庭と連携した支援が必要である。
○テストの間違えたところを見直し勉強することを小学校から習慣化し中学校においても継続させる工夫をすれば，学力の定着を図る手立てになると考える。
○家庭での学習習慣や読書習慣の分析結果から，本県の小学生は全国平均を上回っているにもかかわらず，中学生で全国平均を下回っていることがわかった。小学校で身についていた習慣が，なぜ中学校になるとできなくなるのか。その要因を調査し，対応策をとることが必要である。

【自己に関すること】

7　自分には，よいところがあると思う

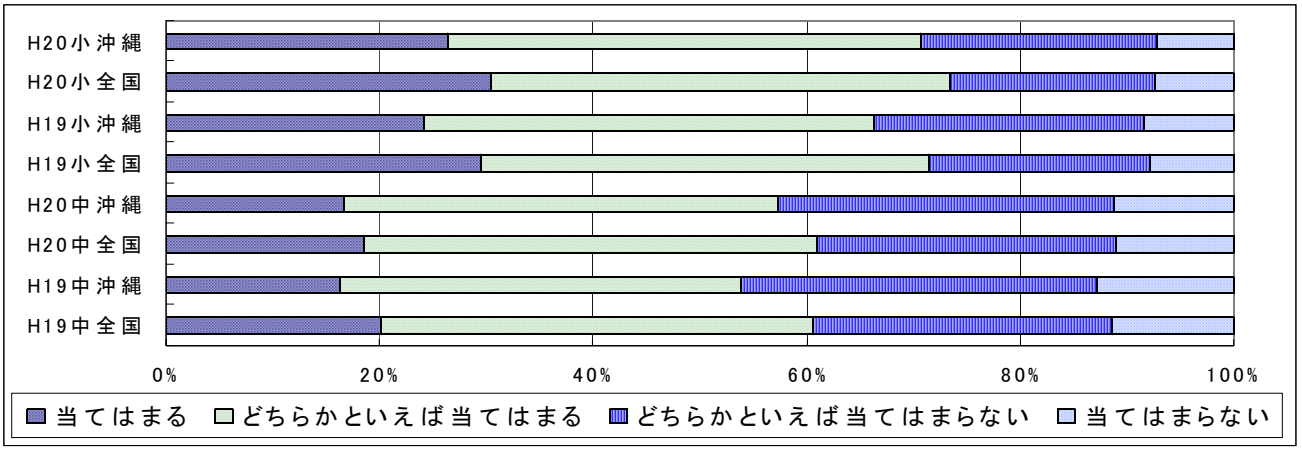

図31 自分にはよいところがあると思う割合（平成20年 沖縄と全国）

表32　自分によいところがあると思う割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	26.3	44.3	22.2	7.1
H20小全国	30.3	43.1	19.1	7.4
H19小沖縄	24.2	42.0	25.2	8.5
H19小全国	29.4	42.1	20.6	7.9
H20中沖縄	16.7	40.4	31.5	11.1
H20中全国	18.5	42.3	28.0	11.0
H19中沖縄	16.3	37.3	33.3	12.8
H19中全国	20.1	40.4	27.9	11.4

「自分にはよいところがあると思う」県内の肯定的割合が，平成19年は小学生66.2%，中学生53.6%，平成20年は小学生70.6%，中学生57.1%となっており，19年と比べて20年は自分のよさを認める児童生徒の割合はやや上回っている。

しかし，小学生で約30%，中学生で約40%の児童生徒が自己のよさを感じていないと回答している。

全国平均（平成20年）と比べても，自己のよさを認める割合が，小学生で2.8%，中学生3.7%下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，自分によいところがあると思う小学生は国語・算数ともに学力調査の正答率が高い傾向にあり，自分によいところがあると思う中学生は数学の正答率が高い傾向にある。

5　ものごとを最後までやりとげて，うれしかったことがある

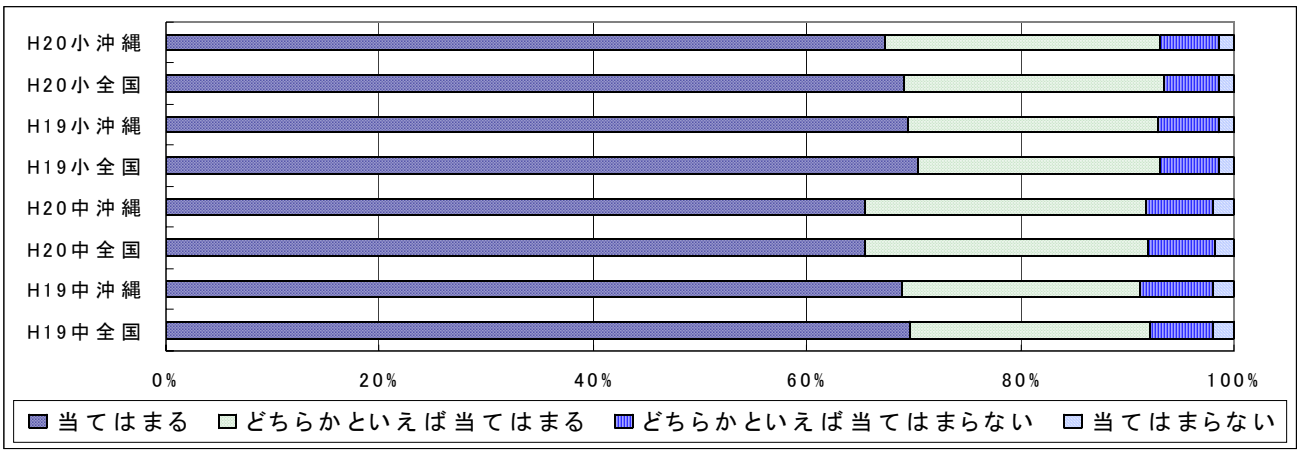

図32 最後までやりとげて嬉しかったことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

表33 最後までやりとげて嬉しかったことがある（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	67.1	25.7	5.6	1.4
H20小全国	69.1	24.4	5.1	1.4
H19小沖縄	69.4	23.3	5.8	1.4
H19小全国	70.4	22.7	5.4	1.5
H20中沖縄	65.4	26.1	6.3	2.0
H20中全国	65.3	26.6	6.1	1.9
H19中沖縄	68.8	22.4	6.7	2.0
H19中全国	69.6	22.4	5.9	2.0

「最後までやりとげて嬉しかったことがある」の県内の肯定的割合が，平成19年は小学生92.7%，中学生91.2%，平成20年は小学生92.8%，中学生91.5%となっている。ものごとを最後までやりとげた喜びを経験していることについて肯定的回答をしている児童生徒が９割を超えている。中でも「当てはまる」（平成20年）の割合が小学生で67.1%，中学生65.4%となっており，やりとげた喜びを確かに感じている児童生徒が約７割となっている。

「学習状況調査結果概要」によると，ものごとを最後までやりとげて嬉しかったことがある児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向があるとしている。

8　将来の夢や目標をもっている

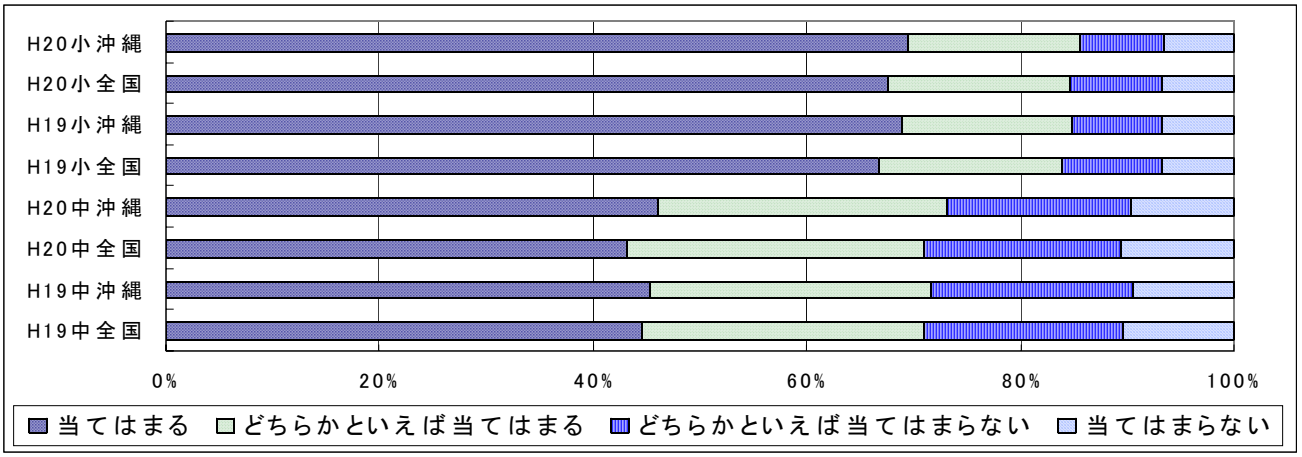

図33 夢や目標をもっている割合（平成20年 沖縄と全国）

表34 夢や目標をもっている（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	69.4	16.1	7.9	6.5
H20小全国	67.6	17.1	8.6	6.7
H19小沖縄	68.7	15.9	8.5	6.7
H19小全国	66.6	17.1	9.3	6.8
H20中沖縄	45.9	27.0	17.2	9.7
H20中全国	43.1	27.6	18.5	10.6
H19中沖縄	45.3	26.3	18.8	9.4
H19中全国	44.4	26.3	18.6	10.4

「夢や目標をもっている」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生84.6%，中学生71.6%，平成20年は，小学生85.5%，中学生72.9%となっている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べても，小学生で1.8%，中学生で2.8%上回っている。「どちらかと言えば当てはまる」を含めても全国平均をやや上回っている。

40　人の役に立つ人間になりたいと思う

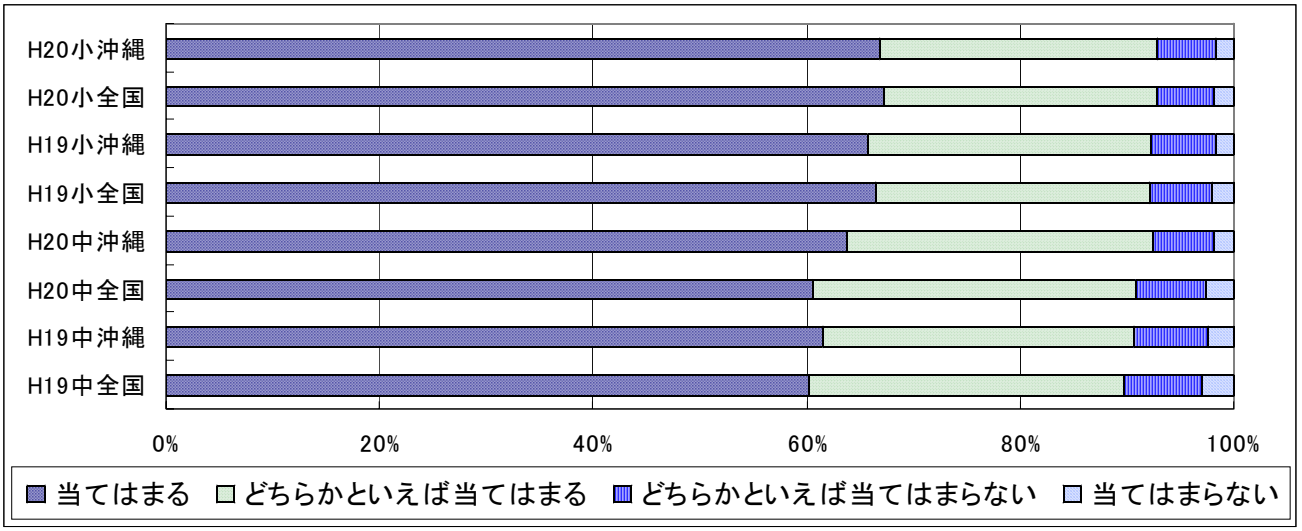

図34 人の役に立つ人間になりたいと思う割合（平成20年 沖縄と全国）

表35　人の役に立つ人間になりたい（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	66.6	25.9	5.5	1.6
H20小全国	66.9	25.5	5.3	1.9
H19小沖縄	65.6	26.4	6.1	1.6
H19小全国	66.2	25.7	5.8	2.0
H20中沖縄	63.5	28.6	5.7	1.8
H20中全国	60.4	30.1	6.7	2.5
H19中沖縄	61.4	28.9	7.0	2.4
H19中全国	60.2	29.4	7.3	2.9

「人の役に立つ人間になりたい」と思う県内の肯定的割合が，平成19年は小学生92%，中学生90.3%，平成20年は，小学生92.5%，中学生92.1%となっている。

特に中学生において「当てはまる」とした割合が全国平均（平成20年）より2.9%上回っている。

約９割の児童生徒が社会貢献できる人間でありたいと望んでいる。

「学習状況調査結果概要」によると，人の役に立つ人間になりたいと思う小学生の方が学力調査の国語・算数の正答率が高い傾向にあるとしている。中学生においてはその傾向は現れていない。

6　難しいことでも，失敗をおそれないで挑戦している

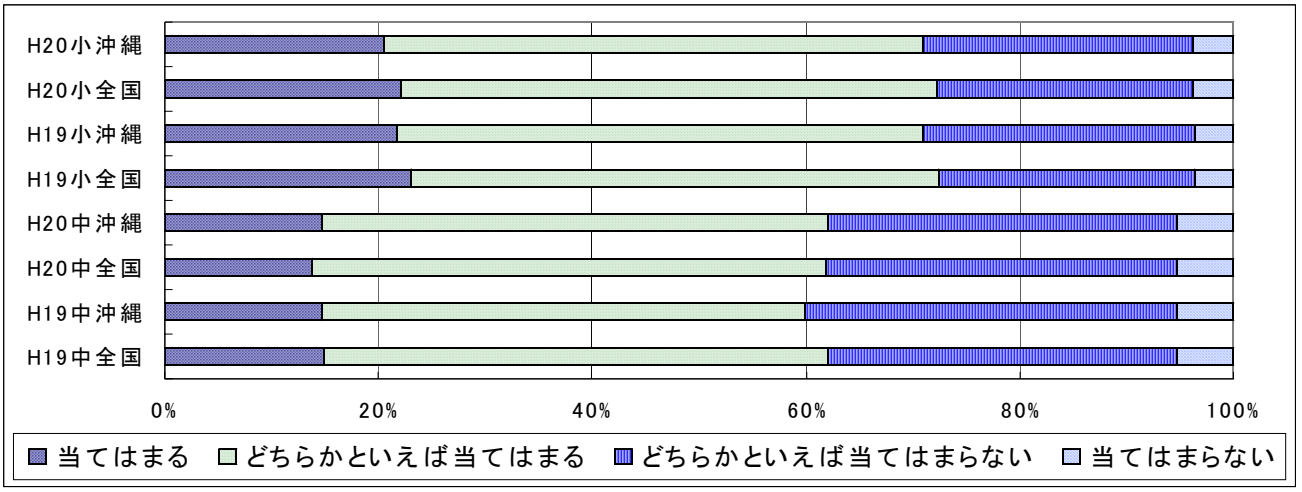

図35 難しいことでも失敗をおそれず挑戦している割合（平成20年 沖縄と全国）

表36　難しいことでも失敗をおそれず挑戦している
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	20.5	50.5	25.2	3.8
H20小全国	22.2	50.1	23.8	3.9
H19小沖縄	21.8	49.2	25.3	3.7
H19小全国	23.1	49.2	23.9	3.7
H20中沖縄	14.7	47.2	32.7	5.2
H20中全国	13.7	48.2	32.8	5.2
H19中沖縄	14.7	45.0	34.8	5.3
H19中全国	14.8	47.2	32.7	5.2

「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生71%，中学生59.7%，平成20年は，小学生71.5%，中学生61.9%となっており，中学生は平成19年より平成20年は2.2%上回っている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は1.7%下回り，中学生は1.0%ほど上回っているが，ほぼ全国平均なみといえる。

「学習状況調査結果概要」によると，難しいことでも失敗をおそれず挑戦している小学生の方が学力調査の算数の正答率が高い傾向にあるとしている。

表37 「自分によいところがある」に対する
「失敗をおそれず挑戦している」の「当てはまる」の割合

（単位：%）	自分によいところがある	失敗をおそれず挑戦している	「よいところがある」に対する「挑戦している」割合
H20小沖縄	26.3	20.5	77.9
H20小全国	30.3	22.2	73.3
H19小沖縄	24.2	21.8	90.1
H19小全国	29.4	23.1	78.6
H20中沖縄	16.7	14.7	88.0
H20中全国	18.5	13.7	74.1
H19中沖縄	16.3	14.7	90.2
H19中全国	20.1	14.8	73.6

表37は「自分によいところがある」とした児童生徒に対する「難しいことでも失敗をおそれず挑戦している」児童生徒の「当てはまる」の割合である。単純に比較はできないが，自己の良さを認め自分に対する自信をもっている方が，難しいことでも失敗を恐れず挑戦することをよりできると思われるため，その割合を表にまとめてみた。

平成19年平成20年ともに全国平均より上回っている。平成20年は，小学校4.6%，中学校3.9%となっており，「自分によいところがある」に対する「難しいことでも失敗をおそれず挑戦している」割合が，県内の児童生徒はやや高いと言える。

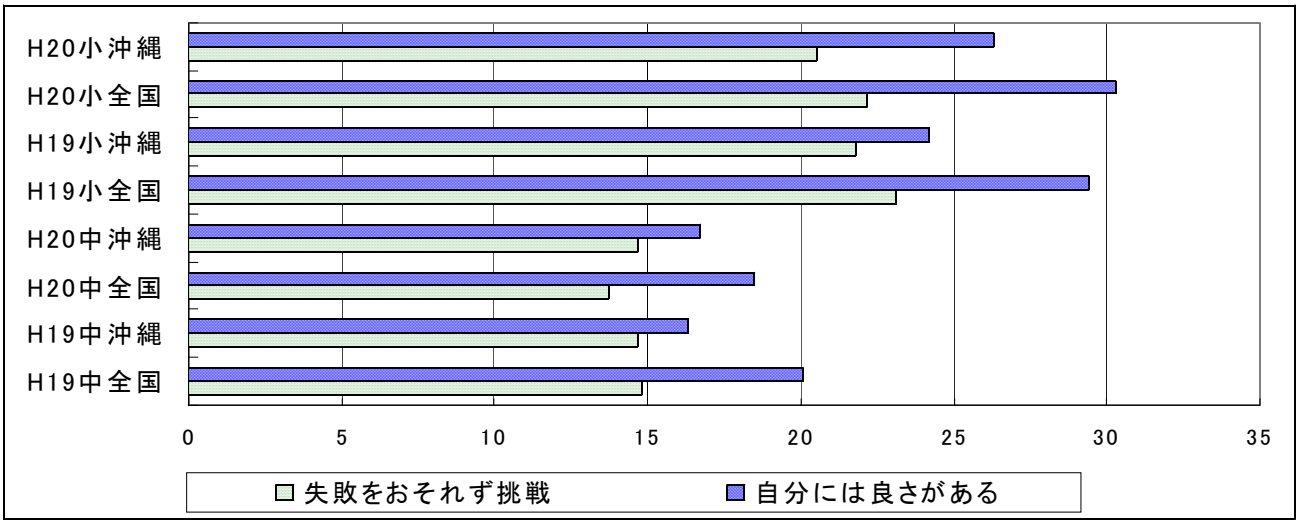

図36 「自分にはよいところがある」と「難しいことでも失敗をおそれず挑戦している」の「当てはまる」の比較

30　学校で好きな授業がある

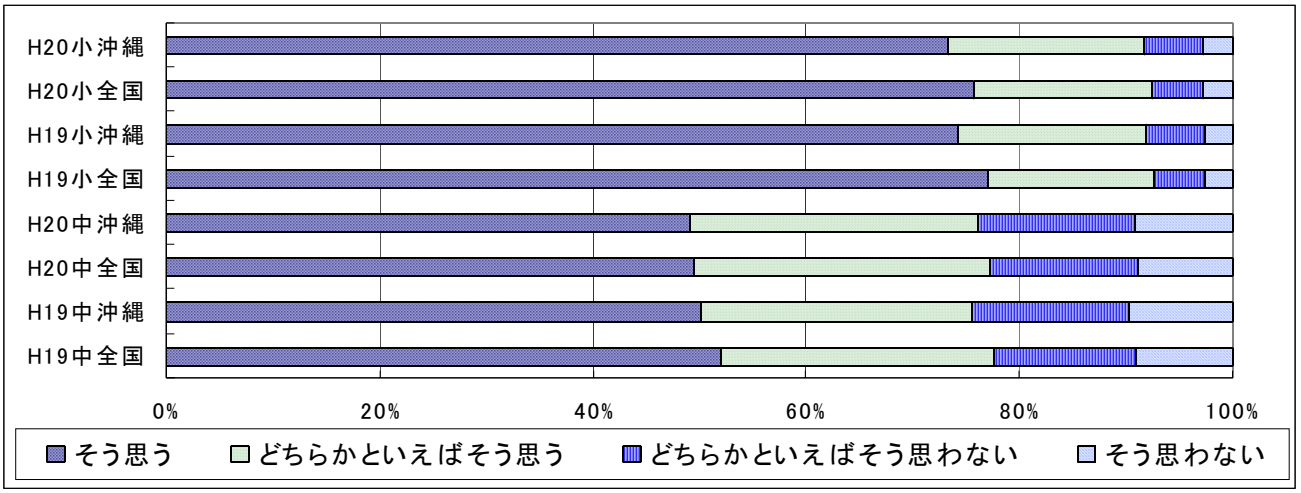

図37 学校で好きな授業がある割合（平成20年 沖縄と全国）

表 38 学校で好きな授業がある（平成20年 沖縄と全国

（単位：%）	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
H20小沖縄	73.3	18.4	5.5	2.8
H20小全国	75.7	16.7	4.7	2.8
H19小沖縄	74.2	17.6	5.5	2.6
H19小全国	77.0	15.7	4.7	2.6
H20中沖縄	49.0	26.9	14.7	9.2
H20中全国	49.4	27.8	14.0	8.8
H19中沖縄	50.0	25.4	14.6	9.8
H19中全国	51.9	25.6	13.4	9.0

「学校で好きな授業がある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生91.8%，中学生75.4%，平成20年は，小学生91.7%，中学生75.9%となっている。

肯定的割合が小学生で９割，中学生で８割弱となっている。

しかし，「そう思う」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は2.4%下回っていることや，「どちらかといえばそう思わない」（平成20年）が児童生徒ともに若干多い結果となっている。

【自己に関することについての考察】

「小学校学習指導要領解説道徳編」（平成20年8月文部科学省）において「自分に自信のある子どもが国際的に見て少ない」ことを課題の一つとして取り上げ，「子どもたちが，他者，社会，自然，環境との豊かなかかわりの中で生きるという実感や達成感を深めてこそ健全な自信が育まれる」こと，「自分への自信をもたせる必要がある」ことを提言している。

今回の全国学力・学習状況調査で明らかになったことは，下記のとおりである。

○自分によいところがあると思う児童は学力調査の国語・算数，生徒は数学の正答率が高い。

○ものごとを最後までやりとげて嬉しかったことがある児童生徒の方が学力調査（国語・算数／数学）の正答率が高い。

○人の役に立つ人間になりたいと思う児童の方が学力調査（国語・算数）の正答率が高い。

○難しいことでも失敗を恐れず挑戦している児童の方が，学力調査の算数の正答率が高い。

本県の結果は，下記のとおりである。

○「自分によいところがあると思う」割合が，全国平均と比べ小中学生ともに下回っており，否定的割合が小学生で約３割，中学生で約４割となっている。

○「ものごとを最後までやりとげて嬉しかったことがある」や「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」「人の役に立つ人間になりたいと思う」は，全国とほぼ同じような割合となっている。

○ 「自分によいところがあると思う」に対する「難しいことでも失敗を恐れず挑戦している」児童生徒の割合は，全国平均より若干上回っている。

○「将来の夢や目標をもっている」は全国平均とほぼ同じような割合となっているが，肯定的回答の中でも「当てはまる」の割合が全国平均より若干上回っている。

本県児童生徒の自己に対する捉えや夢・目標等についての分析結果から，自己肯定感や自己有用感，達成感等を高め，向上心を持ち，失敗を恐れず挑戦する力を身につけさせるために，以下のような取り組みが必要であると考える。

○自己のよさを認識することで自分への自信に繋がる。ものごとを最後までやりとげて嬉しかったことがあるとする児童生徒が約９割，夢や目標をもっている児童生徒が約8割いることから，最後までやり通すことや夢や目標をもっていることを自らのよさとして自覚させ自信に繋げる。

○自己肯定感や自己有用感を高めるために，当番活動・係活動を責任を持って行ったり工夫したりできること，学習問題を解くための考え方や手法のよさ，友達と協力し合えること，時や場に応じた言動ができること，物事に取り組む姿勢のよさ等，教育活動のあらゆる場やあらゆる機会を通して，児童生徒のよさを認識させる。また，構成的グループエンカウンター等を意図的・計画的に活用することも有効である。本総合教育センターホームページに構成的グループエンカウンターの具体的な実践事例が掲載されているので参照にされたい。

○失敗をおそれず挑戦することが難しいのは，やはり，失敗することへの躊躇があると考えられる。「ちゃんとやらないといけないから無理！」「上手くいかなかったらどうしよう」「間違えたら恥！」等，失敗することへの恐怖心や対面を気にする気持ち，そして，失敗することをよしとしない周囲の雰囲気も考えられる。「失敗から学ぶ」ことを大切にし，上手くいかなくてもチャレンジすることのよさをみんなで確認し，次に生かせるよう高め合うことが大切である。そして，失敗をおそれず挑戦する機会を児童生徒にどんどん与えたい。

○学習意欲に関する調査研究（平成13年国立教育施策研究所）によると，中・高校生については「将来の職業に関心を持ったとき」や「将来行きたい学校がはっきり決まったとき」に学習意欲が高まるとの調査結果が出されており，夢や目標をもたせることは大切である。道徳の時間や特別活動，総合的な学習の時間，各教科におけるキャリア教育において，教師は，夢やあこがれの職業，就きたい仕事，進学希望する学校，なりたい人間像，そして，夢や目標を達成するためどうすればよいのか等，児童生徒がより具体化できるように支援することが望まれる。（本総合教育センターホームページにキャリア教育の具体的な実践事例を掲載）

【自然体験や生活体験】

41　（小学生になってから，学校以外で）海，山，湖，川などで遊んだこと
（中学生：小学生の頃，または，中学生になってから）

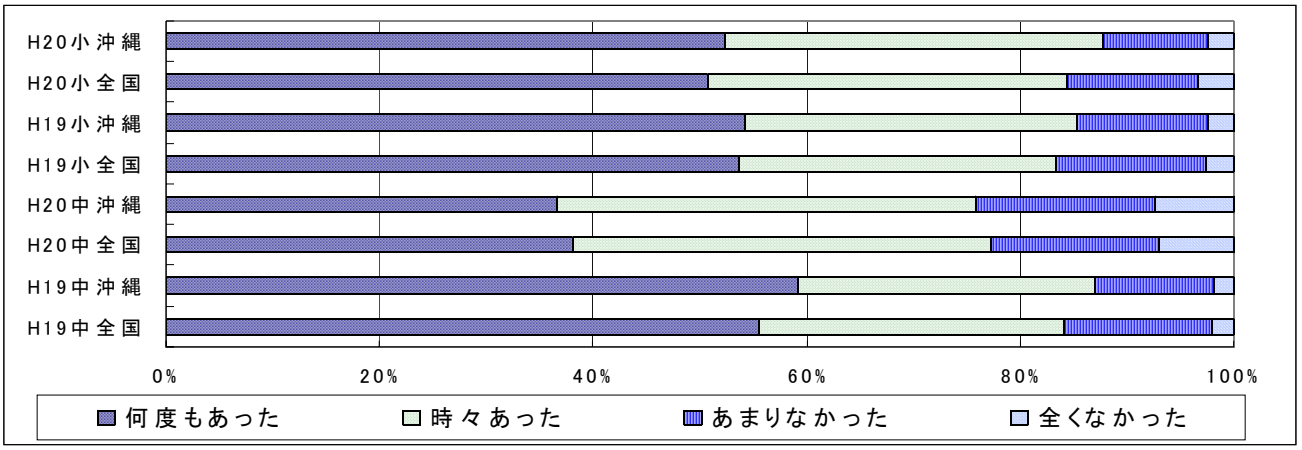

図38 海，山，湖，川などで遊んだことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

表39 海，山，湖，川などで遊んだことがある
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	何度もあった	時々あった	あまりなかった	全くなかった
H20小沖縄	52.4	35.2	10.0	2.3
H20小全国	50.6	33.8	12.2	3.3
H19小沖縄	54.1	31.1	12.4	2.3
H19小全国	53.7	29.6	14.1	2.6
H20中沖縄	36.6	39.1	16.9	7.3
H20中全国	38.1	39.1	15.7	6.9
H19中沖縄	59.0	27.8	11.1	1.8
H19中全国	55.4	28.6	13.9	2.0

「海，山，湖，川などで遊んだことがある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生85.2%，中学生86.8%，平成20年は，小学生87.6%，中学生75.7%となっている。小学生においては平成19年と20年では大きな変化はないが，中学生は11.1%下回っている。

肯定的割合について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は3.2%上回っているが，中学生は1.5%下回っている。

平成20年の中学生の肯定的割合が，平成19年と比べ落ち込みが顕著となっている。

42 （学校以外で）動物を飼育したり，花や野菜を育てたりしたこと

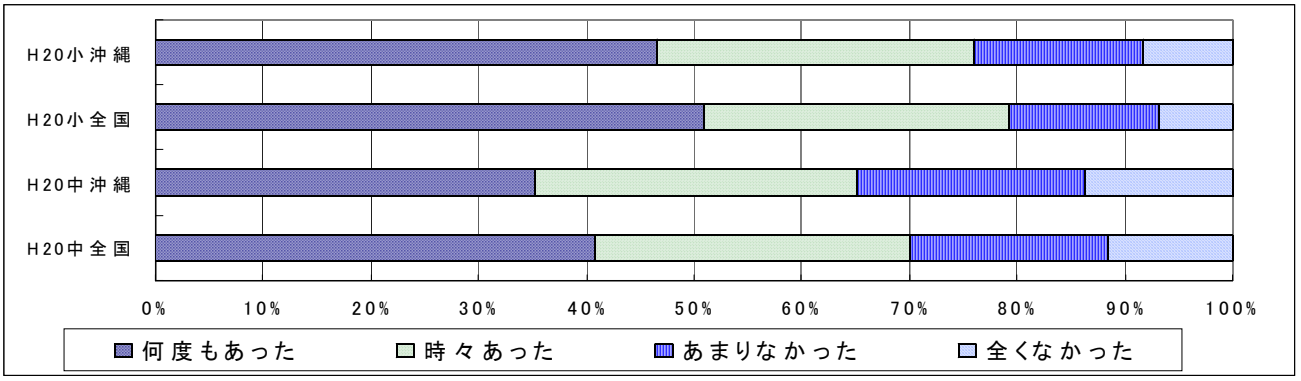

図39 動物飼育や花・野菜栽培をしたことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

表40 動物飼育や花・野菜の栽培をした割合（平成20年 沖縄と全国）

	何度もあった	時々あった	あまりなかった	全くなかった
H20小沖縄	46.6	29.4	15.7	8.3
H20小全国	50.9	28.4	13.9	6.8
H20中沖縄	35.1	29.8	21.2	13.6
H20中全国	40.7	29.2	18.4	11.5

「学校以外で動物飼育や花・野菜栽培をしたことがある」とする県内の肯定的割合が，小学生76.0%，中学生64.9%となっている。

全国平均と比べ，小学生3.3%，中学生5.0%下回っている。特に，「何度もあった」の割合が児童生徒ともに全国平均より下回っている。

4　（学校以外で）包丁やナイフを使って調理をしたこと

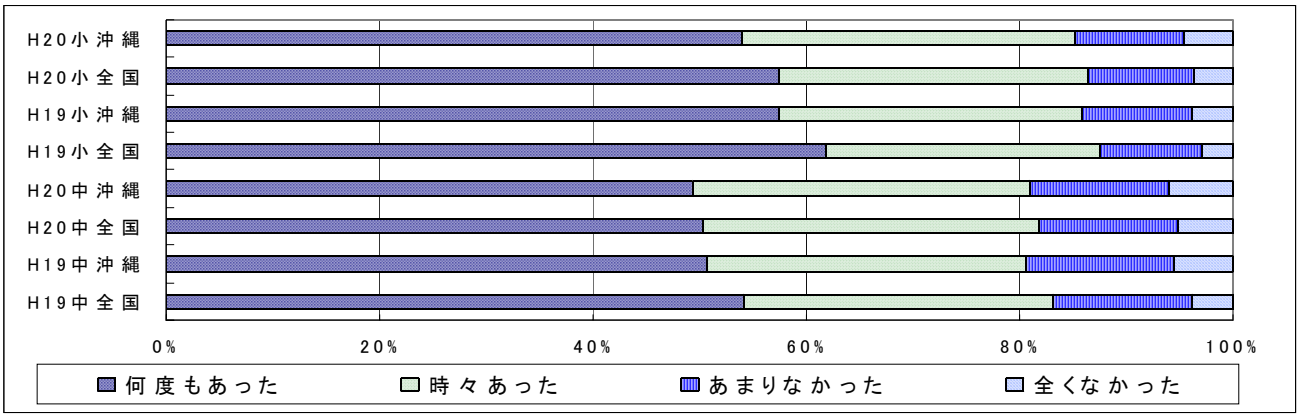

図40 包丁やナイフを使って調理したことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

表41 包丁やナイフを使って調理した割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	何度もあった	時々あった	あまりなかった	全くなかった
H20小沖縄	53.9	31.1	10.3	4.6
H20小全国	57.3	29.0	9.9	3.6
H19小沖縄	57.3	28.5	10.3	3.8
H19小全国	61.9	25.7	9.5	2.9
H20中沖縄	49.2	31.6	12.9	6.1
H20中全国	50.1	31.6	13.0	5.1
H19中沖縄	50.4	29.9	13.8	5.5
H19中全国	54.0	29.0	12.9	3.9

「学校以外で包丁やナイフを使って調理したことがある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生85.8%，中学生80.3%，平成20年は，小学生85.0%，中学生80.8%となっている。小学生は平成19年と20年では大きな変化はないが，中学生は11.1%下回っている。

「当てはまる」について全国平均と比べると，小学生は平成19年・平成20年ともに下回っており，平成20年は3.4%となっている。中学生は平成19年は3.6%下回っているが，平成20年はほぼ同じような割合となっている。

23　家の手伝いをしていますか

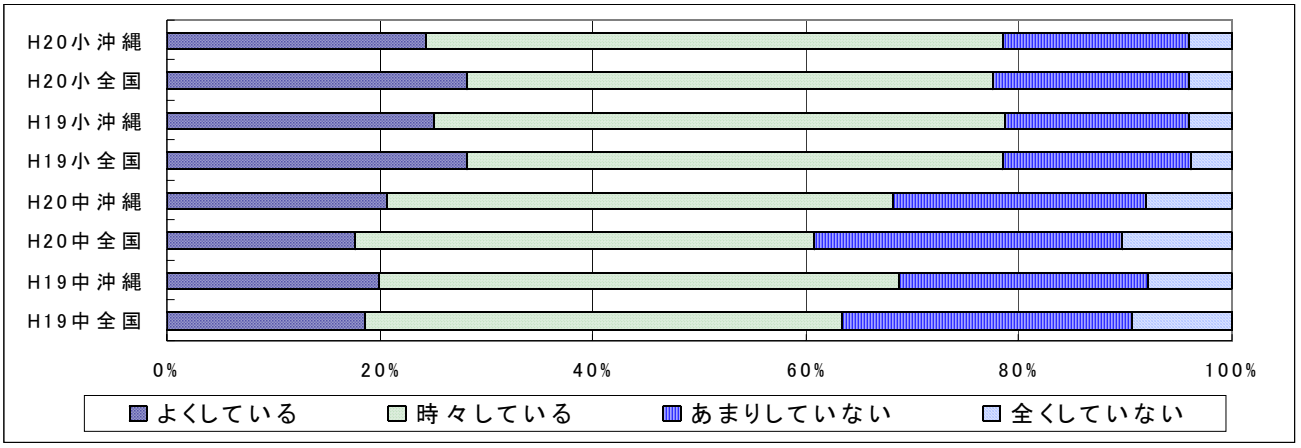

図41 家の手伝いをしている割合（平成20年沖縄と全国）

「家の手伝いをしている」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生78.5%，中学生68.7%，平成20年は，小学生78.4%，中学生67.9%となっている。

小学生は，肯定的割合が平成19年・平成20年ともに全国平均とほぼ同じ割合，同じような傾向を示している。しかし，「よくしている」の割合は全国平均と比べ，平成20年は3.7%下回っている。

中学生は，平成19年・平成20年ともに全国平均より上回っており，平成19年が5.4%，平成20年は7.3%となっている。特に，「時々している」の割合が高くなっている。

表42 家の手伝いをしている割合（平成20年沖縄と全国）

（単位：%）	よくしている	時々している	あまりしていない	全くしていない
H20小沖縄	24.4	54.0	17.6	4.0
H20小全国	28.1	49.4	18.5	4.0
H19小沖縄	25.0	53.5	17.4	4.0
H19小全国	28.1	50.3	17.8	3.8
H20中沖縄	20.5	47.4	23.8	8.0
H20中全国	17.7	42.9	28.8	10.3
H19中沖縄	19.9	48.8	23.2	8.0
H19中全国	18.6	44.7	27.3	9.3

【自然体験や生活体験についての考察】

中教審答申「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（平成14年７月）によると，豊かな人間性や社会性等の育ちが不十分だと言われる大きな要因として，自然体験や社会体験等の直接体験の減少を指摘している。また，事物・事象を感覚的に捉える自然体験等は児童生徒の学びの過程において，感覚的に捉えたものを理屈に置き換え，概念化を図り知性を育てるためにも重要だとしている。

「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」（平成10年文部省）からは，自然体験や生活体験が豊富な児童生徒は，道徳観や正義感が身についている傾向にあること，特に生活体験豊富な子どもは道徳観や正義感が高いことが分かっている。

今回の学力・学習状況調査の本県の結果は，下記のとおりである。

○「海，山，湖，川等で遊んだことがある」小学生は全国平均よりやや上回っており，中学生は平成20年が全国平均よりもやや下回っている。

○「動物を飼育したり花や野菜を栽培したことがある」割合は，児童生徒ともに全国平均よりかなり下回っている。

○「包丁やナイフを使って調理したことがある」や「家の手伝いをしている」小学生の割合は全国平均とほぼ同じであるが，「家の手伝いをしている」中学生の割合は全国平均よりかなり上回っている。

本県児童生徒の自然体験や生活体験についての分析結果から，豊かな体験をさせるために，以下のような取り組みや留意点が考えられる。

○自然体験や社会体験等の直接体験を豊にすることにより，五感を通して事物・事象を豊に捉えたり，体験に基づいて具体を抽象化・概念化できるようにしたり，他を理解したり，社会性を培ったりできる等の体験活動のねらいや意義・効果について，学校は家庭や地域に知らせ，体験活動の充実のための理解を求める。

○各家庭において，責任をもたせた家での仕事や役割を決め，習慣化を図る。

○地域の身近な自然に触れて遊ぶことができるように，安心・安全な環境づくりに務める。

○地域子ども教室推進事業等において，自然体験や生活体験等の視点からの取り組みも行えるように連携を図る。

○地域教育活動や学校教育活動の活性化を役割として設置されているゆいまーる連絡協議会等を活用し地域や関係機関と連携・協力しながら，地域や学校の課題に即した取り組みを工夫する。

○学校における教育活動においても，意図的に体験活動を組み入れ，感覚的に捉えたものを概念化していく活動を重視する。

34　学校のきまりを守っている

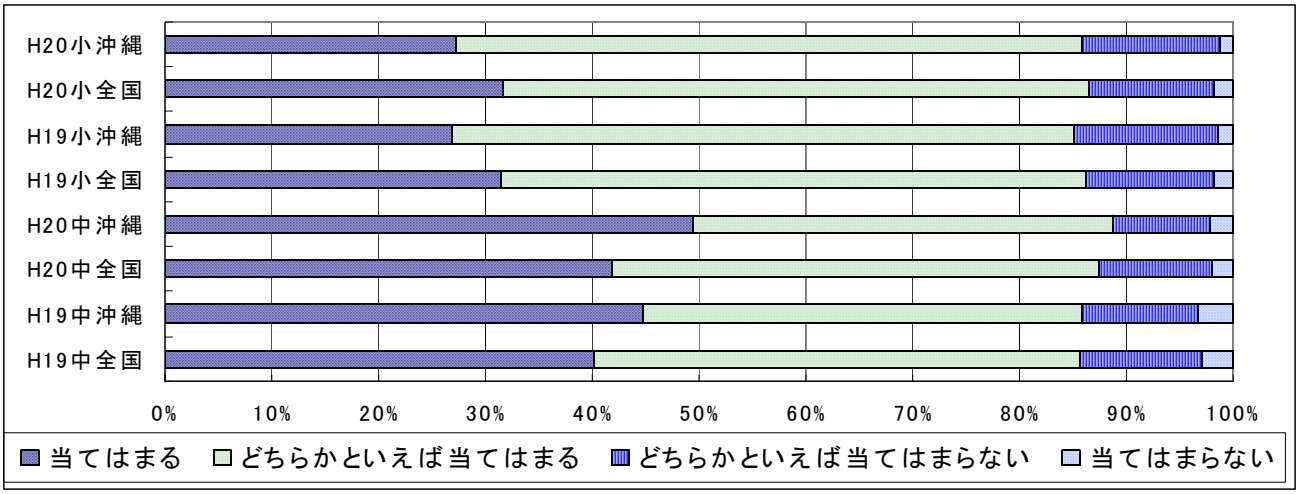

図42 学校のきまりを守っている割合（平成20年 沖縄と全国）

表43 学校のきまりを守っている割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	27.3	58.4	12.9	1.3
H20小全国	31.6	54.7	11.7	1.8
H19小沖縄	26.8	58.2	13.4	1.5
H19小全国	31.5	54.7	11.9	1.9
H20中沖縄	49.3	39.3	9.1	2.1
H20中全国	41.8	45.6	10.5	2.0
H19中沖縄	44.6	41.1	11.0	3.2
H19中全国	40.2	45.5	11.3	3.0

「学校のきまりを守っている」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生85.0%，中学生85.7%，平成20年は，小学生85.7%，中学生88.6%となっている。

「当てはまる」の割合を全国平均（平成20年）と比べると，小学生は 4.3%下回っており，中学生は7.5%上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，学校のきまり・規則を守っている児童生徒の方が学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

35　友達との約束を守っている

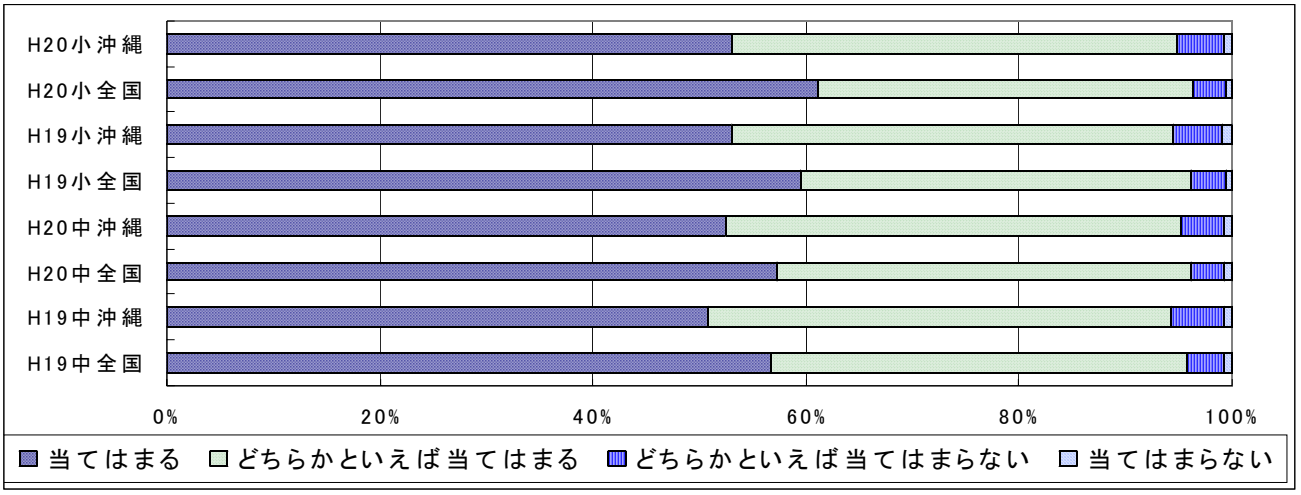

図43 友達との約束を守っている割合（平成20年 沖縄と全国）

表44 友達との約束を守っている割合（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	52.9	41.9	4.3	0.8
H20小全国	61.1	35.3	3.0	0.6
H19小沖縄	53.0	41.4	4.7	0.9
H19小全国	59.5	36.5	3.3	0.6
H20中沖縄	52.4	42.6	4.1	0.7
H20中全国	57.3	38.8	3.1	0.7
H19中沖縄	50.7	43.4	4.9	0.8
H19中全国	56.6	39.0	3.5	0.8

「友達との約束を守っている」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生94.4%，中学生94.1%，平成20年は，小学生94.8%，中学生95.0%となっている否定的割合が小・中学生ともに１割を切っており，友達との関係を大切にしていることがうかがえる。

しかし，「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生で8.2%，中学生で4.9%下回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，小学校では，友達との約束を守っている方が学力調査の国語・算数の正答率が高い傾向にあり，中学校ではその傾向は認められなかった。

29　学校で友達に会うのは楽しい

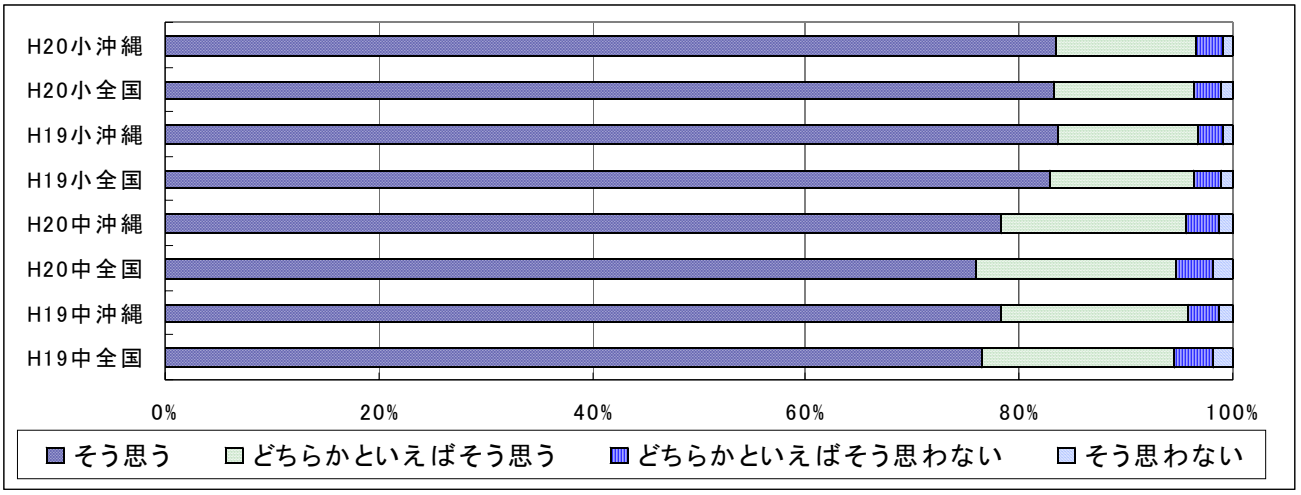

図44 学校で友達に会うのが楽しいとする割合（平成20年 沖縄と全国）

表45　学校で友達と会うのが楽しいとする割合

（単位：%）	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
H20小沖縄	83.3	13.2	2.5	0.9
H20小全国	83.3	13.1	2.5	1.1
H19小沖縄	83.6	13.2	2.3	0.9
H19小全国	82.8	13.5	2.6	1.1
H20中沖縄	78.3	17.3	3.1	1.2
H20中全国	75.9	18.8	3.5	1.8
H19中沖縄	78.3	17.4	3.0	1.2
H19中全国	76.5	18.0	3.5	1.9

「学校で友達と会うのが楽しい」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生96.8%，中学生95.7%，平成20年は，小学生96.5%，中学生95.6%となっており，平成19年・平成20年とで大きな違いはない。

「そう思う」の割合について，小学生は全国平均とほぼ同じ割合，同じような傾向となっている。中学生は，平成19年は1.8%，平成20年は2.4%上回っている。

しかし，「学校で友達と会うのを楽しいとは思わない」（平成20年）とする否定的割合が児童生徒ともに５%いる。

39　いじめは，どんな理由があってもいけないことだと思う

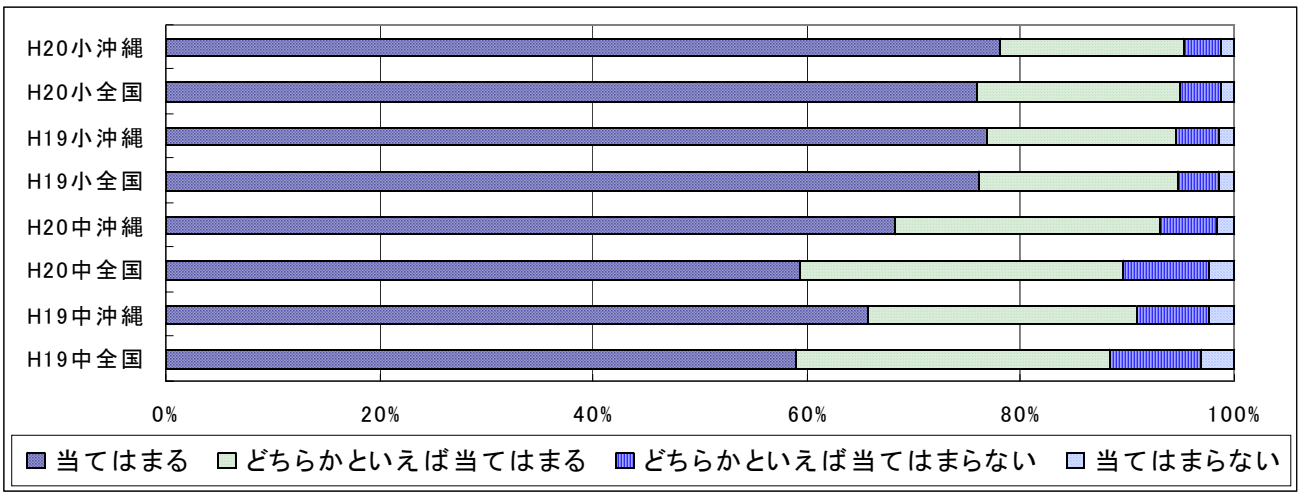

図45 いじめはどんな理由があってもいけないと思う割合（平成20年 沖縄と全国）

表46 いじめはどんな理由があってもいけないと思う割合（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	77.9	17.2	3.4	1.3
H20小全国	75.7	19.0	3.8	1.3
H19小沖縄	76.7	17.8	3.9	1.5
H19小全国	76.1	18.6	3.8	1.4
H20中沖縄	68.1	24.6	5.3	1.7
H20中全国	59.2	30.3	7.9	2.4
H19中沖縄	65.5	25.1	6.7	2.3
H19中全国	58.7	29.2	8.6	3.1

「いじめはどんな理由があってもいけない」と思う県内の肯定的割合が，平成19年は小学生94.5%，中学生90.6%，平成20年は，小学生95.1%，中学生92.7%となっている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は2.2%と若干高く，中学生は8.9%上回っている。

しかし，小学生に比べ中学生は，いじめに対しどんな理由があってもいけないと思う割合が低い傾向にある。

「学習状況調査結果概要」によると，いじめはどんなことがあってもいけないことだと思う小学生の方が学力調査の国語の正答率が高い傾向にあるとしている。

36　人が困っているときは，進んで助けている

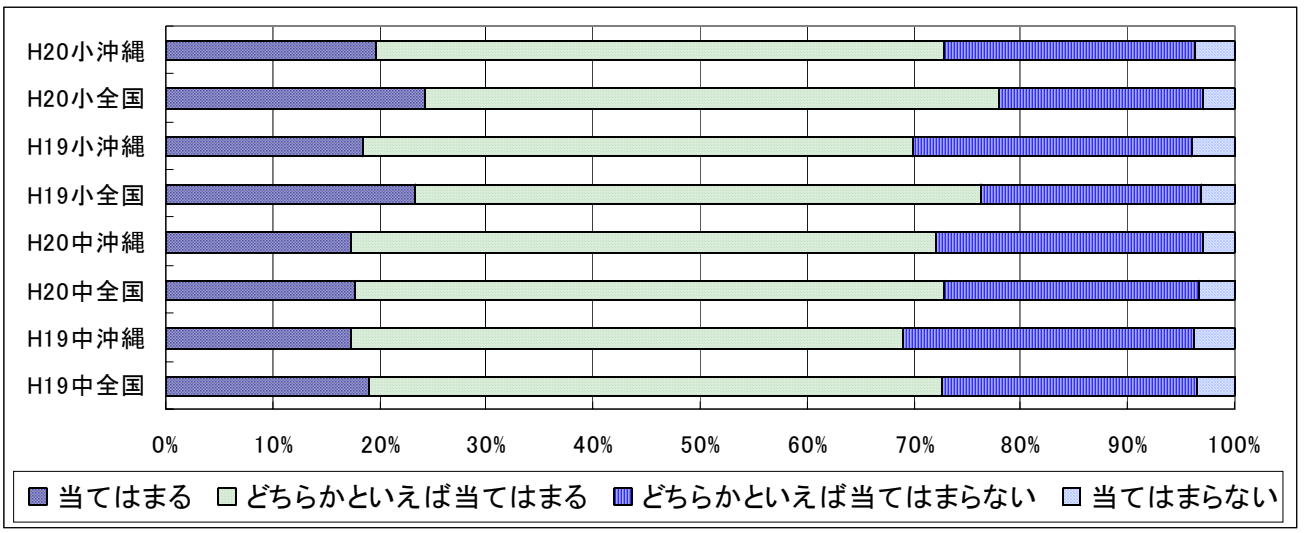

図46 人が困っているとき進んで助ける割合（平成20年 沖縄と全国）

表47 人が困っているとき進んで助ける割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	19.7	53.2	23.5	3.6
H20小全国	24.3	53.4	19.2	2.9
H19小沖縄	18.4	51.5	26.1	4.0
H19小全国	23.3	53.0	20.6	3.1
H20中沖縄	17.4	54.6	24.9	3.0
H20中全国	17.7	55.0	24.0	3.2
H19中沖縄	17.2	51.6	27.1	3.8
H19中全国	18.9	53.5	23.9	3.5

「人が困っているとき進んで助ける」についての県内の肯定的割合が，平成19年は小学生69.9%，中学生68.8%，平成20年は，小学生72.9%，中学生72.0%となっており，児童生徒ともに平成19年よりやや高い。

図46からわかるように「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生が4.8%下回り，中学生はほとんど差は見られない。

否定的回答をしている児童生徒が約３割いるという結果となっている。

43 （小学生になってから，学校以外で）体の不自由な人やお年寄りや，困っている人の手助けをしたこと（中学生：小学校の頃，または，中学生になってから，学校以外で）

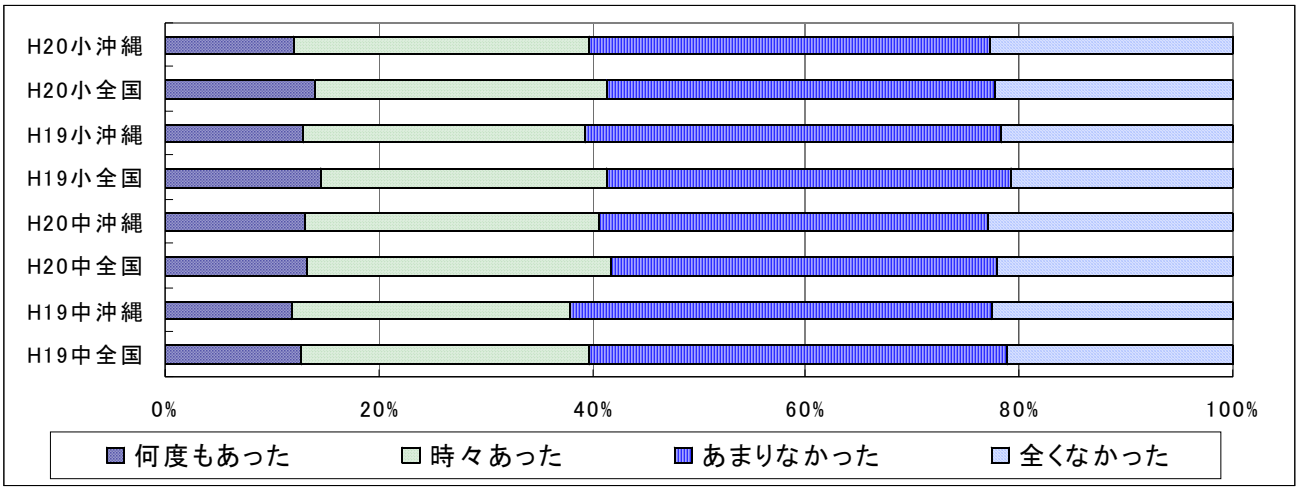

図47 体の不自由な人やお年寄り，困っている人を手助けしたことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

表48 体の不自由な人やお年寄り，困っている人を手助けしたことがある割合（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	何度もあった	時々あった	あまりなかった	全くなかった
H20小沖縄	12.1	27.5	37.6	22.7
H20小全国	14.1	27.2	36.4	22.2
H19小沖縄	12.9	26.4	39.0	21.6
H19小全国	14.5	26.7	37.9	20.7
H20中沖縄	13.0	27.6	36.3	22.9
H20中全国	13.2	28.5	36.2	22.0
H19中沖縄	11.8	25.9	39.5	22.5
H19中全国	12.8	26.8	39.2	21.0

「体の不自由な人やお年寄り，困っている人を手助けしたことがある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生39.3%，中学生37.7%，平成20年は，小学生39.6%，中学生40.6%となっている。児童生徒ともに，平成19年・平成20年に殆ど差は見られず，また，全国平均ともほぼ同じ傾向を示している。

「体の不自由な人やお年寄り，困っている人を手助けしたことがある」児童生徒が４割となっており，設問36「人が困っているときは進んで助けている」の約７割と比べると，かなり低いと言える。

この項目の肯定的回答の割合が低くなった理由としては，手助けをした対象を具体的に示したことと，その対象とのかかわりが少ないこと等が考えられる。

38　人の気持ちが分かる人間になりたいと思う

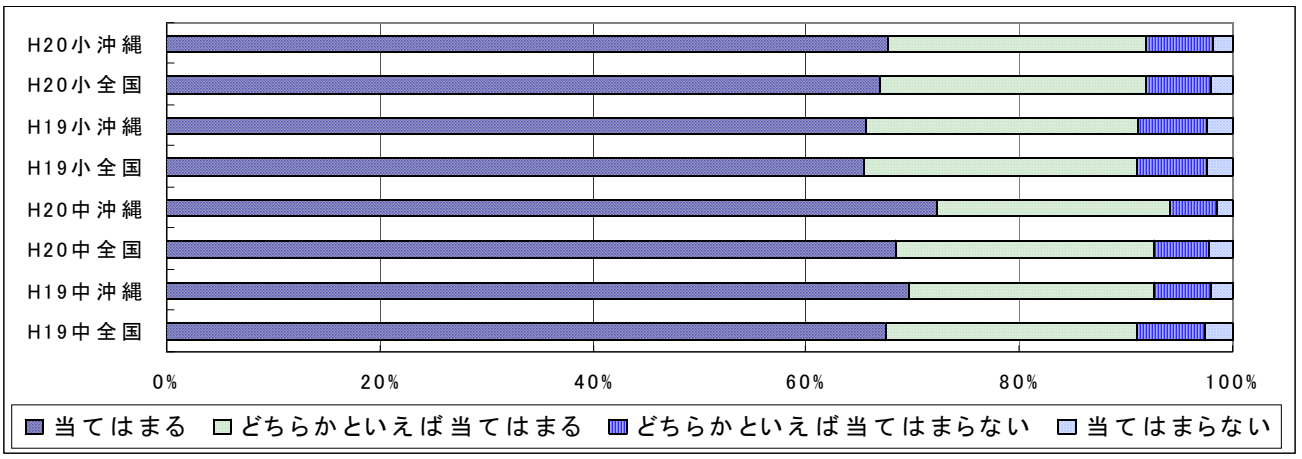

図48　人の気持ちが分かる人間になりたいと思う割合（平成20年 沖縄と全国）

表49 人の気持ちが分かる人間になりたいと思う割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	67.5	24.3	6.2	1.8
H20小全国	66.9	25.0	5.9	2.1
H19小沖縄	65.7	25.4	6.6	2.3
H19小全国	65.4	25.6	6.6	2.4
H20中沖縄	72.1	21.8	4.4	1.4
H20中全国	68.3	24.2	5.1	2.2
H19中沖縄	69.6	22.8	5.4	2.0
H19中全国	68.0	23.8	6.5	2.6

「人の気持ちが分かる人間になりたい」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生91.1%，中学生92.4%，平成20年は，小学生91.8%，中学生93.9%となっており，約９割の児童生徒が人の気持ちが分かる人間になりたいと考えている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は殆ど差が見られず，中学生は3.8%上回っている。

中学生の方が小学生より，人の気持ちが分かる人間になりたいと思う割合は上回っている。

「学習状況調査結果概要」によると，人の気持ちが分かる人間になりたいと思う児童生徒の方が学力調査の国語・算数，国語・数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

【規範意識や思いやり等に関する考察】

「小学校学習指導要領解説道徳編」（平成20年8月文部科学省）において小・中学校「いずれの段階においても共通する重点として子どもの自立心や自律性，生命を尊重する心の育成」，「学校・学年段階ごとに取り組むべき重点として規範意識，人間関係を築く力，社会参画への意欲や態度」等があげられている。このことからも，規範意識の醸成や人間関係形成力の育成は重要と言える。

今回の全国学力・学習状況調査で明らかになったことは，下記のとおりである。

○「学校のきまり・規則を守っている」とする児童生徒の方が，学力調査（国語・算数／数学）の正答率が高い。

○「友達との約束を守っている」児童の方が，学力調査（国語・算数）の正答率が高い。

○「いじめはどんな理由があってもいけない」と思う児童の方が，学力調査の国語の正答率が高い。

○「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」児童生徒の方が，学力調査（国語・算数／数学）の正答率が高い。

きまり・規則を守ろうとする規範意識や他者を尊重しようとする考え方は，まじめであり前向きと言える。このようなまじめさや前向きさが学力とも繋がっていると考えられる。

本県の結果は，下記のとおりである。

○「学校のきまり・規則を守っている」「学校で友達に会うのは楽しい」「いじめはどんな理由があ

ってもいけない」「人の気持ちが分かる人間になりたい」等の肯定的割合について，小学生は全国平均とほとんど変わらないが，中学生はやや上回っている。特に，中学生は「いじめはどんな理由があってもいけない」と考えている割合が全国平均よりもかなり上回っている。

○「友達との約束を守っている」については，約束を守ることの大切さを十分確認しながらも，この時期が友達との関係を優先させる発達段階であることを踏まえ，約束の内容がモラルや規律等に反していないかどうかの判断に基づいて約束を遂行できる力をつける必要がある。

○「人が困っているときは進んで助けている」児童生徒は約７割いるものの，全国平均より下回っており，特に小学生がかなり下回っている。

○「体の不自由な人やお年寄り，困っている人の手助けをしたことがある」の割合は，全国平均とほぼ同じ傾向を示しているが，肯定的割合が約４割と少ない。

○困っている人や体の不自由な人，お年寄りを助けているか，または手助けしたことがあるか等の行動化については弱さがあるといえる。

本県児童生徒の規範意識や親切等についての分析結果から，規範を遵守する態度や親切な行動がとれる等の道徳性や他者とよりよいコミュニケーションを図れるようにするために，以下のような取り組みや留意点が考えられる。

○自己肯定感等と規範意識のかかわりで，自己肯定感や自己有用感が低い子どもは規範に対する意識も弱いことが調査研究から報告されており，規範意識を高めるためには自己肯定感や自己有用感を併せて高めていく必要がある。

○社会規範を守ることやいじめをしない，困っている人を助けることができる根底には，他者への思いやりの心や正義感等がある。他者への思いやりの心や正義感を育むためには，よりよい人間関係の構築を図っていく必要がある。そのため，家族から愛されていることや必要とされていることを感じたり，家族以外の他者（社会）から良さを認められたり，他者からの思いやりや親切に感謝を感じたり，他者とともに活動することや協力し合うことの喜びや達成感を感じる経験を豊かにすることが大切だと思われる。

○「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」（平成10年文部省）からは，自然体験や生活体験が豊富な児童生徒は，道徳観や正義感が身に付いている傾向にあること，特に生活体験豊富な子どもは道徳観や正義感が高いことが分かっている。「自然体験・生活体験」と道徳観や正義感との相関から，あわせてアプローチすることがより効果的だと思われる。

【地域社会とのかかわり】

31　新聞やテレビのニュースなどに関心がある

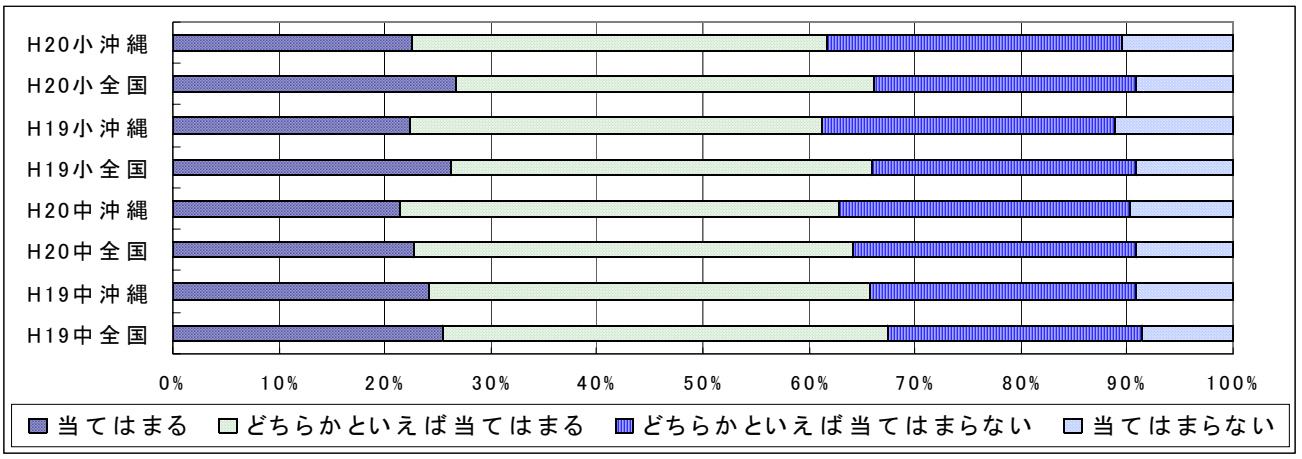

図49 新聞やテレビのニュースなどに関心がある割合（平成20年 沖縄と全国）

表50 ニュースなどに関心がある割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	22.5	39.2	27.7	10.5
H20小全国	26.7	39.4	24.6	9.2
H19小沖縄	22.3	38.9	27.6	11.1
H19小全国	26.2	39.8	24.9	9.2
H20中沖縄	21.4	41.3	27.5	9.6
H20中全国	22.6	41.5	26.6	9.2
H19中沖縄	24.1	41.6	25.2	9.1
H19中全国	25.4	41.9	24.0	8.6

「新聞やテレビのニュースなどに関心がある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生61.2%，中学生65.7%，平成20年は，小学生61.7%，中学生62.7%となっている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は4.2%，中学生は1.2%下回っている。中学生はほぼ全国平均並みだと言えるが，小学生はニュース等への関心に弱さが感じられる。

「学習状況調査結果概要」によると，新聞やテレビのニュースに関心がある児童生徒の方が学力調査の国語・算数，国語・数学の正答率が高い傾向にあるとしている。

32 今住んでいる地域の歴史や自然について関心がある

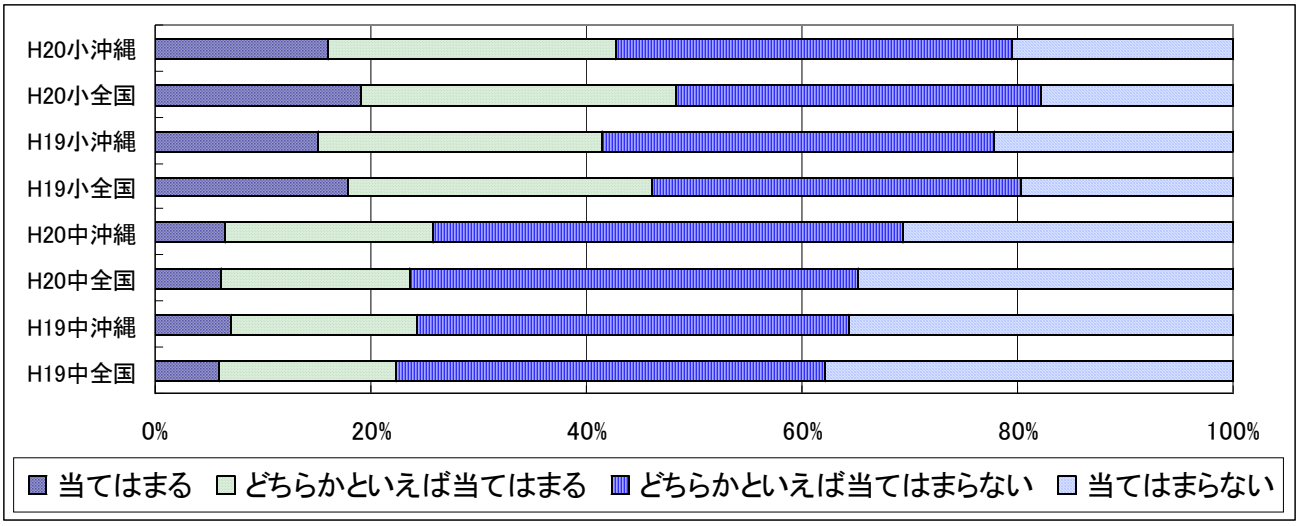

図50 今住んでいる地域の歴史や自然に関心がある割合（平成20年 沖縄と全国）

表51 今住んでいる地域の歴史と自然に関心がある割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	16.0	26.7	36.6	20.6
H20小全国	19.1	29.1	33.9	17.8
H19小沖縄	15.1	26.3	36.5	22.1
H19小全国	17.8	28.2	34.3	19.6
H20中沖縄	6.5	19.2	43.6	30.5
H20中全国	6.1	17.4	41.6	34.8
H19中沖縄	7.0	17.2	39.9	35.6
H19中全国	5.9	16.4	39.6	37.8

「今住んでいる地域の歴史と自然に関心がある」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生41.4%，中学生24.2%，平成20年は，小学生42.7%，中学生25.7%となっており，児童生徒ともに低い割合となっている。

「当てはまる」について全国平均（平成20年）と比べると，小学生は3.1%下回っており，中学生は全国平均とほぼ同等の結果となっている。

小学生では「どちらかといえば当てはまらない」，中学生は「当てはまらない」の割合が比較的高くなっている。小学生に対し中学生の方が地域の歴史や自然についての関心が低い結果となっている。

33　今住んでいる地域の行事に参加している

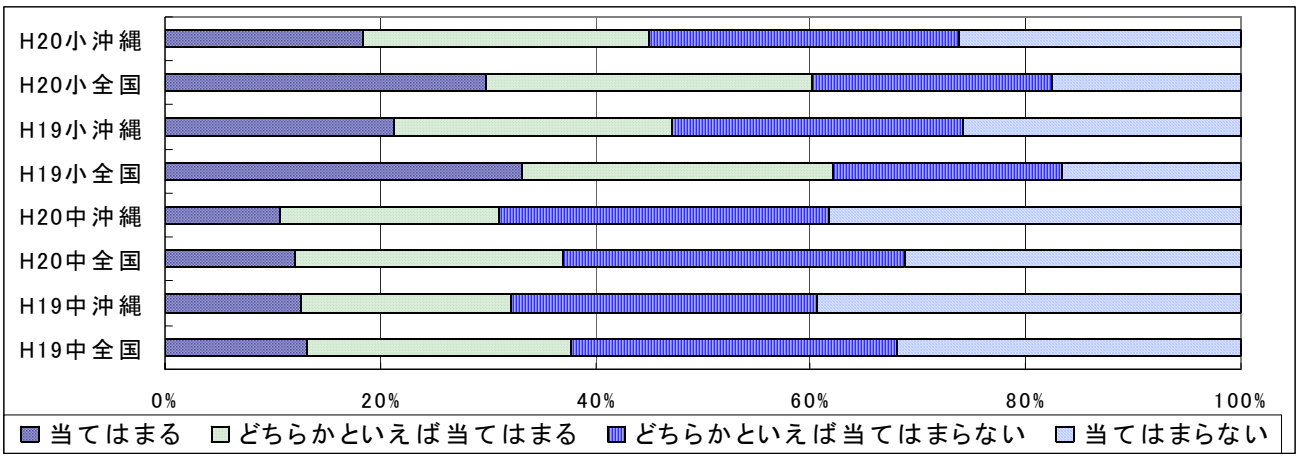

図51 今住んでいる地域の行事に参加している割合（平成20年 沖縄と全国）

表52 今住んでいる地域の行事に参加している割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：%）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	18.5	26.4	29.0	26.1
H20小全国	29.7	30.2	22.5	17.4
H19小沖縄	21.3	25.6	27.0	25.8
H19小全国	33.2	28.8	21.2	16.6
H20中沖縄	10.7	20.2	30.7	38.1
H20中全国	12.0	25.0	31.6	31.2
H19中沖縄	12.5	19.4	28.5	39.1
H19中全国	13.2	24.3	30.3	31.7

「今住んでいる地域の行事に参加している」とする県内の肯定的割合が，平成19年は小学生46.9%，中学生31.9%，平成20年は，小学生44.9%，中学生30.9%となっており，児童生徒ともに低い割合となっている。

肯定的割合を全国平均（平成20年）と比べても小学生で15%，中学生で約６%下回っている。

中学生においては，平成19年・平成20年ともに「当てはらない」の割合が最も高くなっている。

37　近所の人にあったときは，あいさつをしている

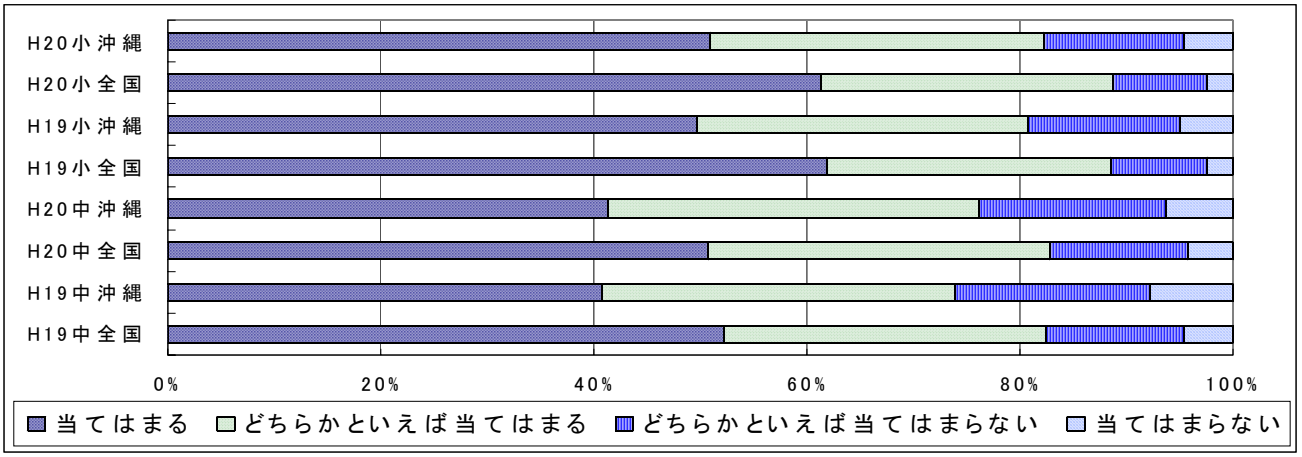

図52 近所の人に会ったときあいさつする割合（平成20年 沖縄と全国）

「近所の人にあったときあいさつをする」県内の肯定的割合が，平成19年は小学生80.7%，中学生73.7%，平成20年は，小学生82.2%，中学生76.0%となっている。「当てはまる」の割合を全国平均（平成20年）と比べると，小学校で10.4%，中学生で約9.4%とかなり下回っている。

近所の人に対し，基本的なあいさつが十分でないということは，近所や地域とのかかわり，並びに礼儀に関しての弱さも考えられる。

表53 近所の人に会ったときあいさつする割合
（平成20年 沖縄と全国）

（単位：％）	当てはまる	どちらかといえば当てはまる	どちらかといえば当てはまらない	当てはまらない
H20小沖縄	50.8	31.4	13.1	4.6
H20小全国	61.2	27.5	8.8	2.4
H19小沖縄	49.6	31.1	14.3	5.0
H19小全国	61.9	26.7	8.9	2.5
H20中沖縄	41.3	34.7	17.6	6.2
H20中全国	50.7	32.0	12.9	4.3
H19中沖縄	40.6	33.1	18.4	7.7
H19中全国	52.2	30.2	12.8	4.7

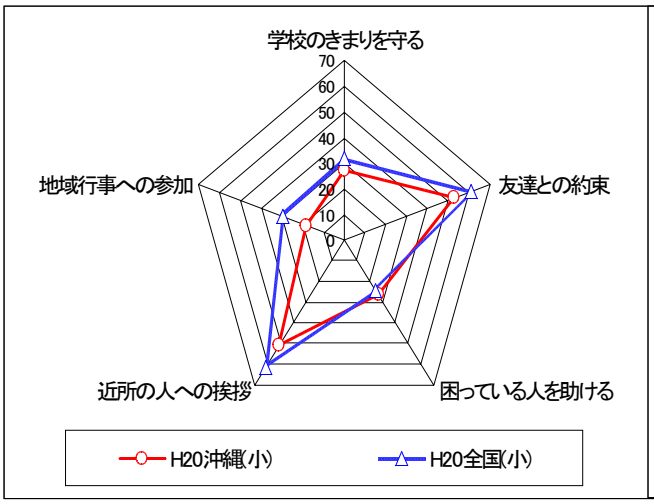

図 53 学校の決まり・友達との約束・困っている人を助けている・近所の人への挨拶・地域行事への参加についての「当てはまる」の比較（平成20年 小学生）

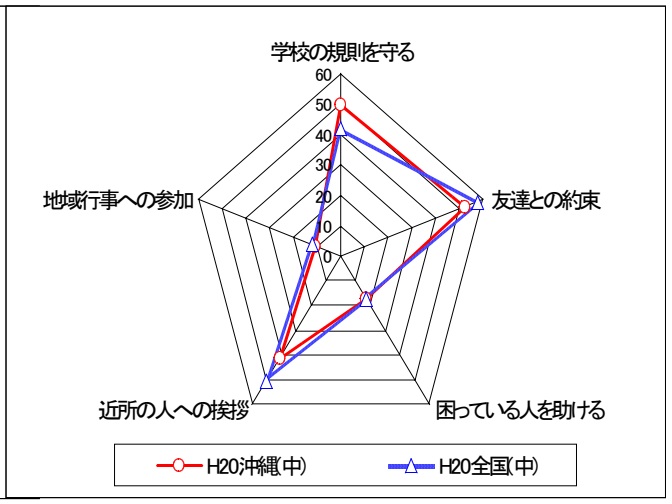

図 54 学校の規則・友達との約束・困っている人を助けている・近所の人への挨拶・地域行事への参加についての「当てはまる」の比較（平成20年 中学生）

図53は小学生の平成20年の本県と全国平均の比較，図54は同じ項目の中学生のグラフである。

「34 学校の決まりを守っている」「35 友達との約束を守っている」「36 困っている人がいるときは進んで助けている」「33 今住んでいる地域の行事に参加している」「37 近所の人に会ったときはあいさつをしている」の５項目における「当てはまる」をレーダーチャートに表した。この５項目は，全国平均と比べ差があるものや「当てはまる」の割合が低い項目である。

小学生は，特に，「学校の決まりを守っている」「困っている人がいるときは進んで助けている」割合や「今住んでいる地域の行事に参加している」「近所の人に会ったときは挨拶をしている」が全国平均と比べかなり下回っている。

中学生は，「今住んでいる地域の行事に参加している」がかなり低く，他には「困っている人がいるときは進で助けている」や「近所の人に会ったときは挨拶をしている」が全国平均を下回っている。

【地域社会とのかかわりに関する考察】

「児童生徒の社会性の成長・発達に関する調査研究」（平成20年３月鳥取県教育センター）において，「地域に子どもの行事が多いと（地域行事の多い子どもは），子どものソーシャルスキルが育ち，学校生活への適応もよい。また，地域と家庭の関係がよいと子どものソーシャルスキルが育ち，ソーシャルスキルが良好な子どもは友人関係が良好である。」ことを報告している。

社会性の育成や社会参画の意欲や態度が強調されている中，学校・家庭・地域が連携・協力していくことがより一層望まれる。

今回の全国学力・学習状況調査で明らかになったことは，下記のとおりである。

○「新聞やテレビのニュースに関心がある」児童生徒の方が，学力調査の国語・算数／数学の正答率が高い。

本県の結果は，下記のとおりである。

○「新聞やテレビのニュースなどに関心がある」「今住んでいる地域の行事に参加している」「近所の人にあったときあいさつをしている」の割合が小中学生ともに全国平均より下回っているおり，特に，「地域の行事に参加している」についての小学生の割合や，「近所の人へのあいさつ」については小中学生ともにかなり下回っている。

○「今住んでいる地域の歴史や自然について関心がある」について，中学生は全国平均とほぼ同じ割合であるが，小学生はやや下回っている。

○ニュースや地域の歴史・自然への関心の低さ，地域行事の参加率の悪さ，近所の人へのあいさつの不十分さから，地域や社会に対する関心の低さやかかわり方の弱さが感じられる。

本県児童生徒の地域社会等とのかかわりに関する分析結果から，以下のような取り組みや留意点が考えられる。

○各家庭においては，大人が近所とのつきあいやあいさつ等に礼をつくしたり，地域行事へ積極的に参加したりする等，日頃からのかかわりを大切にすることが望まれる。また，意識的に，人・物・ことと積極的にかかわらせ好奇心を育むようにすることも大切だと思われる。

○地域は，地域の子どもは地域で育てる意識を高め，より多くの家庭を巻き込んだ取り組みを企画したり，既存の行事について，地域の子どもを生かす内容や運営，学校との連携等の工夫等について見直すことが考えられる。

○学校は，各家庭と地域を結んだり，地域行事をサポートする等が考えられる。また，児童生徒が地域や社会に目を向け，関心を持ち主体的にかかわれるように，日常の学校生活や学習活動の中で働きかけることが望まれる。例えば，社会科の地域学習や総合的な学習の時間において，地域の人々や文化・歴史・自然に触れ親しむ活動を取り入れよさを感じるように工夫したり，新聞から関心のあるニュースを朝の1分間スピーチで報告し合う等，活動を工夫するとともに計画的・継続的に活動をしくみ，児童生徒の力をつけていきたい。

Ⅴ　本県の児童生徒に身につけさせたい力と教育活動支援

１　幼児教育

(1) 全国学力・学習状況調査（平成20年）における本県の結果を踏まえて

全国学力・学習状況調査（平成20年）の本県結果から，自分に対する自信をつけることや夢や希望をもち現在の生活を工夫改善できる力を身につけること，より良い人間関係の構築，そして，道徳的心情や判断力を高め道徳的実践意欲や態度を身につけさせることが求められている。これらの力を身につけるに当たり，その基盤となるのが基本的な生活習慣の確立だと思われる。特に，幼児期においてはより重要だと言える。

幼児が，健康・安全で，豊かな生活をしていくためには，健全な心身の基礎を培うことが大切である。基本的生活習慣がよく身につくことによって，身体の健康を守ることができ，その健全な成長発達を促すことができる。

また，生活のルール，あいさつ，あとかたづけ，ものを大切にする等の社会的生活習慣の自立は，社会適応のためにも必要なことである。更に，幼児期は，自分の行動について客観的に考えることや，善悪の判断ができにくい時期であることから，周りの大人が適切な働き掛けを行うことが必要である。

幼稚園では，教師がモデルになり，個々の幼児の発達に応じた適切な援助を行い，家庭と連携して，基本的な生活習慣や態度を身につけさせることが必要である。また，道徳的な判断力や善悪に対する感情の基盤となる道徳心の芽生えが培われるよう,繰り返し丁寧に指導することが望まれる。

(2) 幼児教育の現状と課題

近年，子どもの育ちが変化して，基本的な生活習慣の欠如，食生活の乱れ，自制心や規範意識の希薄化，運動能力の低下，コミュニケーション能力の不足等の課題が指摘されている。

幼児期は身体的な成長や運動的な機能が著しく向上していく時期である。しかし，生活形態や環境の変化等の現状から，幼児にとっての身体的な活動の場が不足している。また，遊びを通して人・物・ことと関わることで豊かな感性を育む大切な時期であるにもかかわらず，自然体験や生活体験等が不足している現状も見受けられる。

更に，深夜まで起きていることも要因となり，朝食をとらない幼児が増えつつあることや偏食等の食生活についても課題が多く，基本的生活習慣が十分に身に付いていないことによる体力の低下や心身に及ぼす影響が懸念される現状と言える。

(3) 幼児教育の推進に向けて

幼稚園においては，幼稚園教育の基本である環境を通して行うことを踏まえて，遊びを中心とした生活を通して，人間関係や環境とのかかわり方などを学び，運動能力を養い，様々な発達に必要な体験を重ねている。教師は，それを引き出す環境を構成し，幼児一人一人の発達の特性や行動の仕方及び考え方を理解するとともに発達の課題や適時性に応じた適切な指導を行うことが大切である。

そこで，教育活動支援として下記のような研修内容の工夫が必要である。

ア．幼児期の発達の特性を踏まえた指導の充実に向けて
- ○幼児期の発達の特性について理解
- ○幼児一人一人に応じた援助の工夫
- ○幼児の発達を捉え，個と集団との関係を考慮した指導計画の工夫

イ．健全な心身の基礎を身につけるために
- ○入園前の家庭環境を理解する
- ○基本的な生活習慣を確立する援助の工夫
- ○幼稚園生活の中で，健康・安全教育の意識を高める取り組み
- ○基本的な生活習慣の形成にあたっては，具体的なねらい・内容，指導方法について
- ○親理解，家庭理解を図る
- ○教師間，家庭，小学校等との連携と共通理解を図る

ウ．道徳性の芽生えを培うために
- ○幼児期にふさわしい道徳性の芽生えを培うための基本的な考え方について

○道徳性の芽生えを培うための指導と指導計画の工夫
○道徳性の芽生えと教師の役割について

２　健康教育

(1) 全国学力・学習状況調査(平成20年)における本県の結果

○朝食摂取の割合は，ほとんど毎日朝食を摂っている（「している」「どちらかと言うとしている」：以下肯定回答とする）の割合が，平成20年は小学校94.2％，中学校91.2％となっている。平成20年は小・中学校ともに朝食を摂っている児童生徒が９割を超えている。全国平均と比較すると，ほとんど毎日朝食を摂っている割合が小学校1.2％，中学校0.7％低くなっている。

○毎日同じくらいの時刻に就寝している（肯定的回答）割合は，平成20年においては，小学生68.5%，中学生72.7%となっている。全国平均と比較すると，毎日同じくらいの時刻に就寝している割合は，本県は全国より，小学生は低く，中学生が高くなっている。

○「普段何時頃に就寝するか」の割合は，平成20年度は，小学生（10時以降の就寝割合）69.6%，中学生（１１時以降の就寝割合）60.5%となっている。全国平均と比較すると，小学生の10時以降に就寝する割合は本県が多く，中学生の11時以降の就寝は全国が多い。

○毎日同じくらいの時刻に就寝している（肯定的回答）割合が，平成20年は小学校86.9％，中学校92.7％となっている。全国平均と比較すると，小学校で2.3％低く，中学校で2.1％高くなっている。

○普段何時ごろに起床するかの割合は，平成20年では，午前６時30分以降に起床している児童生徒は，小学校71.3％，中学校71.4％となっている。全国平均と比較すると，小学校での午前6時30分以降の起床は，本県が，6.9％，中学では4.1％高くなっている。

○本県における，普段の睡眠時間の割合は，「普段の睡眠時間が７時間以下」の児童生徒は，平成20年度は小学校9.1％，中学校29.2％となっている。 全国平均と比較すると，７時間以下の睡眠時間の割合は，小学校では0.3％高く，中学では10.1％低くなっている。つまり全国と比較して，本県の小学生は，睡眠時間が短くなっており，中学生は，睡眠時間が長くなっていることがうかがえる。

(2) 本県の健康教育の現状と課題

本県においては，「長寿県沖縄」説が崩れ，多々の健康課題に直面している。 県内では，生活習慣病が増加し，成人男性の肥満が大きな課題となっている。それは，もはや大人だけの健康課題ではない。肥満傾向の児童の割合が，全国平均より高く，小児生活習慣病検診（那覇市教育委員会主催：小４年対象）の結果から，血圧や中性脂肪が高いなど，小児生活習慣病の兆候を呈する子どももみられる。このような現状をふまえ，今後増加の一途をたどるであろう生活習慣病への対応は，児童生徒における生活習慣の改善を推進することが不可欠である。

自分自身の健康を生涯にわたって保持増進していく”生きる力”を育むためにも，基本的生活習慣の定着に向けた学校における健康教育が求められる。

現在，本県では，夜型社会が継続し，そこから，睡眠不足，朝食欠食等，肥満傾向等の悪循環のサイクルが回り始めている。基本的生活習慣が定着する小学生までに，生活の中で実践していける生活リズムの定着をめざした健康教育を実施し，本県における健康課題を解決していくことが大切である。

(3) 健康教育の推進に向けて

人間は，心身の健康があってこそ，将来の夢への実現に向かって進むことができる。その基礎・基本となるものが規則正しい生活習慣である。

基本的生活習慣の定着にむけて，健康教育の推進を行うためには，まず，健康な生活に関する科学的な知識の理解が不可欠である。その後規則正しい生活への動機づけや，それを実行するために何をすればよいのかという目標を自分自身で立て，それを実践し評価する。これらの繰り返し行うことで基本的生活習慣の定着化につながるのではないかと考える。

また，規則正しい生活習慣を日常に定着化させるためには，家庭の協力が不可欠である。学校・家庭で共通理解を深め，保護者の規則正しい生活に関する意識・支援が，子どもたちの将来の健康への大きな鍵を握っていると考える。

実践を継続させていくために大切なことは，ソーシャルサポートの概念である。ＷＨＯによると，ソーシャルサポートとは，「同じコミュニティーにいる個人やグループ同士で行われるもので，日常や生活状況に応じて生じる不利な問題を緩和し，生活の質の向上を支援する前向きな資源を生み出す。」とされている。学校・家庭において，ソーシャルサポート体制を取り入れ，精神的にもサポートすることで，生活習慣を望ましい方向へ変容が期待できると考える。

これらを鑑みると，生活習慣を改善するための健康教育の要因として，次のことがあげられる。

〇健康に対する科学的な知識の獲得
〇動機づけや目標の設定
〇家族の支援
〇ソーシャルサポート体制（家族，仲間，相談機関，教育機関などのソーシャルサポート）
〇評価（効果が見えるようになっていること）

これらを取り入ることにより，効果的な健康教育の推進が期待できると考える。

健康教育の最終目的は，実践能力，行動能力の育成である。知識を学び，その後，自らの実践として，確実に定着ていくためには，変容させたいと思っていること自身に興味がもてて，そこに至る過程においても，楽しみや喜びが見出させる状況が不可欠である。今後そのような基本的生活習慣を育む健康教育を推進していく必要がある。

３　道徳教育

(1) 全国学力・学習状況調査（平成20年）における本県の結果

〇「学校のきまり・規則を守っている（小学生約85％，中学生約90％）」「いじめはどんな理由があってもいけない（小学生約95％，中学生約90％）」「人の気持ちが分かる人間になりたい（児童生徒共に約90％）」の割合は，小学生は全国平均とほとんど変わらないが，中学生はやや上回っている。特に「いじめはどんな理由があってもいけない」とする割合は，全国平均よりも約９％上回っている。

〇「人が困っているときは進んで助けている」児童生徒は約70％いるものの，全国平均より下回っており，特に小学校で約５％下回っている。

〇「体の不自由な人やお年寄り，困っている人の手助けをしたことがある」の割合は，全国平均とほぼ同じであるが，肯定的割合が約40％と低い。

本県において「学校のきまりを守っている」「いじめはどんな理由があってもいけない」とする児童生徒が約90％いることは好ましいことだと言える。しかし，困っている人や体の不自由な人，お年寄りを助けているか，または手助けしたことがあるか等，学校以外で実践することについては弱さがあると言える。そのため，道徳的心情や判断力を高め，道徳的実践意欲や態度を身につけさせることが求められる。これらの道徳性の育成においては，道徳的習慣を始め道徳的行為の指導も重要であるとされている。道徳的習慣は，習慣として身につけた望ましい日常行動の在り方であり，その最も基本となるものが基本的な生活習慣と呼ばれている。

(2) 本県の道徳教育の現状と課題

道徳教育において，小・中学校共通の全国的な課題として下記のことが挙げられている。

①規範意識や生命尊重の心を育む挙育
②道徳的価値の自覚を深め，道徳的実践力を高める効果的な指導
③道徳の授業公開と家庭・地域との連携
④指導体制の確立，指導計画の実働化
⑤豊かな体験活動や実践活動を生かした指導
⑥「心のノート」を生かした展開

小学校における課題は，低学年は「基本的な瀬活習慣」「善悪の判断」等，高学年は「人間関係や社会との関わり」「夢や希望をもって生きること」である。中学校は，「道徳の時間の安易な変更

をしない」「協力的指導体制の確立」「法や社会とのかかわり，規範意識を高める」等である。

本県においても課題と言える。各教育事務所における道徳教育の実施状況等の調査（平成19年）から，次のようなことが分かった。授業の工夫で，小・中学校ともに高いのは「心に響く資料の選定」，小学校において次に顕著なのは「映像や音響，写真等の提示方法の工夫」「エンカウンターやモラルスキルトレーニング等の導入」，中学校において顕著なのは「資料を自作し実施」である。より良い授業づくりをめざして工夫しようとしていることがうかがえる。しかし，構成的エンカウンターやソーシャルスキルトレーニングを取り入れることで，学級会活動なのか道徳なのか曖昧な授業が増えてきていること，資料の読み取りに終始し国語のような授業になっていること等が課題となっている。

また，本総合教育センター短期研修「小中道徳教育講座」受講者アンケートから，「道徳と特活の違いや道徳の価値項目に当てはめた道徳実践の仕方」「子どもに揺さぶりをかける授業」「興味・関心を引く資料や心に響く資料の選び方やよい資料が欲しい。」「いろいろな指導法を学びたい」「エンカウンターやソーシャルスキルの活用」「心のノートの活用の仕方や導入・終末の効果的な方法」等について知りたいとの結果が得られた。

道徳の時間と学級活動の違い等の基本的なとことから，道徳の副読本や「心のノート」等の活用を推進した授業力や授業の質を高めるための授業技術の向上を図る研修が求められていると言える。

(3) 道徳教育推進に向けて

道徳性を構成する諸様相として，道徳的心情，道徳的判断力，道徳的実践意欲と態度等があるが，これらは相互に深く関連しながら全体を構成しているので，諸様相が全体として密接な関連をもつように指導することが大切である。また，道徳的習慣や道徳的行為の指導も重要である。

頭では正しいことや望ましいことが分かっているが，それを実践にうつすことができない，または，うつす必要を感じていない児童生徒に対し，道徳性を高めるための道徳教育の推進がなお一層求められる。そのために，まず，道徳の授業を要に児童生徒の心の響く授業の推進が重要だと思われる。

そこで，教育活動支援として下記のような視点が考えられ，研修内容並びに学校支援を工夫する必要があると考える。

① これまでの調査研究成果を生かし関連づけて
- ○自然体験・生活体験と道徳性の相関を踏まえ，自然体験や生活体験を豊かにする工夫
- ○自己肯定観や自己有用感を高めながら規範意識の醸成を図る工夫

② 道徳教育の要となる「道徳の時間」の授業の工夫と指導技術の向上
- ○児童生徒の実態を踏まえ生かした授業づくり
- ○発達段階を踏まえた発展的な取り扱いの工夫
- ○内容項目間の関連的な取り扱いとその順序の工夫
- ○体験活動の道徳の時間への生かし方
- ○副読本や心のノートの活用の工夫
- ○心に響く資料の選定と教材の見方
- ○複数時間の取り扱いの工夫
- ○資料提示・発問・板書・話し合いや書く活動等の指導技術
- ○多様な手法
  （モラルジレンマ・モラルスキルトレーニング・役割演技・ゲストティーチャーの活用等）
- ○道徳の評価（子どもの見とり）

③ 教育活動全体を通じて
- ○全体計画と年間指導計画の意義や見方
- ○総合単元的な取り組み

④ 全校的取り組み
- ○児童生徒の実態と道徳教育の重点目標の共通理解
- ○教材・教具の共有化
- ○道徳の授業公開と校内研修の充実

4　特別活動・学級（学年）経営

(1) 全国学力・学習状況調査（平成20年）における本県の結果

○「将来の夢や目標をもっている」とする小学生が約90％，中学生は約70％とおり，全国平均よりやや上回っている。

○「学校で友達に会うのが楽しい」とする児童生徒が95％を越える。

○「人の気持ちが分かる人間になりたい」と思う児童生徒は，約90％おり，本県の中学生は全国平均よりやや上回っている。

○「学校のきまり・規則を守っている」とする児童85％，生徒が約90％おり，中学生は全国平均よりやや上回っている。

○「新聞やテレビのニュースなどに関心がある」や「今住んでいる地域の行事に参加している」「近所の人にあったときはあいさつをする」児童生徒の割合が，いずれも全国平均より下回っている。

本県の児童生徒は，夢や目標をもち，友達と会うことも楽しみにし，人の気持ちが分かる人間になりたいと願っていることが分かる。しかし，地域社会に対しての関心や学校外での人や物，こととのかかわりは好ましい結果とは言えない。

(2) 本県の特別活動の現状と課題

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官の杉田洋氏によると「特別活動にかかわる課題として，生活体験の不足や人間関係の希薄化，集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合って解決する力の不足，規範意識の低下などが顕著になっていること」をあげている。また，「好ましい人間関係を築けないことや望ましい集団活動を通した社会性の育成が不十分な状況」についても指摘している。そして，「特別活動の充実が学校生活の満足度や楽しさと深くかかわっているが，それらが児童生徒の資質や能力の育成に十分繋がっていない状況もある」としている。このような課題は本県にとっても例外ではない。

特別活動においては，これらの今日的課題を踏まえ，望ましい集団活動や体験的な活動を通して，豊かな学校生活を築くとともに，公共の精神を養い，社会性の育成を図ることを担っている。特に，よりよい人間関係を築く力，社会に参画する態度や自治的活動能力の育成を重視することが求められている。

小学校特別活動の目標の最も大きな改善点は，「自己の生き方についての考えを深め，自己を生かす能力を養う」ことが加えられたことである。これは，「集団の一員として目標をもつこと，将来に夢や希望をもって現在の生活を改善しようとすること，協調性や責任感，規範意識や人権を尊重する態度などにかかわる自己の生き方についての考えを深め，望ましい認識を持つことができるようにするとともに，自己のよさや可能性を集団の中で生かしてよりよい生活を築くことなどができる能力をしっかり育成する」ことを求めている。

そのため，児童生徒が自己発揮しながらよりよい人間関係を築き，社会性を高められるように，望ましい集団活動や体験的な活動を工夫し支援する必要がある。

(3) 特別活動並びに学級（学年）経営の充実に向けて

児童生徒が楽しく充実した学校生活を送る中で，協調性や責任感，規範意識や人権を尊重する態度，よりよい人間関係を構築する力等，身につけさせたい資質や能力を培うことに繋がるよう特別活動並びに学級・学年経営の充実に向けて，次のような視点で研修の充実を図りたいと考える。

○「集団の一員として目標をもつこと，将来に夢や希望をもって現在の生活を改善しようとすること，協調性や責任感，規範意識や人権を尊重する態度などにかかわる自己の生き方」についての考えを深めるために，道徳との関連を一層図る。

○特別活動においては，望ましい集団活動や体験的な活動を通して自主的・実践的態度を養うことを目的としているため，総合的な学習の時間をはじめ，あらゆる教育活動の中で『やることによって成す』ような実践の場の充実を図る。

○児童生徒が主体的に企画・運営する話し合い活動や係活動等の充実を目指し，発達段階を踏まえ，児童生徒の実態に即した活動のねらいや内容，年間を見通した計画，活動の工夫や指導技術等について研究を深め，共有を図る。

○社会性を育成する視点についての理論と実践方法について研修を深める。その一つの視点として，異年齢交流活動としての児童会活動や生徒会活動，クラブ活動等の既存の活動のよさを見直し，その改善点や工夫について考える。
○活動内容「(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全」の勤労観を養うことや食育の充実が求められている中，児童生徒にその意義や重要性について理解を図ったり，他教科・領域と関連を図ることで活動を充実させたり，様々な人材を活用する等の工夫を行う。
○学級・学年経営の意義や重要性とその内容や技法について理解を深める。
○自己肯定感や自己有用感を高め，よりよい人間関係の構築に繋がるような手法について理解と技術を高める。

5　生徒指導

生徒指導とは，「一人一人の生徒の個性の伸長を図りながら，同時に社会的な資質や能力・態度を育成し，さらに将来において社会的自己実現ができるような資質・態度を形成していくための指導・援助であり，個々の生徒の自己指導能力の育成を目指すものである」と定義されている〔「生徒指導資料第20集」(昭和63年文部省)〕。

学校が教育目標を達成するために欠くことのできない重要な機能の１つと言える。

(1) 全国学力・学習状況調査（平成20年）における本県の結果

○「自分にはよいところがあると思う」割合（平成20年）が，小学生で約70%，中学生約60%となっており，全国平均をやや下回っている。
○「学校のきまり・規則を守っている（小学生約85%，中学生約90%)」「いじめはどんな理由があってもいけない（小学生約95%，中学生約90%)」「人の気持ちが分かる人間になりたい（児童生徒共に約90%)」の割合は，小学生は全国平均とほとんど変わらないが，中学生はやや上回っている。特に「いじめはどんな理由があってもいけない」とする割合は，全国平均よりも約９%上回っている。学校のきまりを守っていない小学生が15%いることが気がかりである。
○「体の不自由な人やお年寄り，困っている人の手助けをしたことがある」の割合は，全国平均とほぼ同じではあるが，肯定的割合が約40%と低い。
○「将来の夢や目標をもっている」とする小学生が約90%，中学生は約70%とおり，全国平均よりやや上回っている。
○「学校で友達に会うのが楽しい」とする児童生徒が95%を越える。
○新聞やテレビ等のニュースへの関心（児童生徒共に約60%）の低さ，地域行事への参加（全国平均と比べ小学生約は15%，中学生は６%下回る）の少なさ，近所の人へのあいさつ（児童生徒共に全国平均より約10%下回る）の不十分さ等から，地域や社会への関心の低さやかかわり方の弱さが感じられる。

(2) 生徒指導の現状と課題

テーマ設定の理由でも述べたが，児童生徒の抱える課題として，自制心や規範意識の希薄化，生活習慣の確立の不十分さ，いじめの問題，自分に自信がある子どもが国際的に見て少ない，学習や将来の生活について無気力であったり不安であったりする児童生徒の増加，社会性が未発達でコミュニケーション能力が低く，対人関係がうまく結べないこと等が挙げられる。

今回の全国学力・学習状況調査の結果から，本県の児童生徒は，「いじめはどんな理由があってもいけない」「人の気持ちが分かる人間になりたい」「将来の夢や目標をもっている」「学校で友達に会うのが楽しい」とする児童生徒が比較的多く好ましいことだと言える。

しかし，暴力行為が平成18年度614件となっており，対人暴力が小・中学校ともに増加している。いじめについては，平成18年度の発生件数が740件で，前年度より377件増加している。不登校児童生徒数は，平成19年度1,707人と前年度より5%増加している等の現状がある。

また，自分のよさを見出せない児童生徒が30～40%いることや，「体の不自由な人やお年寄り，困っている人の手助け」をする児童生徒の割合の低さ等，地域・社会とのかかわりについて弱さがあると言える。

これらの課題を解決すべく，効果的に取り組むには，学校と家庭や地域，関係機関との連携・協

力が重要となる。

(3) 自己実現に向けて

マズロー(1971)は「自己実現」とは，自分の能力，可能性を発揮し，創造的活動や自己の成長を図りたいと思う欲求としている。「マズローの欲求階層理論」によると，人間の欲求は以下の５段階の階層となっている。

第１段階「生理的欲求」‥‥ 空気・水・食物・庇護・睡眠・性等の根源的な欲求
第２段階「安全への欲求」‥ 安全・安定・依存・保護・秩序への欲求
第３段階「親和の欲求」‥‥ 愛されること，家族の中に居場所があり自分が愛されることへの欲求
第４段階「自我の欲求」‥‥ 自尊心・尊敬されることへの欲求
第５段階「自己実現」‥‥‥ 自分の能力，可能性を発揮し創造的活動や自己の成長を図りたいと思う欲求

人間は「生理的欲求」「安全への欲求」「親和の欲求」「自我の欲求」の４つの欲求が満たされて初めて「自己実現」を願うのである。

「本県の高校中途退学の実態と分析」（平成17年３月　沖縄県立総合教育センター）によると，幼児期からの「食事・就寝の基本的生活習慣」について，高校中退生の約60％が「食事・就寝（両方またはいずれか一方）が不規則」，約70％が「家族で一緒に食事を摂っていない」等，自己実現への第１段階である「生理的欲求」でさえも十分満たされてはいなかったと報告している。

また，「家族でいつも一緒に食事を摂っていた中退生がわずか25%ということは，第２・第３段階の安全や安定，家族の中に居場所があり，愛されることの欲求さえも満たされていないということが分かる」と分析している。「自己実現」に向かうために，第４段階までの要求を満たし，子どもが自ら自己実現を図ろうとする意欲や態度を育てたいものである。

(4) 基本的生活習慣の確立に向けて

基本的生活習慣とは，将来の自立的な生活や調和のとれた人間形成にとって必要な生活習慣のうち，特に基本的なものを言う。個人の生活にとっての基本的な生活習慣として，食事・就寝・排泄・清潔・衣類の着脱等がある。集団や社会生活の維持と発展にとっての基本的な生活習慣として，時間を守る，約束を守る，あいさつをする，がまんをする，公衆に迷惑をかけない，人の話を聞く，場にふさわしい服装や言葉遣い等の礼儀等がある。〔「教育課程 重要用語300の基礎知識」(1999年明示図書)〕

基本的生活習慣のほとんどは，本来家庭でしつけられているべきものである。しかし，基本的生活習慣の確立の不十分さが課題となっており，学校での生活や学習にも影響を及ぼしている。

基本的生活習慣を確立するためには，家庭任せだけでなく，保護者や地域と学校が連携し協力し合うことにより一層効果を上げることができる。とは言うものの，家庭で担う役割が大きいため，学校は保護者に対し，基本的生活習慣の大切さを十分理解させ，各家庭の実態を踏まえ，できるところから確実に実行するよう支援することが望ましい。

例えば，各家庭で次のようなことを話し合わせたり取り組ませたりする。

ア．起床・就寝の時刻を子どもと一緒に話し合って決め，自ら実行するように促す。
イ．夜早く寝かせようとするよりも，朝の決めた時刻にきちんと起こすようにする。
ウ．脳や体を目覚めさせるために，朝の光を取り入れ部屋を明るくしたり，朝食をきちんと摂らせるようにする。
エ．遅刻をせずに，ゆとりをもって登校する。
オ．１日１回は家族で食卓を囲みコミュニケーションを図る。その時間だけは，テレビのスイッチを切りテレビやＤＶＤ等の視聴をしないようにする。
カ．偏食をしない。
キ．決めた時間に勉強机に向かわせる。長時間だらだらと勉強するよりも，集中できる時間を決めて取り組ませ，次第に時間を延ばしていく。
ク．家庭学習の後，翌日の学校の学習用具の準備をする。
ケ．テレビやテレビゲームの時間を決め，長時間させない。

コ．家庭で読書をする日や時間を決め，家族みんなで読書を楽しむようにする。
サ．「お早うございます」「お休みなさい」「いただきます」「ごちそうさま」「ありがとう」「ごめんなさい」「こんにちは」等のあいさつをきちんとする。
シ．家庭での役割（仕事）を決め，責任をもってさせ，その頑張りをほめる。
ス．時や場にあった身なりや言葉遣いをする。
セ．地域行事があるときは，家族で参加し楽しむ。
ソ．出かけるときは，行き先や誰と一緒なのか，戻る時間等を告げる。

学校では，まず，児童生徒に基本的生活習慣の大切さを理解させたい。そして，生活調べを行い，自分の生活の課題に気づきかせたり，どのように改善すればよいのかを考えさせたり，クラスの友達の方法を参考にさせたりする等，児童生徒自ら基本的生活習慣の確立に取り組むよう意欲を高める工夫や，行動にうつしたり行動が持続できるように側面から支援したい。あわせて食育を推進することも，より効果的だと考える。

地域や関連機関は，地域ぐるみで「早寝，早起き，朝ごはん」運動が展開できるよう家庭や学校をサポートしていくことが望まれる。

(5) 自己肯定感を高める

自己肯定感（Self-esteem）とは，「新教育心理学事典」（1985年金子書房）によると「自己を価値ある存在であると思う心情（自尊心）」，「社会心理学事典」（2002年有斐閣）では「自己に対する評価。自信の上位概念であり，時間的に変化しにくい認知である。肯定的に評価していれば自尊心が高く，否定的に評価していれば自尊心が低いとする。一般的に人間は自尊心を高く維持する，あるいは高揚するよう動機づけられている。」と説明している。

テーマ設定の理由でも述べたが，自己肯定感や自己有用感の低い子どもは規範意識も低く，自己肯定感の低い生徒には規範意識の授業が響きにくいという結果が得られている。また，東京都小学校道徳教育研究会調査部は，「自己肯定感の低い児童ほど，①規則や決められた仕事に反発する傾向が強い。②社会的によいと見られていることにも否定的という傾向が見られる。」と研究報告（平成11年度）をしている。これらのことから，自己肯定感を高めることは大切だと思われる。

自己肯定感を高めるためには，自尊感情を高めることが大切であり，「自信」の上位概念とされていることから，まず「自信」を育てることが大事である。あらゆる教育活動の場や家庭・地域において児童生徒個々のよさを児童生徒本人に気づかせ実感させていきたい。また，自己発揮し自信に繋がるような活躍の場を多く提供できるようにしたいものである。

(6) 規範意識を高める

規範（社会規範）は，目的やその成立過程に着目すると「法（ルール）」「習慣（マナー）」「道徳（モラル）」の３つに分類整理することができる（「現代社会学事典」1984 年有信堂高文社）。

文部科学省及び警視庁が作成した「児童生徒の規範意識を育むための教師の指導資料」（2006年）において，規範は「人間が行動したり判断したりする時に従うべき価値判断の基準」，規範意識は「そのような規範を守り，それに基づいて判断したり行動しようとする意識」としている。

「生徒指導体制の在り方についての調査研究－規範意識の醸成を目指して－」（平成18年国立教育政策研究所）は，規範意識について，次のように説明している。家庭において，あいさつ・服装等の躾け，規則正しい睡眠や食事等の基本的な生活習慣，または家庭の手伝い等に関する教育を土台としている。学校教育において，規範意識は，家庭教育での土台のもとに，生徒指導，教科指導，道徳教育及び人権教育等のあらゆる教育活動の中で，校則，服装，時間の厳守，規律ある集団行動，あいさつ等の具体的な指導を通じて育成される。

また，全ての教職員の指導がぶれることなく，「『当たり前にやるべきこと』を『当たり前のこと』として徹底して実施する」必要や児童生徒の抱える問題の状況によっては，教育相談等を通じて，その背景や内面の悩み等を聴取し，アセスメントを行い，適切に対応することが重要であるとしている。

指導・支援にあたっては，家庭や地域の協力が不可欠であり，家庭や地域の協力を得るためには，学校が積極的に生徒指導の実態や体制に関する情報提供をすることが重要だとしている。そして，保護者・地域・関係機関等，多様な人材・機関と協働した指導体制づくりを推進したい。

(7) これからの生徒指導

「生徒指導体制の在り方についての調査研究－規範意識の醸成を目指して－」（平成18年 国立教育政策研究所）によると，生徒指導をめぐる状況は時代と共に変化するものの，その内容から，生徒指導の性格として，次のような３点を挙げ，これから求められる生徒指導について述べている。

ア．児童生徒の人格の育成を目指す発達的な生徒指導

イ．現実の問題等に対して適応したり回避したりするための予防的な生徒指導

ウ．問題行動等に対する規制あるいは対症療法的な生徒指導

「ウ」は問題が起こった場合によく指導がなされている。しかし，これからは，ことが起こってからの対症療法的な生徒指導中心ではなく，「ア」や「イ」の生徒指導がより求められると考える。「ア．人格の育成を目指す発達的な生徒指導」や「イ．予防的な生徒指導」の生徒指導を行うためには，アセスメントによる児童生徒理解が欠かせない。

これからの指導体制の在り方としては，生徒指導が有効に機能するよう，生徒指導部とそれを支える全教職員の一致協力した生徒指導体制の充実と強化，関係機関・少年法や児童福祉法に関する知識や教育相談のスキル等の教職員の専門性と共同性を発揮，そして，家庭・地域の協力が必要不可欠であり，その協力を得るためにも生徒指導体制に関する情報提供が重要となる。多様な人材・機関と協働した指導体制作りを推進したい。

Ⅵ　終わりに

今回，次のような視点で調査研究に取り組んだ。

１　「全国学力・学習状況調査」の結果を分析・考察することにより，本県児童生徒のよさと課題を具体的にするとともに，身につけさせたい力を把握すること

２　学習指導と生徒指導を関連させて支援活動を総合的に考えること

３　これまでの数々の調査研修の成果を活用し，これからの教育活動支援に有効に活用すること

そして，「全国学力・学習状況調査質問紙調査」の結果を分析・考察することにより，本県児童生徒のよさと抱える課題が明確となった。例えば，将来の夢や目標をもっていたり，学校で友達と会うことを楽しいと思えたり，いじめに対しどんな理由があろうといけないと考えたり，人の役に立つ人間や人の気持ちの分かる人間になりたいと願ったり，「自分によいところがある」の割合に対する「失敗を恐れず挑戦している」割合等が，比較的高いことである。また，学習習慣として，家で学校の授業の予習や復習をしている割合やテストの間違いを見直し勉強する割合，小学生においては学校の授業以外の１日当たりの学習時間や読書時間等も全国平均と比べ上回っており好ましいことだと言える。

一方，「朝食を毎日食べている」や「自分によいところがあると思う」，「家で学校の宿題をしている」，「ニュースや地域の歴史・自然への関心」，「地域行事への参加」，「近所の人のあったときのあいさつ」，「人が困っているとき進んで助ける」等の割合については，全国平均より下回っている。また，食事中をしながらテレビをみている割合は全国平均よりも上回っている。小学生においては，「決まった時刻に起床・就寝」や「夜10時以降の就寝」の割合が高く，中学生は，「１日当たり１時間以上学習している」，事前に学習用具を確認すること等の割合が低い。これらのことから，本県児童生徒の基本的生活習慣の確立の不十分さや，自分への自信の弱さ，生活基盤である地域社会への関心の薄さとかかわりの弱さ，それに伴う社会性の弱さ等が考えられる。

このような学習上の課題や生徒指導上の課題等について，我々教師は改善を図り，本県児童生徒のよりよい成長を願っている。そして，これまで教育実践に取り組んできた。しかし，今なお抱えている大きな課題に対し，教育研修機関である本総合教育センターとして，教育活動のより一層の充実を図るための支援が求められていると考える。

上記の３つの視点で進めた本研究内容を教育活動の工夫改善を図る際の参考にしていただくとともに，本調査研究をもとに総合教育センターにおける研修の充実に努めていきたい。

〈主な参考文献〉

文部科学省　平成 20 年８月　「小学校学習指導要領解説道徳編」　東洋館出版社
文部科学省　平成 20 年７月　「児童生徒が利用する携帯電話等をめぐる問題への取組の徹底について（通知）」
文部科学省初等中等局学力調査室・国立教育政策研究所　平成 20 年８月「平成 20 年度全国学力・学習状況調査調査結果概要」（小学校・中学校）
鳥取県教育センター　平成 20 年３月　「児童生徒の社会性の成長・発達に関する研究調査」

Benesse 教育研究開発センター　平成 20 年 11 月　「中間報告　学力向上のための基本調査 2008」
文部科学省　平成 19 年　「全国学力・学習状況調査」
内閣府　平成 19 年　「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」
河村　茂雄　平成 19 年　「データが語る②子どもの実態」　図書文化社
国立教育政策研究所　平成 18 年　「生徒指導体制の在り方について野調査研究－規範意識の醸成を目指して－」
沖縄県立総合教育センター　平成 17 年３月　「本県の航行中と退学の実態と分析」
広島県立教育センター　平成 15 年　「社会性の育成を目指した生徒指導の在り方に関する研究Ⅱ」
日本青少年研究所　平成 14 年　「中学生の生活と意識に関する調査」
中央教育審議会答申　平成 14 年７月　「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」
国立教育政策研究所　平成 13 年　「学習意欲に関する調査研究」
内閣府　平成 13 年　「少年非行問題等に関する世論調査」
文部省　平成 10 年　「子どもの体験活動等に関するアンケート調査」